女の言いたい放題誌

WIFE

わいふNO.245.

特集 病気とのつきあい

新連載 ミズ色の人間模様

新連載 夫に危機感を持たせよ

大月リライフBOOKS

ワーキングウーマン症候群

杵渕幸子著

女性の社会進出が女性自身にもたらした心の病

現代女性の活気の裏側に見えかくれするメランコリックな心に耳をかたむけながら、"心の痛み"の深層を洗い出し、立ち直りの出口をさがします。B6判・1400円

食の安全神話に異議あり

川口啓明著

科学ジャーナリストが食品情報の危うさを解く

一見「安全らしい」食品表示が氾濫する中で、さまざまな例をあげて食品情報の危うさを説き明かし、本質的な解決のために何が必要かを提示する。B6判・1400円

子育てと健康シリーズ

「寝る子は育つ」を科学する

松本淳治著

最新刊！

夢はなぜみるか、夜泣きのわけは、昼寝より午前寝のすすめなど、大脳生理学の科学的な視点から、子どもの成長にとっての眠りの大切さを説き明かします。A5判・1400円

このままでいいのか超早期教育

汐見稔幸著　その可能性と危うさを説く　A5判・1300円

子どもの心の基礎づくり

石田一宏著　乳幼児期の5つのチェックポイント　A5判・1300円

大月CDブック

さあ陽気にゆこう

高石ともや著

フォークソング年代記

人生は旅――歌って、走って、笑って、陽気にゆこうよ。家族・友だち・ふるさと・平和・人生……新録音で28曲も入っているCDは、何度聞いても楽しめます

菊判・4120円

大月書店　東京都文京区本郷2-11-9　電話03(3813)4651(代表)

最新刊

シリーズ エイズ・教育・人権

各巻定価 1,000円（税込）

エイズの授業

中学校・高校で行なった
エイズの授業の記録

北沢杏子 著

●NHKテレビ放映で大反響。中・高校生に向けて北沢杏子が実践したエイズの授業を詳細に収録。

子どもとエイズ

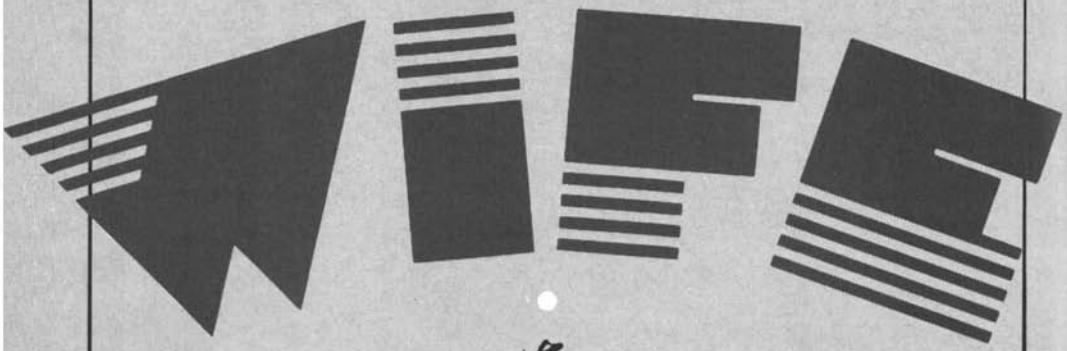
親と子がエイズを
ともに語りあうために

清水　勉・北沢杏子 共著

●アメリカから輸入された非加熱血液製剤からエイズに感染した子どもたちは日本だけでも600人も。HIV薬害訴訟の清水勉弁護士が実情を告発。家庭でエイズをどう語りあうかを北沢杏子が提起する。

性教育のパイオニア
アーニ出版

〒158 東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL03-3708-7321 FAX03-3708-7325



あなたのフリースペースです。

●女の言いたい放題誌　わいふ

目次

隔月刊　第二四五号

4 私のしごと場 12
会席料理溪聲庵・大江貴美子
写真提供／文・大江貴美子

10 ●特集　病気とのつきあい
不妊症治療は無効だったが
西尾ありか

14 ヘルペスの後遺症
伊藤てる子

17 ありがとう、アル中さん
松川直子

21 弟の円形脱毛症
中松ミナ子

25 つらいつらいアトピー性皮膚炎
匿名

30 喘息とともに
宇野厚美

35 「病は気から」と申しますが
花和　麗

39 ズバリ一言
浦川とめ・島津まさ子・石川喜子

43 エッセイスト・クラブ
須賀まり子・細谷登美
大沢陽子・広瀬サカヱ

52 マイ・ジョブ　マイ・プロフェッション
藤永洋子

54 新連載　ミズ色の人間模様
石川久代

60 おさない子を育てる
宇都宮典子

64 連載2　ともに生きる　―娘の発病そして臓器移植―
本庄たよ子

■イラスト・梅村苺・奥島千恵子・カステラネンコ・小島佳子・小宅昌枝
佐藤瑞江子・田沼千恵・鳥居禎子・西田淑子・山田京子

72 ワンポイント情報
私の愛読コミック
志村ユリ子・三好敬子・中尾和子

76 新連載 夫に危機感を持たせよ
赤松直祐

85 サーブレシーブ
野中詔子・豊城智子
佐藤玲子・高島直子

89 平成おったまげーション ⑪ 西田淑子

90 女の時事放談 7
政治浄化の決め手はどこに
参議院議員 堂本暁子
飯田和子・小野田正子
松田雅子・牟礼麻衣子

100 連載16 私の愛する外国人
布施木ユミ子

107 人間マンダラ
石井しのぶ・本田直子・黒崎和子

113 フリースペース
橋本慶子・嶋 たか子・細野清美

119 読んでみました
倉持和子・花岡由美子

121 ブック情報

124 コミック●痛快！一般人 ⑱ 栗田笑

128 情報コーナー
連載⑤

130 私を襲った老人問題
早川裕子

136 わいわいがやがや
十文字圭子・山口幸子・宮崎貴子
岡田美幸・長谷川正子・室井邦夫

次号投稿募集—141 投稿規定—142 編集だより—144
バックナンバー—23 各地で文章講座を—34
自費出版は〝わいふ〟へどうぞ！—75 お友達に〝わいふ〟を—118

■表紙イラスト・小沢恵子 ■レイアウト・工房はやし AD・林 佳恵

私のしごと場

12

会席料理溪聲庵（けいせいあん）
ハイツ溪聲庵　経営

大江貴美子

東京都世田谷区

撮影・佐々木恵子

五年ほど前、夫を亡くしてから家でできる仕事をと思い、姑や料理教室で教わった料理と、以前から稽古(けいこ)をしていた茶道と書道を生かして、予約制の会席料理（松華堂コースと郷土料理のほうとうコース）と貸席（着付教室と茶道の稽古用）を始めました。

▲お茶のお仲間と　初釜のとき

◀着付教室の先生と生徒さん

◀貸席でお茶のお稽古

◀渓聲庵のお客さまと

▲お客さまの準備をしているところ

▶いつも手伝ってもらっている姉と

二年近く「わいふ編集部」に勤めさせていただきました折、スタッフのみなさまからも色々と貴重なご意見やアドバイスをいただき、それらを参考にできたのは幸いでした。

調理師免許を取り、コーヒーや紅茶などの入れ方は喫茶ゼミナールに通って学び、材料仕入れの必要もあるかと五十二歳で思い切って車の免許も取りました。

▲念願の免許を取って、仕入れなどに大活躍の愛車の前で

◀箱根のリゾートホテル「メルヴェール強羅」で息子たちと

おかげさまで仕事は四年目を迎えます。だんだん慣れてきて、合間にゴルフ、旅行にと楽しむ余裕もでてきました。

また友人が主催している「マリポーサの会」という中・高齢者のための交流誌にボランティアで参加、事務局の手伝いをさせていただいております。

▲アウトドアライフのゴルフを友人たちと楽しむ

▲ニューヨークのトランプタワー前で姉とガイドさんと

▲伊勢参り

▲上野の都立美術館　自作の前で

平成6年4月開講

東京ヒューマニックス研究所の

ゲシュタルト・セラピスト養成講座

生徒募集

現在の仕事のために更に自己を高めたい人や、将来セラピストやカウンセラーをめざす方のためのセミナーです。今までのカウンセリングやセラピィで避けがちだった「性」をあらゆる専門分野から理解を深め、加えてゲシュタルト・セラピィの理論と技術を体験的に学習して、人の心層に複雑にからみあった、いろいろな問題解決のきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストをめざします。
特に、入学のための制限はありませんが簡単な面接があります。

〈就学期間〉 3ヶ年
〈開 講 日〉 4月15日（金）
〈面 接 日〉 2月18日（金）～3月18日（金）の
毎週金曜日　18:00～20:00
※面接は事前に電話で
申し込みをして下さい。

〈顧　　問〉 石川弘義（成城大学教授）
〈指導講師〉 大島　清（京都大学名誉教授）
ひろさちや（宗教文化研究所所長）
徳田良仁（医学博士
・日本芸術療法学会理事長）
管野　純（早稲田大学助教授）
石浜淳美（元小山市立病院院長）
小林信三（多摩大学総合研究所
助教授・医学博士）
荒川旬美（心理学博士
・ゲシュタルトセラピスト）他

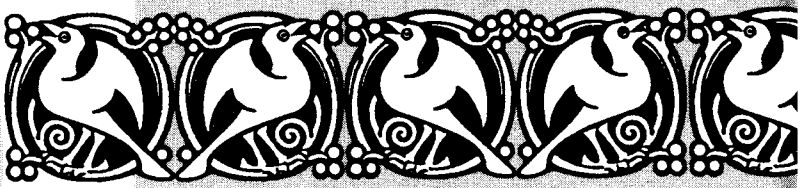
	1年目	2年目 前期	2年目 後期	3年目
カウンセラーコース	基礎学習 ゲシュタルト・セラピィ ワークショップ	講義 ワークショップ（共通）	カウンセラー 実習	
セラピストコース			セラピスト 専門学習	専門学習

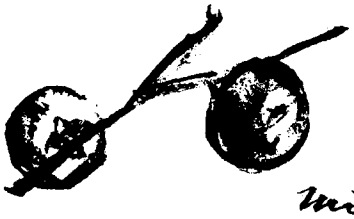
● 以上のお問い合わせ・お申し込みは下記まで

東京ヒューマニックス研究所
☎03-3492-2838
〒141　東京都品川区西五反田2—31—11
五反田永谷タウンプラザ904号

特集

病気とのつきあい





不妊症治療は無効だったが

大阪市平野区
西尾ありか

何の取り柄もない私にとって、皆勤賞はほんの小さな栄光でした。勉強嫌いでスポーツ好き、体は小さいけれど、明るく活発な女の子でした。

「そんな小さな体のどこにそんなエネルギーが詰まってるの？」

なんて言われて、得意になっていました。バスケットで鍛えた持久力も自慢の一つで、長距離走ではいつも上位に食い込んでいました。

そんな私に変化が訪れ始めたのは、短大を卒業して働きだしたころでしょうか。慣れない仕事に疲れて、バタンキューの生活でした。

それまであまり苦にならなかった生理痛もひどくなり、頭痛や吐き気が伴い、倒れ込んでしまったことも一度ならずありました。それでも五年間、ほとんど休むこともなく仕事を続け、一つ年下の夫と結婚しました。

仕事を辞めても生理痛はひどく、昔からの冷え性も年を追うごとにひどくなって、元気印はすっかり過去のものとなってしまいました。

仲間より少し早く結婚した私たちの回りは、独身生活をエンジョイしている者ばかりで、遊び相手には困りませんでした。親の過保護な目からも離れ、テニスを楽しんだり、夜遅くまで飲んだり、ＯＬ時代にすら手にすることのできなかった仲間との有意義な時間を、夫と二人で心地よく過ごしていました。

結婚して二年経ったころ、

「そろそろ、子供欲しいね」

と、どちらからともなく、そういう気になってきました。それまでも避妊していたわけでもなかったのですが、連日の夜更かしに、体は受胎能力を失っていたのでしょう。

年齢的にも落ち着いて、いつ妊娠しても大丈夫なように心の準備はできていました。

しかし、自分の小さな体からも、妊娠はそうたやすくないことを私は結婚する前から感じ取っていました。私の母もそうであったように、何らかの形で医者の手を借りなければならないと予想していました。

子供が欲しいと思うようになったら、それはいても立ってもいられなくなり、一日も早くと願います。三十歳になるまでには何としても妊娠していなければ、と自分で自分を追い込むようになりました。

（黄体ホルモン機能不全）

病院へ検査を受けに行ったのは自分の意志でした。そしてここから私の不妊症との闘いが始まったのです。

体の周期に合わせて、様々な検査が一カ月にわたり行なわれ、黄体ホルモン機能不全という病名を言い渡されました。自分の小さな乳房や思春期のころから悩んでいた手足の毛深さが、最後に不妊症という病気になって私に襲いかかったのです。

治療は投薬でした。ホルモン剤を毎晩一錠ずつ、一日も欠かすことなく飲みます。このホルモン剤は副作用のあるもので、飲み始めの三日間は吐き気に襲われ、ベッドからはい出ることができませんでした。

しかし、一週間ほどで薬にも慣れ、あとはこの薬さえ飲んでいればと期待を持って普通の生活をしていました。病気といっても不妊症の場合、子供さえ望まなければ何の苦痛もありませんから、まったく普通の生活です。

薬を飲み続けて一年、期待だけが膨らんだけれど、どこもよくなってはいませんでした。薬の量が増え、徐々にきつい薬に変えられていきますが、私の体には何も変化が見られませんでした。

「もう、このまま子供ができないんじゃないだろうか……」

私の不安は大きくなり、焦っていました。その間にも友達が次々結婚して、そしてごく当たり前に子供を産んでいきます。

この間まで影も形もなかったその小さな命が、母親の中でどんどん成長し、生まれ、そして一生懸命自分の意志を伝えるべく泣き声をはりあげています。母親の顔になっていく友達を見て、焦りは大きくなるばかり。

人前で笑顔は欠かせませんでしたが、一人になれば狂ったように泣いていました。

病院通いも楽ではありませんでした。三時間待って三分治療というのは、大病院の常識となって社会問題として新聞でも取り上げられていたほどです。無駄な時間でした。

でも、医師に頼るほかなすすべを知らなかったのです。

（溺れるものは藁をもつかむ）

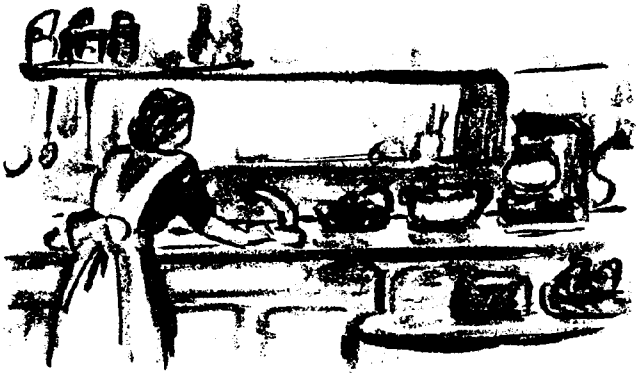
一年半にわたり薬を飲み続け、うんざりしていた私に医師は、排卵誘発剤という不妊症の代表的な治療法を勧めてきました。それは生理が終わってから排卵するまでの約十日間、毎日注射を打って子宮に刺激を与えるものです。

「溺れるものは藁をもつかむ」そんな心境でした。どんなことをしてでも子供が欲しい、そのためならこの際、何だってしてやる。そんな思いでした。

体外受精を考えられない私たちにとって、誘発剤は最後の手段でした。ほかにも実際は色んな方法があるのですが、副作用のことを考えると踏み切ることはできませんでした。

しかし、妊娠はうまくいきませんでした。最後の手段だと思った排卵誘発剤を使ってみても、私の卵子はドラマチックな受胎という出会いができず、はかなくも散っていくのです。医学の限界を感じずにはいられませんでした。

「病院へ行くのはもうよそう」



そう言い出したのは、夫でした。

「何も高い金払って、痛い思いすることない。二人でテニスやって、旅行行って楽しく暮らそうや」

短気で怒りっぽい夫が、二年間の不妊症との闘いの間にすっかり角が取れていたことに気付き、私は驚いていました。

それでもどうしても子供をあきらめきれずにいる私に、偶然の出会いがあったのは、三十歳を迎えたこの夏でした。

（原点に戻る）

以前勤めていた会社の上司とたまたま会う機会があり、その上司から元外科医のある先生を紹介していただきました。その先生は死体の解剖を長年していて、医学の限界を現場で生で感じ取ったといいます。ほとんどの死が、本来の病気と違うところが直接の原因となって、死に至っているそうです。

その先生の診察は驚くことに脈を診たり、ひざや腕を触ってみたりするだけで、ほとんどの私の体の症状を当ててしまうのだから、だまされているようでした。不妊で悩んでいることを告げると、大きく首を振って、

「こんな体じゃできるわけありません」

と、はっきりおっしゃいます。

「血小板が少ないうえに甲状腺がはれていて、妊娠どころかこのまま放っておいたらバセドー氏病になりますよ」と、逆に怒られる始末。

「排卵誘発剤を打ってるんですが」の言葉も、無駄の一言で片付けられてしまいました。

とにかく歩くことと、野菜と海草類を中心とした食事療法、ビタミン剤の類は決して取らないこと、そしてその先生が考えだした〝野菜スープ〟を毎日飲むことを約束させられました。

何を信じていいか分からない不妊症の闘いの中で、この先生の原点に戻るという方法は、実は私が一番探し求めていたものかもしれない。

副作用のある薬に頼るのではなく、自然の治癒力を生かし、体に悪いものは体内に入れないという方法。食品に含まれている添加物のたぐいが、不妊に関係ないなどとだれに言えるだろう。何げなく使っている洗剤や殺虫剤が人体に影響がないなどと言い切れるだろうか。環境汚染が確実に私たちの体を脅かしているのです。

自分の体にしっかりとした基礎体力がなくて、次なる新しい命を望むなど厚かましいにもほどがある。先生はそんなふうにおっしゃってるようでした。健康になれば放っておいても自然に妊娠します、とはっきり言った後、

「頑張ってください」

と、初めて笑顔を見せてくださいました。

さあ、ほんとうに妊娠できるかどうかはこれからの見ものです。早速〝野菜スープ〟をつくり、ひじきやわかめ、貝類、野菜と米を一生懸命食べ、そして歩いています。

「体力づくりに専念するから、一年間は黙ってみててね」

そう言うと、夫は快く承諾してくれました。この人、いつの間にこんなに優しくなったんだろう。

（ほんとうに大切なものは）

不妊に悩む多くの女性の中で、二年間の不妊治療というのはまだまだ短いほうです。いつまで続くとも分からない闘いをここで放棄するのではなく、うまく付き合っていこうという気持ちにまでこぎつけたのです。

大切なことは子供を産むことじゃなくて、そこにある二人の気持ちなんだということに気付くことができたのです。

これまでは子供ができなければ、ほんとうの夫婦にはなり得ないように思っていましたが、この二年間で私たちは、まがりなりにも夫婦の絆（きずな）みたいなものを、子供ができないことで逆に、感じることができました。

子供はほんとうにできるかどうかは分かりません。でも、もしできなくてもそれとは引き換えに、私たちはとても大切なものを得ることができました。

子供が普通にできていれば、通り過ぎてしまうような小さなことですが、私たちにはとても大切な期間だったと思います。

明日もまたテニスです。頑張らなくっちゃ。

ヘルペスの後遺症

愛知県春日井市
伊藤てる子(62歳)

(ついに入院)

三年前の十月十日、この日は体育の日で祝日だった。夜十時過ぎ、隣で夫はすでに軽いいびきをかいていた。

「すみません、痛い、苦しい、助けて、もう我慢も限界、入院させて」「だから早く休んで治せってあれほど言ったのに、こんな夜中に頼めるか、何とか朝まで辛抱できんか」

「もうだめ、死んじゃいそう、ねえ、お願い助けて」「おれは、こんなに遅く失礼すぎて頼まんぞ」と夫。

私はまくら元の電話で入院を依頼し、とるものもとらずガウン一枚羽織ってタクシーに転がり込んで病院へと走った。このとき夫も同行してくれた。

痛さを表現すると、あと一、二分で分娩に臨む、そんな痛みが間隔なしで差し込むように痛い、まさに極限状態だった。

二週間前から兆候があって通院していたので病名はヘルペスと分かっていた。

昔の人は帯くさといっていたそうだ。今は横文字でヘルペス、正式な医学名は帯状疱疹という。私の症状はヘソを中心にして、左の腹部から背中半分にかけて十センチ余り帯状に湿疹が出ている。

初診のとき医師からは即座に、「ヘルペスだ、仕事を忘れて休養を」と促された。しかし、重要な仕事があってどうしても休めないと判断した。それに、夫から家にいて子供を育てるように泣いて懇願されたのに振り切って働いてきた。長年にわたりただの一度も病気で休んだことはない。仕事が好きで好きであれほど頑張ってきたのだ。

四十年余勤めあと半年で定年を迎える。立派に勤めあげ有終の美を飾りたい。また、それを子供たちに大きな誇りとして伝えたい。そんな思いに遮られていた。ところが痛みは容赦なく私を痛めつける。快方どころか日増しに湿疹は増え続け、一睡もできず痛みは前より一層激しくなるばかり、とうとう激痛に耐えきれなくなってついに入

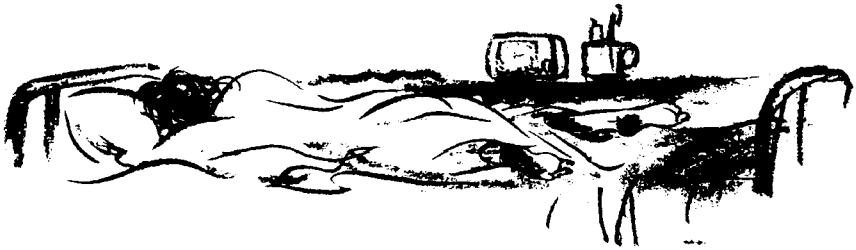
院を余儀なくされた。

（ヘルペスの症状）

最初患部になるところの皮膚が、ボーっと赤くなる。そのうち小さい水膨れができる。水膨れがどんどん増えて、ちょうど、帯を無造作にぱっと広げたように皮膚の末梢神経の走る方向にできる。そのほかに神経痛のような痛みを伴う。付近のリンパ節がはれ、発疹する前から食欲不振はもとより発熱、激しい痛み、動悸もする。顔面にできると目まいや難聴、失明と厳しい後遺症が残る。二、三週間して発疹が黒ずんできてかさぶたになり、取れてしまっても引き続き神経痛ようの痛みは長く残る。免疫は終生免疫で再発することはない。発病の原因はウイルスである。湿疹がぐるっと体を巻けば皮膚呼吸が困難になり、死に至るといわれている。

（痛みは止まったが）

入院してすぐ、「栄養剤と痛み止めをしました。少し様子をみて」と言われた。失神しそうに痛かったのがうそのように痛みが消えた。数時間熟睡できた。しかし、目が覚めたとたんまたまた、猛烈な痛みが襲った。再び注射をしてもらう。点滴も十日ほど続けた。二週間以上もなかった食欲が出てきた。それでも一日に何回もこらえきれない痛さが私を悩ませた。



二週間目ごろだった。注射がしてほしいと伝えたら、「これ以上注射をすると依存性が災いして治りませんよ、これは劇薬でモルヒネです。注射はやめて栄養と休養と気力で」と、冷静に諭すように言われ、まるで引導をわたされたような気持ちがして心が揺れた。

（後遺症との付き合い）

私は、十四年間全館完全冷房のところで執務していたので、神経痛の遠因が過去にすでにあったように思う。手が硬直したり足腰が痛かったりした。そこへヘルペスがプラスしたので普通の人より重症だったと思う。

十八日間で退院後も完治を願って、東

奔西走治療に手を尽くしたが、一朝一夕には治らない。最近は、これくらいのこともういいやとあきらめたらとても気が楽になった。自分自身の努力と実践で自然治癒させたいと次のことに配意して暮らしている（心と体の調和から）。

一、薬湯につかり体を温め身も心もリラックスする（投薬の力に頼らない）。
二、一歩でも多く歩いて足腰を鍛える。
三、根菜類、カルシウム、繊維質の食品を多く摂取する。
四、文字に親しみ文化教養を高める。
五、社会の情報をそしゃくする能力を養う。

（終わりに）

人はだれでも健康で生涯医師とは無縁でありたいと望んでいる。しかし、齢を重ねるとそうもいっていられない。とりわけ第一線で活躍する有職者には病気は致命的ともいえる。

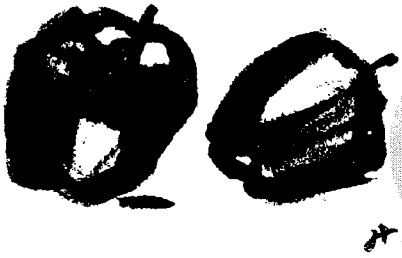
私は病気をしてみて、健康であってこそ仕事も家庭も調和が保たれるのだと痛感した。人生八十年時代といわれている今日、私などまだまだ未熟で若輩者だ。病は気からという明るい気持ちと、常に新しいことへの挑戦意欲を持ち研鑽を積みたい。

ヘルペスとの出会いは私の人生に大いなる反省と感謝をもたらした。プロであることの気負いから自らを重症患者に仕立ててしまったことや、医師や家族の忠告に耳を傾けなかったことのマイナス。濃厚な治療は益より害の恐れのあることなどなど、今後の対応に非常に勉強になった。

長い期間を要して最悪の状態を招いたものは、短期間で元どおりを望むことは無理なことが骨の髄にしみ込むほど分かった。

いずれにしても老いていきつつあるのは現実で回避するすべもない。自分だけが病魔との闘いを強いられていると思えば自分自身が無性に惨めだ。この病を快く受け入れて共生しながら愉快にと思えば気もほぐれる。

人生はだれにも等しく一回だけだ。輝かしい二十一世紀は目前に迫っている。大いなる夢と希望に燃えて生き続けたい。いとしい子供たちのためにも、そして寛厳よろしい夫のためにも、この命の灯を明々とともしたい。



ありがとう、アル中さん

埼玉県上尾市
松川直子(31歳)

「あの人、アル中なんですって」

そう言われたら、どんな人を想像するだろうか。ドヤ街で道路に寝ている人、暴れて物を投げる人。私もそうだった。自分とは縁のない、遠い世界のことだと思っていた。しかし、アル中は私のすぐ隣にいたのだった。

夫の様子がおかしいことに気付いたのは、次女を妊娠した直後の平成二年二月だった。仕事を休み、ビールを飲み続け、かたくなに医者に行くことを拒む。

ようやく医師の診断を受けたのは十日ほど経ってからだった。結果は即、入院。つわりの治まりきらない体で、毎日見舞った。

一週間で退院したが、酒をやめる気はなかったようだ。だが、このとき、夫がアル中とはまだ思えなかった。肝臓が悪いだけ。そう思い込んでいた。

退院後、夫は鬱状態になり、とうとう両親の元へ帰ってしまった。「そうか、夫は鬱病だったのか」

まだアル中とは認めたくなかった私。離婚したい、とも思った。しかし、専業主婦で妊娠中、何の資格もなく、どうやって生計を立てていくのか。あまりの困難さに、考えることさえ嫌になった。

別居中、荷物を取りに戻った夫の、別人のような恐ろしい目つきに、血も凍る思いがした。その後、一カ月ほどで夫は自宅に戻ったが、時々急に怒りだしたり、「出て行け」と口走ったりして、心の休まるときはなかった。

九月に次女は無事生まれ、夫は落ち着きを取り戻した。家族四人、半年ほどの平穏な生活。だが、長くは続かなかった。

翌年四月末、酔って駅の階段から落下し、顔面に大きな傷をつくって帰宅し、それきり仕事に行かなくなった。飲酒を続けると、傷はまったく治らない。目の回りは紫色にはれあがり、傷口は膿み、一日中寝たきりでもビールだけはまくら元にあった。

そのまま三週間。有給休暇を使い果たし、職場の上司が訪ねてきたが、布

団をかぶって会おうともしない。私がいないすきにビールを買いに行っては道路で倒れ、近所の人が救急車を呼ぶ。あとから私が病院に駆けつけることも二度、三度。とうとうまた入院することになった。でもそこは内科の病院。アルコール専門ではないので、約一カ月で退院した。

仕事に復帰しても朝から飲酒し、職場で倒れて病院に担ぎ込まれた。上司はしばらく仕事はせずに、完治させてから復帰してほしいと言い残して帰った。夫は少しずつ「自分はアル中かもしれない」と思い始めていたようだ。アルコール専門病棟のある精神病院への入院をやっと承諾した。しかし、自宅に近いところは避け、東京の病院を選んだ。

専門病棟に三カ月入院すれば、きっとよくなるに違いない。夫も私もそう思った。九月に入院、私も八月から三歳と十カ月の二人の娘を保育所に入れ、働き始めた。

しかし、母子だけの家庭で仕事をするのは、想像以上に大変だった。十月には風邪をこじらせて肺炎を起こし、私まで入院する事態に陥った。

子供は実家に預けたが、もうあんなことは繰り返したくない。それからは家事は最小限、とにかく健康には気を配った。夫のことはほとんど忘れていたようだ。

そして年末、夫が退院した。もう大丈夫。治ったんだ。これからは、ゆったりパートで働きたい。もう一人、赤ちゃんが欲しい。そんな夢まで描いていた矢先、夫はスリップした。断酒していたのに、再び飲酒することをスリップというのである。がっかりした。ほんとうにガックリきてしまった。それから、以前の状態に戻るのに時間はかからなかった。

四月には仕事を休みだし、連休前には、失禁することさえあった。当時一歳半の次女ならともかく、夫の下の世話は情けなくて涙が出た。

救急車で運ばれた病院では暴れて手がつけられなくなるし、やっとの思いで押し込んだ内科の病院からは、その日のうちに脱走して帰ってきた。

職場の上司からは、退職届を出すように催促され、あとは印鑑を押すだけになっていた。このまま欠勤し続ければ、退職金も出ないとさえ言われた。それでも医師の診断は拒む。五月末には本人の体が酒を受け付けなくなり、禁断症状が出た。

痙攣(けいれん)し、立つことも座ることもできず、中腰のまま震え続けた。心配になって病院に電話をし、指示を仰いだ。「血を吐いていないのなら、すぐに命に別状はない」と言われ、様子をみた。約二時間後痙攣は治まり、その夜かすれた声で、

「入院する」
と言った。長い長い二カ月だった。
この間、私は離婚のことばかり考えていた。仕事はしていたが、子供の保育料程度の収入でしかない。でも生活保護を受けてもいい。アパートは借りられるか。県営住宅は母子世帯を優先してくれるらしい。正社員になるにはどうしたらいいのか。夫の病気よりも私の身の振り方を心配していた。
夫はいっそ、酔って道路に寝ているところを車にひかれてくれればいい、保険金も入るし。そんな恐ろしいことまで祈る始末だった。

今度入院したのは、自宅から車で十五分の県立精神保健総合センター。もちろんアルコール専門病棟である。近くなったので、家族を対象とした教室にも参加した。本人、家族、ケースワーカーを交えての話し合いもした。
その中で、「お酒をやめられないのは、夫の意志が弱いから、人格に問題があるから」と思っていた私は、目からうろこが落ちる思いをした。
アル中（アルコール依存症）は病気なのである。ガンや脳卒中や骨折などと同じように。本で読んでいたはずなのに、理解していなかった。苦しそうに「仕事に戻る自信がない」と訴える夫を見て、離婚どころではないと認識を改めた。
それからは、積極的に患者の家族のミーティングに出席し、たくさんの人の話を聞き、また私もたくさん話をさせてもらった。
あっという間の三カ月が過ぎ、八月末に退院した夫と、ささやかなお祝いをした。前回の退院時は、「ああ、帰ってくる」と、かなり嫌な思いで吐き気がするくらいだったのに比べ、雲泥の差である。
あれから一年と少しが過ぎた。幸い夫はスリップをせずに、元気に仕事をしている。私は、臨時ではあるが働き、子供たちは保育所に。
もちろん、これでアルコールの心配がなくなったわけではない。生きているかぎり続くだろう。
断酒を続けるには、自助グループに参加すること、抗酒剤を飲むこと、医師に継続的にかかること、この三本柱が大切とグループで教わった。
夫のために、と夢中になって酒を隠したり、説教したりしても、徒労に終わることが多い。でもだれだって初めてアル中にかかったら、何とか私（妻）が酒をやめさせなければと頑張ってしまうのは、無理もないことだろう。冷静でなんていられるはずがない。そんな、今まっただ中にいる家族の救いに

なるのが自助グループだろう。
もし、家族の飲酒問題で苦しんでいるなら、保健所や精神科の病院と連絡を取り、患者本人より家族がグループに参加することをぜひお勧めする。そこでありったけの不満や愚痴を吐き出し、泣いたり笑ったりしているうちに、一人で悩んでいたことがうそのように心が軽くなるから。
病院の家族教室、地域の断酒会やＡＡ（アルコホリック・アノニマス）など、色々なグループがあるから、自分に合った会に当たるまで、幾つでも訪ねてみるのもいい。家で酒浸りの患者と向き合っているより、気が紛れることは確かである。ただ、それによって患者に変わってほしいと思っていると、また苦しくなる。
「どうして、私がこんなに一生懸命にグループに出ているのに、お酒をやめてくれないの」と、患者を責めたくなってくる。私が参加したいから、私が楽しいから、グループに出る。それだけでいいと思う。そして、もし患者自身が変わることがあれば、もちろんうれしいことである。
この病気にかかわって、三年が過ぎた。落ち着いている今だから言えるのだろうが、病気と出会えてほんとうによかった。患者に対してだけでなく、子供や家族、知人に対しても、「私がこんなにしてあげているのに、どうして私の思いどおりにならないのか」と悩まなくなったことが、一番の収穫だろう。

私は私、子供は子供。夫は夫の思いどおりにするのであって、してもらうわけではない。
当たり前のことが見えなくなっていたことに気付けたのも、病気になったお陰だろう。また、離婚しようと思い詰め、仕事を探し、無理をして再就職してしまったことも、私にとってはよかった。夫は、
「おれが病気になったお陰だぞ。感謝してもらわなくちゃ」
と恩を着せるが、私も、
「そうね、すごく感謝しているわ」
と笑って答えている。
病気のさなかにいるときは、こんな会話ができるなんて、想像もできなかった。何とか持ちこたえてよかったと、今は言える。先のことは分からないが、心配してもしょうがない。
今、病気のさなかにいる方、どうか希望を捨てないでほしい。考え抜いて、離婚に至ることもあるだろう。それも一つの選択だと思う。
いずれにしても、アル中は病気。治療のルートに乗せれば、回復していくはずだから。
再びみんなで笑い合える日がきっと来ることを信じて、頑張ってと心から祈っている。

弟の円形脱毛症

和歌山県日高郡
中松ミナ子

理髪店から帰るなり弟は母の鏡台の前で右に左に角度を変えては頭の中をのぞいていた。

いつもの理髪店で「坊、ハゲが一つできているで。まあ、すぐ生えてくるやろうけどなァ」と気楽に弟は告げられたそうだ。

だが、これが弟と円形脱毛症との長い長い付き合いの始まりであった。

今から四十数年前のことである。

母も私も「そんなの気にすることないよ、すぐ元どおりに生えるから……」と気にもしていなかったのに……。

そして弟のそれは次第に頭部のあちこちに発生し始めたのである。

当時、もっとも苦しい生活の中で母は方々の病院へ弟を連れて行った。

「かわいそうに神経が細い子やから何か心に大きな衝撃を受けたようなことがあったのではないかって、お医者さんが言うてはった……」

母は思い当たることがあると私に話しだした。

それは父が応召され、アッという間に戦死、父が帰るまで、と精を出して頑張っていた母も到底、戦後の荒波の中を女手一つで家業を継続させるのが困難となり、いつかわが家はいわゆる家財道具の売り食い生活を続けて、その挙げ句の果て父方の叔父が一つの結論を出したのである。

戦後、事業を順調に伸ばして勢いのあった叔父は義姉に当たる頼りない母にも高圧的であった。

叔父には年子の娘があったが、男の子に恵まれなかったので弟を引き取って兄貴に代わって面倒を見るというのである。しかし、女の子は引き取れないと断言したという。それを廊下で耳にした小学六年の弟は座敷に飛び込んだ。そして「僕は嫌や！　母ちゃんや姉ちゃんと一緒に暮らすねんから。僕が働くから！　おっちゃんとこなんか行かへん！」と涙をポロポロこぼしながら叔父をにらみつけて叫んだそうだ。

弟にこの厄介極まりない円形脱毛症という病気がとりついたのは、まさにこの事件後、間もなくのことだった。

さて弟の脱毛は、その後も全快することなくいつか中学生になっていた。

そろそろ思春期、学校では心ない悪ガキ連中に冷笑されるやら女子生徒からは冷たい目を注がれるため、登校を嫌がるようになった。思い余った母は担任に学校の中、授業中も帽子の着用を願い出たが「規則に反す」と許可されず弟は欠席がちになっていった。

そして病院通いは相変わらず続いていたが、「自律神経失調症」（この病名ほどあいまいなものはないと思うが……）だの「悪性の円形脱毛症で現代医学でも完治するのは非常に困難」と診断され母はすっかり落胆していた。

この円形脱毛症とは痛みもかゆみもなく、ある日、指で押した程度の小さな脱毛部分が見つかるやアレヨアレヨの間に直径二センチ、三センチと拡大していくのである。その反対に脱毛部分にすっかり黒髪が戻っていたり……。

元来、陽気で優しい性格の弟であったから、私たちの前ではこの件について多くを語らなかったが、すでに思春期から青春期へのはざまの中でひそかに心は暗く沈み苦しみ悩んでいたことであろうと思う。

さりとて日常の暮らしの中でたびたび口に出してしまうのも姉としてもためらいがあって、ただ何かに向かって祈るしかなかった。

いつの間にか発病後、六、七年が経過して弟も働いて蓄えたお金で脱毛症の名医と呼ばれる医師を自分で調べてはどこまでも出かけていった。

しかもそのころには脱毛症として最悪の状態でまゆ毛まで抜けていたのである。

父譲りのすがすがしいまゆ毛は、その痕跡さえ失ってしまったのである。

色白の顔面からまゆ毛を取り除いた弟の顔はまことに哀れで正視するさえ忍びなかった。

弟も毎朝、洗面後、ひそかにまゆ墨を使って他人の目を一瞬なりともごまかすための努力をしていたが……。

あるとき「姉ちゃん、僕今度東京へ治療に行ってくるつもりや、何でも偉い先生がいてるそうやから……」と弟は今までになく張り切っていた。よほど明るいニュースをキャッチしたようであった。

「行ってらっしゃい！　私も少しは費用出すよ」と私も弟が帰阪したときの晴れやかな表情を思い描いて声を弾ませ大きな希望を持ったのである。

一カ月ほど後弟は「やっぱりあかん」と苦笑して帰ってきた。もうこのころには弟も円形脱毛症との長い付き合いにあきらめの覚悟ができていたらしく、その三進一退の病状を自由にさせているかのように振る舞っていた。

あのころようやく売り出された〝かつら〟を購入した弟は特別注文をし惜しげもなくスペアーまで用意した。当時はかなり高価であったと聞くが―。

現代のように進んだ技術で生産される〝かつら〟なら通気性も着用感も優れているだろうが、潔癖性の弟は夏場の汗や汚れを考慮していたようだ。

また週一度、弟は阪大（大阪大学病院）へ通院していた時期があった。

これはまゆ毛の部分に注射をし発毛を促すものだが、かなりの痛みに耐えなければならなかったとみえ帰宅後、その部分はミミズばれとなり生々しく血がにじんでいて目を背けたいほどだった。

母が物陰で「かわいそうに……私が代われるものなら……」と涙していたものだが……。

私は何冊もの医学書を開いては円形脱毛症のページを繰り返し読んだが当時も現在も、これといった治療法は記述されていない。

弟も早五十半ばとなった。とうとう脱毛症と縁が切れることなく……。

だが弟はこの憎い病気を自分のモノとして生きたことで人に優しく思いやりのある人間として成長したと私には思える。

自分より弱い者への限りないいたわりの心は胸を打つものがある。

あれほど人の目を冷たく意識して生

★わいふバックナンバー

226号　セカンドハウス持ってみたらば
227号　子どもの出現
235号　我が家を手に入れるまで
241号　こうして夫を変えました
242号　私のマスコミ体験
243号　特集ナシ

変わる主婦・変わらない主婦
―投稿誌「わいふ」の描く女の三十年―　一五〇〇円

子育てはつらい！
核家族のための子育てガイドブック　一五〇〇円

書きたい女たちへ
―体験的文章入門　三〇〇〇円

性
妻たちのメッセージ　六四〇〇円

一三〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。
☎〇三―三二六〇―四七七一
三二六〇―四七七三

きてきた弟なのに……。これは常に寄り添って支えてくれた妻がいたからだろうか。明るい素直な息子がいたからだろうか。

それでも弟の脱毛部分が新しく発生するのは、商売上の悩みや体力疲労が重なったときとか、税金の確定申告時期などで、相当ひどいようである。

弟のこの病気との長い付き合いは、叔父の一言に発したと母は死ぬまで堅く信じていた。

そして「心の優しい子やから家族をバラバラにされるなんてよほどのショックを受けたに違いない。それもこれもすべては私が親として至らなかったこと……」と悔やんでばかりいた。

十年前、この叔父も長い闘病生活の末、亡くなったが、その知らせに普段穏やかな弟が「叔父が死んでもおれは別に悲しむことはない」と言って窓に向かって立った。

折からの雪が白い光となって弟の横顔をくっきりと浮かび上がらせて、そのほほに涙が流れていたのを私は見た。弟の心の中の確執がそのときようやく雪景色の中に消えていくように思えたのである。

数年前、弟は突然の吐血をし緊急入院した。

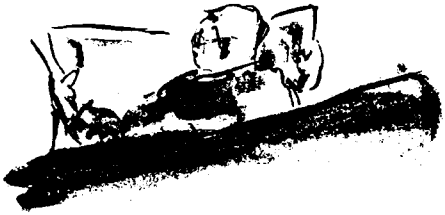
胃潰瘍であった。しかも体力回復後は手術を受けるための再入院もした。その際、弟は長年体から離すことのなかった〝かつら〟の着用をキッパリやめた。

以来、形のよい頭を丸刈りにしてしまい白日下にさらしている。

脱毛は今も時折起きるようだが白髪の多くなったクリクリ頭は以前ほど見苦しくなくなった。

あるとき、わが家の孫が「おじちゃんの頭ズルムケだァ……」と言った。孫にとって丸坊主頭＝ズルムケなのだが嫁は大いに慌てふためいて孫をたしなめた。当の弟は「コラァ」と優しくにらむまねをして大笑いとなった。

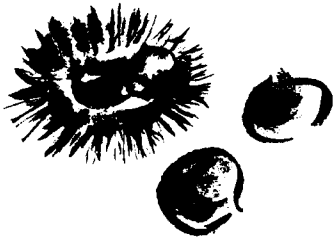
今だから言えるが、弟はこの世にも憎き円形脱毛症という病気と共存してきて、より人に優しく寛大になったようである。それでいて弟は決して卑屈にならなかった。



いつも前を向いて生きてきたことに私は姉として弟に尊敬の念さえ抱いている。

だがしかしである。

もう若くはなくなった弟だが、今一度形のよいまゆ毛と頭髪を取り戻せないものかと、私はまだ性懲りもなく願っているのである。



つらいつらいアトピー性皮膚炎

東京都
匿名

（かゆい子）

昔から「かゆい子」とよく言われた。

幼児期はおしりを中心に湿疹が出た。当時は幸いにもあの「ステロイド軟膏（なんこう）」が開発されていなかったので、処方される薬は専ら「亜鉛化軟膏」だった。

幼いころなので正確には思い出せないが、小学校低学年くらいまでは、ちょくちょく皮膚科に通っていたように思う。

思春期に入ると今度は手のひらがかゆくなり始めた。特に夜寝入ってからモーレツにかゆくなって、ほとんど半覚状態でよくかきむしった。当然のことながら手の皮はボロボロにむけ、ザラザラになった。

このころから私の「さすらい医者通い」が始まった。

まずは近所の町医者。すでに「ステロイド軟膏」が出回っていて、どこの医者でも必ずステロイドが処方された。

最近になってやっと「ステロイド」の様々な副作用が取りざたされているが、当時はただただ「画期的に効く」ということで、どこの医者も「みじん」のためらいもなく、ポンポンとしかも大量に処方した。

確かに「最初のうち」はよく効いた。でもしばらくするとまた症状が出始める。医者に行くとまた同じ薬が出る。今度は塗ってもよくならないし、症状は前回より悪化している。

「やっぱり町医者ではダメだ」

ということになり、今度は大学病院に世話になる。すると、「あなたの場合今の薬ではもう効かない」と言われ、一ランク上の強い薬が処方された。

当然その薬も効かなくなってくると、またその次のランクのステロイド、というふうに、病院に行くたびごとに強い薬を処方され、気が付くと最強（Very Strong）の薬を塗っていた。

そのころから私の手のひらも、ステロイドの副作用とみられる症状が現われ始めた。

手の皮が薄くなり、そのためかちょっとした刺激でもすぐ出血してしまう。

指紋も完全に「消えて」しまった。

長引く湿疹にたまりかねた両親が、ある大学病院で皮膚科の教授をしていた伯父のところへ私を連れていった。

開口一番その伯父である教授は、「この子はかゆい子だろう」と言った。さらには自分の後ろにずらりと従えている若い医学生たちに、「こんな手の子と結婚したら大変だぞ」などとほんとうに失礼な冗談を言って、みなでゲラゲラと笑った。

多感な思春期に「何げない（？）」つもりで言った伯父のこの勝手な言葉に、ひどく傷つけられたのは、いうまでもない。

結局伯父のところでは、こんな強い薬をつけていちゃいけないということで、一番弱いステロイドの軟膏を二本もらって帰ってきた。

昨日まで最強のステロイドを塗っていたところに、今度は一転して一番弱い薬である。当然効くはずがない。長年強い薬を塗り続けた私の手には、その薬はまるで「サラダ油」のようだった。

一時はひどく荒れた手のひらだったが、大学生になったころには大分症状も落ち着き、しばらくは「平穏な」年月が続いた。がしかしその十年後にもっと恐ろしいアトピーを経験することになったのである。

（顔に湿疹）

最初はほおに粟粒大の赤いプチプチができた。かゆみもある。湿疹だ、と思った私は家にゴロゴロと転がっているステロイド軟膏の一つを取り出し、うすーく塗った。すると翌朝にはきれいになっていた。

しばらくするとまたかゆくなって赤くなった。今度は範囲も少し広い。場所が場所だけに早く治さないと「大変なことになる」と直感した私は、慌てて近所で評判の皮膚科に駆け込んだ。

そこは漢方も取り入れていると聞いていたので、何か新しい治療法でもあればと、薬をもつかむ気持ちで行ったのだが、「あなたのような人には漢方は効かない」と言われ、結局ステロイドの軟膏と抗ヒスタミンの飲み薬をわたされた。

今思い返してみても、この時点で「適切な」治療なり、「注意」（ここがポイント）を受けていれば、現在のようなとんでもない症状にまでならなかったのではないか、と悔やまれる。

さてその後はというと、結局手のときと一緒で、ステロイドを塗れば塗るほど治らなくなるばかりか範囲がどんどん広がって、あっという間に顔面湿疹に覆われてしまった！

そればかりではない。顔には手のと

きと違って大変なことが二つあった。一つは顔の皮膚はとても薄いため、治らないからといって強い薬が使えないこと、もう一つはステロイドによる副作用が爆発的に出る、ということであった。

一日も早く治さなくては、との思いで「名医」を求めてあちこちを訪ね歩いたが、結局「無駄足」に終わった。

というのも、どの医者も症状を「軽く」する方法は知っていても—これを対症療法という—「治癒」する方法を知らないのである。いや習っていない、といったほうが適切かもしれない。

(止まらないかゆみ)

アトピー性皮膚炎に関して私の抱く最大の疑問は、「なぜかゆくなるのか」ということである。

アトピーでない人にはなかなか理解してもらえないが、あのひどいベロベロの症状も、元はといえば勝手にそうなったのではなく「かゆく」て、かきむしっているうちに症状が悪化しただけのことである(注—だからアトピーは絶対に移らない)。

そしてこの「かゆみ」さえなくなれば症状だって治ってくるのである。

もちろん医者に行けば、抗ヒスタミンやら抗アレルギー剤などの飲み薬としての「かゆみ止め」を処方される。が、しかし私にはこれは「まったく」効かなかった。

こんな飲み薬で効くのだったら、アトピー性皮膚炎などなくなるはずである。が、現実は違うだろう。

(アトピーは治らない)

こんな私にも、アトピー性皮膚炎のことを忘れていられる時期が何年かあったわけだから、その時点でいえばアトピーは治っていたといえるだろう。

ところが顔面に湿疹が出てからは「完治する」という言葉は、私にとって死語になってしまった。「共存」という言葉はもっと当てはまらない。

とにかく治らない。すっと症状が消えたかと思うと、あっという間に顔面デコデコになって、ついには顔の形相まで変わってしまう。まぶたははれあがり、皮は突っ張りあちこちにまるで「おばあさん」のように「しわ」が走る。赤みが引くと今度は顔中の皮がボロボロとむけ出す。その有り様たるや身内のものでも「見てられない」ほどのすさまじさである。

外出などとんでもないが、外で遊び回りたい盛りの子供を抱えては、そうもいってはいられない。泣く泣く公園に行くのだが、そのときのつらい私の

気持ち、分かるだろうか。

近年大人のアトピーが増えてきている。特に私のように幼児期から「かゆい」傾向にあった人が成人し、いったん治ったかにみえた時期を過ぎてから、爆発的に発病するケースが多いそうである。そして発病部分が首から上という、最も敏感な部分に集中している。

顔にひどい湿疹が出て一年ほど経ったころ、私はとてつもない症状を経験した。後にそれは顔にステロイドを塗ったための副作用と分かるのだが、そんな症状が出るまで、ただ漫然とステロイドの薬を処方してきた医師に、言いようのない怒りを覚えた。

結局別の大学病院で、今度はステロイドから離脱しなくてはいけない、ということで、今まで散々処方されたステロイドの代わりに、ただの軟膏を渡されたのである。

この期に及んで「離脱」とはどういうこと！と憤慨したが、とにかくステロイドを塗ると余計症状が悪化してしまう状態だったので、やめるほかなかった。

（恐ろしいリバウンド）

ずっと副腎皮質ホルモンを使用していた人が急にやめると、どういうことが起きるのか。それが次に挙げる「リバウンド」現象である。

顔がパンパンにはれあがり、グチュグチュした表面からは汁が滴り落ちる。モーレツなかゆみを伴い夜も寝ていられない。当然顔は真っ赤になり、だれが見ても「あの人ちょっと気持ち悪い」ということになる。

こんな状態が、自らが引き起こした「湿疹」でできるのではなく、ステロイドの副作用として出るのだから、たまったもんじゃない。

こうした「薬害」を担当医たちはどう考えているのだろう。何の疑いも持たずに、漫然とステロイドを処方した医者に激しい「怒り」を感じる。

（そして現在）

中学生のころから長く患っている手の湿疹も、もしかしたらステロイドを使っているから、治らないのかもしれない。

そう、ステロイド――この薬を塗っているかぎりは、アトピー性皮膚炎に限っていえば、絶対に治らない。いや治らないだけでなく「悪化」する。これはわが身を持って体験したのだからほんとうだ。まして私のように「かゆい子」――体質的にアレルギーが起きやすい人――は、湿疹が慢性化しやすいだけに、断じて「ステロイド」をつけてはならないのである。

幼児のアトピーと違って大人のアトピーは原因が見つけにくい。私も何十回となく医者に尋ねてみたが、どの医者も結局原因が分からないのである。だから症状を一時的に抑える対症療法しかできないのだ。

昨年末、私は一冊の本と出会った。「平成アトピー症候群」産調出版（乞うご一読）。

前々から大人にも食べ物によるアレルギーが原因となっているのではないか、と思っていたが、この本に出てく

る京都の高雄病院での「超少食療法」で症状が改善される患者さんの話を読んで、一層その思いが強まった。

アトピーを引き起こす原因には、ストレスやら汗やら日光やらと色々あるが、私の場合でいえば、何を食べたらダメというのではなく、単に外食が続いたり、しつこいものを食べたり、おなか一杯食べたり、といった暴飲暴食の後、「かゆみ」に襲われることが多いのだ。

高雄病院の江部医師はこう言っている。

「絶食することによってアトピーがよくなるのは食べ物がおなかに入ってこないので、消化管が安静になり、胃腸の粘膜の傷が修復される。すると本来の粘膜調節機構もよくなり、腸の中に入ったアレルゲンも体内に取り入れずに排出できるようになる」と。

この絶食療法の短期有効率は八七・九パーセントというのだから、試してみない手はない。

私も、自宅ではなかなか難しいのだが、(前述の高雄病院は向こう一年予約で一杯だそうである)食べる量を意識的に減らしてみた。すると目に見えて分かるほどの変化はないにしても、とりあえずあの厄介な「かゆみ」から解放されたのである。かゆくならなければ当然かかないのだから湿疹のほうも軽くなる。

ところが先日友人の結婚式に出席してプッツンしてしまった。二万円も払った(?)んだから、と出されたフランス料理を全部平らげたら、またおかしくなってきてしまった。

いったん湿疹が現われると、赤くはれる→ジクジクになる→皮がボロボロにむける→治る、あるいはまた再発する、を繰り返すのだ。今はその最中である。

(結論として)

アトピー体質は治らない。よく新聞雑誌などで「〇〇で治った」なんて話が出ているが、あれは「うそ」だ。少なくとも私にはほとんど効果がなかった。アトピーの人は、いたずらに高額なお金をつぎ込んで「治療」に専念するよりも、とりあえず「絶食」もしくは「少食」にしてみることを勧める。そしてできるならそれにビタミンCやベータカロチンなどの栄養補助をするとより効果的だ。そして二度と、ステロイドの軟膏に頼ってはいけない(ステロイドの内服薬は論外である)。

私の顔の湿疹は、まだまだ治りそうもない。ある人からは治るのに七年かかる、なんて脅かされた。七年経ったら私は中年おばんになってしまう。

赤くはれた顔を鏡でのぞき込みながら、「今晩も夕食抜いてみようかな」とため息をつきながら考えている今日このごろである。

喘息とともに（ぜんそく）

島根県松江市
宇野厚美（30歳）

私は一歳のときから十三歳になるまで小児喘息だった。小児喘息は子供から大人へ体が変化する時点で治さなければ、そのまま気管支喘息として患い続けるといわれたものだ。

私は母方の家系から遺伝でこの病気を受け継いだが、やはり初潮を迎えるまでに治らなければ一生背負うことになるだろうと医者から宣告されていた。母は医者の言葉を「初潮が来るまでに治らなければ」ではなく「初潮が来れば」と解釈し、これが一つの転機だから治るはずよ、と私に言い聞かせていたものだ。

ところがその転機が訪れる前に、私はこれまでにないひどい発作を起こして入院することになってしまった。今までは発作が起こっても何とか自宅から病院に通っていたのだが、とうとうそれができなくなってしまったのだ。入院は一週間ほどで済んだが、家に戻ると足がなえてしまっていて二階へ続く階段が上れなかったのを覚えている。

だが退院してすぐ、十三歳になったばかりの夏に待ちわびた転機、初潮が訪れた。そしてほんとうにそれ以後発作は起こらなくなってしまったのである。

乾布摩擦や腹式呼吸、漢方薬など色々母に勧められて試してはいたが、どれもほんのわずかな期間やっただけで、結局何の効果が一番高かったのか分からずじまいで発作はなくなってしまった。単に母の「初潮が来れば」説の暗示にかかっていただけで治ったのではないかと思ったくらいだ。母にとっては特に意識した言葉ではなかったようだが、実際のところ喘息の発作はいいふうに考えなければ、親も子もやっていられなかった。

毎年毎年季節の変わり目、風邪を引いたとき、疲れたときに必ず起こる発作はまさに地獄である。喘息の発作はそばで見ている者もつらいものだが、本人にとってはこの苦しみから解放されるのなら何を代償にしてもいいとさえ思えるものだ。

とにかく息ができない。吸うのも吐

くのもままならない。いっそ気を失ったほうが楽だと思うのに、そういうことはまったくないのである。

私の場合はまるで計ったようにピッタリ四十八時間それが続いた。その間は苦しさのあまり横になることができなかった。横になると逆に息が詰まってしまいそうな気がするのだ。布団の上にかえるのような格好で座り、ヒューゼェ、ヒューゼェという音とともに体中で空気を求めて呼吸をしているような感じだった。もちろん食べることも飲むことも眠ることもできない。四十八時間ひたすら同じ格好で耐えるのである。やがて潮が引くように発作が治まったときは、いつものどが焼け付くように乾いていた。

（朝まで我慢）

私がこの病気に苦しんだのは昭和三十九年から五十一年くらいにかけてである。私は喘息といえば遺伝病か公害病だと聞いていた。当時私が住んでいたのは兵庫県の尼崎市で、ここは臨海工業地域で空気が悪く、公害病としての喘息患者が多かったらしい。そのため私のことを公害病だといってそのまま指定の療養施設へ送り込もうとする救急病院の医師と、遺伝だと主張する両親との間にひともんちゃくが起こったことがあった。公害病認定されてしまうと普通の生活ができなくなる、と慌てた両親は掛かりつけの医院に電話で助けを求め、その医院からの説明でようやくその医師に納得してもらうことができたのだった。

「もう救急病院には絶対連れていかないからね。朝まで我慢しなさい」

母は発作が治まった後私にそう言った。実は私はその発作のとき、「苦しい、苦しい」と泣きわめき、夜中に救急車を呼んで無理やり病院に連れていってもらったのだ。救急車の中であえぐ私を見て、救急隊員のおじさんが「ひどいなあ。頑張れよ、もうすぐ着くからな」と励ましてくれたのを覚えている。それほどの発作でありながら「朝まで耐えろ」と言う母を酷だと思う人があるかもしれないが、そうではない。当時私が言い聞かされていた喘息の大前提は耐え抜くこと、乗り越えることであった。よっぽど体が衰弱していないかぎり喘息で死ぬことはない。だから頑張って治そうという気力があれば必ず治るはずだ、ということであったのだ。

今ほど発作の予防薬もなく、予防のための知識もない。ダニが発作の引き金になるため和布団ではなくベッドで寝たほうがいいという話を聞いたのも、最後の発作で入院したときであったくらいである。喘息と闘うには体を鍛える、次に薬に依存しないという二つしかなかった。

（鬼になった母）

私が病院に行って受ける治療といえば、起こった発作の症状を軽減するだけのものだった。ビタミン剤と気管支拡張（だと思う）の注射がお決まりのコースである。病院が開いていない休日や深夜の発作は飲み薬か、口にくわえてシュッとひと吹きするスプレー式の薬をもらっていた。スプレー薬はとても強力で、ひと吸いしただけでたちまち発作は軽くなってしまう。それだけに乱用すると心臓に負担がかかって命にかかわるといわれていた。一度使用すると四時間は空けなければならないが、効果が二時間くらいしかない。再び襲う発作の苦しみに耐えかねて何度も母に「あれを使って」と懇願したが、母は頑として聞き入れてくれなかった。実際にこの薬を使いすぎたために死亡した子供がいたことを、母は医者から聞いていたのだ。

このスプレー薬は少し麻薬的なところがあって、喘息の子供は発作が起こるとこの薬を欲しがったらしい。こうなると喘息との闘いは本人のものだけではない。親の闘いでもある。

苦しみから逃れるためにスプレー薬を欲しがる子供から薬を断ち切り、何とか自分の力で乗り越えさせようと全部の薬を庭に埋めてしまったという親もいたと聞く。私の母はさすがにそこまではしなかったが、私には口を酸っぱくして「自分で頑張って治そうと思いなさい。喘息なんて〝なにくそ〟と思うのよ」と言い聞かせた。事実、そうした意志の力で喘息を克服していった子供はたくさんいたのである。

私も発作が起こっていないときは母の言うことを「うん、分かった」と聞いていて、今度発作が起こったら薬なしでやっつけてしまおうと決心するのだが、いざ発作が起こると「苦しい」「助けて」を連発していたように思う。私が泣きわめいて、さすがの母も少しオロオロするときがあった。そういうときは医者のほうが「それだけわめく元気があるなら十分。ほっときなさい」と私がいる前で堂々と言ってのけた。「ちくしょー。あんまりだぁ……」と私は

思ったけれど、背水の陣を敷かれてしまっては自分で頑張るしかなかった。私は意志の強いタイプではないから、そんなふうに周囲の人に助けられて喘息を乗り越えていったようなものだったのだ。

両親は教師だったため、私が発作を起こしても休むわけにはいかず、ヒーヒー苦しむ私を置いていつも仕事に出かけた。両親がいない間は祖母が面倒をみてくれていたが、祖母もいつもどおり家事をし、いつもどおりテレビを見て笑ったりしていた。私が発作を起こしていても特別なことはしないし、できない。

周囲のそういう対応が実は私にとっての薬ではなかったかと思う。もちろん、それが無慈悲に思えたのも事実である。親にそばにいてほしい、せめて病院くらいすぐに連れていってほしいと思ったものだ。だがそれがかなわないからこそ、私は心底「喘息は嫌だ、早く治してしまいたい」と思えるようになったのである。

（予防薬の普及）

喘息の発作から大分遠ざかった二十一歳の春、私はまだ少し不安げな両親の反対を押し切り、超ハードな勤務状況である建築設計事務所に入社した。休日も睡眠時間も十分に確保できない労働条件下であったが、とりあえず七年間働いた。最後の二年間は結婚したのでさらに家事という労働がプラスされていた。同じ職場であった主人の転職を機に私も退職し、今は子育てと家事に明け暮れているが、昔のことを思えばわれながらすごいことであると思う。子供のころは働くことも結婚することも難しいかもしれないと言われていたのである。そう言われたのは一度だけだが、その言葉を信じていなくてほんとうによかったと思う。人の態度や言動に影響されやすい私のことだから、そちらを信じてしまっていたらそのとおりになっていたかもしれない。

私は社会人になってからはもちろん発作は起こっていないが、同じ喘息だ

という二十三歳と二十歳の女の子と一緒に働いていた。彼女らは幼いときから常に予防薬を服用し、今も定期的に検査を受けているのだが治らないのだという。とはいえ私のようなかえるポーズで苦しむことはないから普通に生活している。

二十三歳の女の子はいつもポケットに吸入スプレーを入れていて、道を歩きながらでもちょっと苦しいと思ったらシュッと吸い込んでいた。それは私にとってはあまりにショックな光景だった。私とは別の病気のような気がしてしまうのだ。彼女たちの医者や親は発作が起こっても「耐えて乗り越えろ」とは言わないだろう。それしか方法がなかった私のときとは違うのだ。苦しまずに済むのなら、あえてつらい発作を起こすことはないと私も思う。

私にはもうすぐ二歳になる息子がいるが、彼がもし喘息だとしたら、やはり苦しむ息子を前にして「耐えなさい」とは言えないだろうと思う。もし私が強い態度に出られたとしても、今となっては周囲が許すまい。「薬があるのにかわいそうじゃないか」と言われるのがオチである。

一体今の子供たちはどこで病気を乗り越えるのだろうか。薬があれば何とかなる、喘息の治療をしてくれる病院は幾らでもあるからそれで治るはずだと、親も子も思ってしまっていないだろうか。常に薬や医者の指導が生活の中心であるために、いつも自分が病気であることばかりを認識しているようなことになっていないだろうか。

私は喘息から決別して久しいが、今もって苦しんでいる人が多いところを見ると、もしかしたら私の場合は相当軽いケースだったのかもしれない。しかし病は気からという言葉は信じている。私は母にしかられて、その「腹いせ」に発作を起こしたことだってあるのだ。

もし人に強く願うことによって病気をやっつける力があるのなら、ぜひもう一度それを見直して、一人でも多くの喘息の子供がつらい発作から解放されてほしいと思うのである。

各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば〝わいふ〟文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館に申し入れてくださるよう、お願いいたします。一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。

くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合わせください。要旨を書いたものを送りしますので、それを見せて公民館にお申し入れいただくとよいと思います。

「病は気から」と申しますが

東京都中野区
花和　麗

（病む心が痛みに）

私は一昨年の春に、腰椎椎間板ヘルニアの手術を受けました。しかし完治はしていませんので、神経痛としびれは残っています。

私の病の種は出産に伴うものでしたが、それを育ててしまったのは自分自身であり、また私を取り巻く環境でした。知らず知らずのうちに心身を痛め続けてしまったのです。

というわけで、最愛の娘を授かった代償として私の体は痛みを支払っています。出産が私にとっては難事業だったわけです。だれでも結婚したら赤ちゃんを産んでいる、と何の疑いも持たずに思い込んでいましたから、予想外の進展でした。

今にして振り返ってみれば、十代、二十代前半に幾つも無理をしていたと思い当たります。高校の部活動の過剰練習、意に反した受験勉強、上京後の独り暮らし、OL時代の過労などなど。

若さゆえに体を休ませる必要も感ぜず、体力の備蓄を使い果たし、本来ならばその間に鍛えておかなければならなかった筋力や精神力について考えなかった結果かもしれない、と反省しています。

結婚後の生活も私には適していませんでした。それまで独り気ままに過ごしていたため、主婦として小さなアパートの一室で他人とほとんどかかわることなく一日の大半を費やさなければならない暮らしは、楽しくありませんでした。近くに住む姑との付き合いも時には苦痛でした。

でも、「こんなものかな」と半信半疑でしたし、小さなわが子の世話に追われるままに我慢していました。

その後五年近く海外生活だったのも負担を増やしたといえます。

サラリーマンの夫はいつも忙しく、在宅時間がとても短いと思います。疲れて夜遅く帰る人に多くを望んではいけない、と自戒しているつもりでも、行き場のない私のストレスは私の態度から優しさを奪い、どんどん攻撃力を増

していきました。感情的でした。

今は夫に向かってハッキリと冷静にモノが言えます。何が問題でどこを改善していかなければいけないか、までは以前も語りかけていたのですが、その先に踏み込む勇気がありませんでした。突き詰めていくと、夫婦であることに疑問符がついてしまう、と知っていたからです。

口にせず眠れぬ夜を重ねるたびにストレスはたまっていき、痛みの形で体が悲鳴をあげていたのにもかかわらず、動けなくなるほどひどくなるまで耐え続けてしまったのです。私は自分を過信していました。

病気は、気を病むと解せます。私の病気も心を病み身を痛めていたのでしょう。

（付き合い方を覚える）

さて現在ですが、今の私は痛みとうまく付き合っていると思います。無理がきかないので不自由なこともありますが、失った体力はしかたありません。そこにこだわらないよう、気にしないようにと努めているうちに、自然に身についた術があります。

それは、あきらめることです。日常生活には絶対必要な事柄のほうがむしろ少ないのではないか、あれもこれもと欲張っていたときは肝心の大切なモノを見落としてしまっていたのではないか、と気が付いたのです。あきらめるというのはつらいことだ、と思い込んでいましたがそうでもないようなのです。

体の痛みが苦にならない限られた時間の中で、「何からするか」の優先順位を決めなければなりません。その過程で、捨てることを覚えました。何が一番大事か、今何をやりたいか、と自問自答しながら選択していく作業は決してつらくなく、むしろ心地よいくらいなのです。

だから、今のほうがより自分らしく素直に暮らしていけている、と思っています。適当なほどほどの快感を覚えた、といえるかもしれません。

現状は一時間以上立ち続けるのも、逆に座りっぱなしというのもキツイですし、力仕事もできません。寒暖の急激な変化にも対応しきれず、痛み始めたらすぐに休める環境を維持しなければなりません。

しかし、急がずにゆっくりと時間をかけて過ごしていると、思いがけない出会いがあります。

例えば、散歩。歩くことはリハビリの一つなので日課です。車の多い表通りを避け、少しでも静かな裏道を選ぶ

と、道端に咲く小さな花や季節ごとに変わる木々の表情に目がいきます。「キレイだなあ」とつぶやくとき、また自然の香りをかいだとき、何となく心楽しくなります。顔がほころぶのを感じます。

主婦であり母親である私には、毎日最低限やらなければいけない仕事があります。その中でもとりあえずしなければ支障を来すことを済ませてしまったら、次は好きなこと、やりたいことをします。新聞や雑誌、広告などなどの活字から私のアンテナに引っ掛かってきた記事をピックアップし、心に響いた言葉を残す手間は、楽しい時間つぶしです。私は言葉が好きですから手紙を書いたり、こうやって文章をひねり出すのも喜々としてやれます。伝えたいことがたくさんあります。

日々の生活の風景便りのほかに、時に足を運んだ展覧会、映画館、コンサートやバレエの舞台に、と感動した私の気持ちを言葉にしてだれかに伝えたい、そんな願いが私にはあります。

（原因を知ることが必要）

夫にその対象となってほしい、と期待していましたが、今は無理して求めるのをやめました。もう苦しむのはたくさんです。だから、向き合わずに傍らで気配をうかがいながら、自分のストレスもためないように気をつけています。傷口に塩を塗り込んで痛みに耐えて何になるというのでしょう。つらくなるばかりです。

以前の私は、真正面から問題にぶつかりすぎて、自他共に傷つけてきました。体当たりで得たものもありますが、失った時間や体力を思うと、割の合わない見返りの少ない方法でした。

手術という大きなハードルは、越えるまでも越えてからも大変です。術前一年九カ月間は投薬を受けましたし、局部注射も何回か打ってもらいました。幾つかの処置をひととおりやってみても快方に向かわなかったので、手術しましょうという結論を出した経過があります。手術前後八カ月余、入院中も退院後もほとんど寝たきりでした。その間に落ちた体力を取り戻せるのは、いつになるか分かりません。家族にもつらい思いをさせました。

結果として、痛みが緩和され生活にゆとりが生じたのでよかった、と考えています。苦痛の種が明らかになり、取り除ける手段があるなら、そうするのがベストでしょう。しかし、時には排除できない場合もあります。それなら、よりよい共存を追求して少しでも生きやすい環境をつくり出そう、と決めました。

どんな病気でも原因があるはずです。まずは、それを知ることです。そして自分に適した最善の処置を施し、あとは最後まで付き合いましょう。

私は術後、痛み止めに薬を飲むのはやめました。胃が荒れて食欲が落ちるのはよくないと思ったからです。代わりに温湿布と適度な運動、疲れたら休む、絶対に無理はしない、と心掛けています。いつでも内なる声に耳を傾け、発せられるシグナルを見落とすまい、と気を付けています。余裕があれば、元気な時間を楽しむことができます。

私自身が楽しいと感じ明るくなれると、家族にも優しくなれます。気持ちが満たされているとこんなにも強く大らかになれるのか、と改めて問題の大きさに気付かされました。

（等身大の自分）

人は弱いものです。だれでもしんどいことよりラクなほうを選ぶのが、正常な行動です。やせ我慢をして見栄を張っても、他人は助けてくれません。自分の身は自分で守るしかないのです。痛みや苦しみは、だれも代われません。

ならば、少しでも気楽に仲良く病気と付き合おう、と積極的に行動し始めてから、取り巻く状況が好転してきました。きっと私の視点が移ったので、物事の別の面が見えてきたのでしょう。

世間や家族との距離も適当に置けるようになりました。イヤなことは忘れよう、と意志が働きます。人間の忘却能力は延命作用があるようです。楽しい思い出、よかったときのことは、つらく苦しいときの希望になります。人生には波がある、と知っていれば、「ドン底も永遠には続かないさ」と自らを励ますことができます。

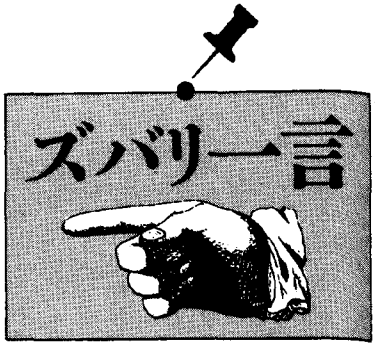
夢を持ちましょう。「願いはいつかどこかでかなうはず」と信じて、一番大切にしたいことは決して最期の瞬間まであきらめてはいけません。

途中で疲れたら休めばイイのです。元気になってから再び歩き出せばイイのです。少しずつ努力して、小さな積み重ねを大事に、人との出会いを大切にしていこうと思っています。結果は、あとのお楽しみでいいではありませんか。

等身大の自分を認めてから、病も私の一部と受け入れてから、ようやく本来の私になれた気がしています。まだまだ、これからです。最期の最後まで、この生命大事にはぐくんでやりたいと思います。私のたった一度の人生ですから。でも、かなわなかった夢は、来世に回しましょう。一生懸命生きれば後悔することを少しは減らせるのではありませんか。

気の持ちようで病を軽く受け止められる能力を人間は持っているようです。

（え・佐藤瑞江子）



ワンパターン翻訳

川崎市川崎区●浦川とめ

外国人へのインタビューが報道されるとき、テレビなら吹き替えか字幕、新聞なら翻訳という形で私たちに届く。

いつもいつもいつも思うのだけど、あの「ワンパターン文体変換翻訳」は何とかならないか。

例えばひどいインフレの某国でインタビュアーが、大学教授、普通の婦人、少年、そして農夫の声を拾ったとしよう。

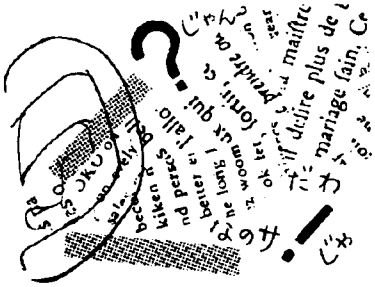
で、翻訳がどうなるかというと、教授なら「政府の対応が後追い的で根本解決になりません」、婦人なら「ひどい話だわ。今日は牛乳の値段が昨日の倍よ」、少年なら「パンをおなか一杯食べたいよ。それだけさ」、農夫なら「わしにゃ関係ないね。その日その日を暮らすだけのこった」……ってふうに絶対なっている。

わが国でそういうインタビューをしたら、教授はまあいい。婦人も許す。少年は、こんなふうに言うか。そして極め付けは農夫。

どんなおじさんでも「わしは……じゃよ」にせずにはおかない無神経さときたら、機械が自動翻訳してんじゃないかと思うほど。

なぜ田舎のおじさんがデスマス調ではいけないのか。現地語で明らかにくだけた言い方だったら、それならそれでもう少し別の言い回しだってある。親切心から、典型的（とマスコミで信じている）なおじさん言葉にしているのだろうか。

でも、女なら「だわ」少年なら「なのさ」老人なら「じゃ」不良なら「じゃん」にしてしまう画一的文体変換は、色眼鏡的で、イメージ操作的である。



私はもう全部デスマス調でいいと思う。別に差別的だからよせ、とかそういう論理の飛躍にもっていくつもりはない。

が、老若男女を問わず、ものを聞かれてまじめに答えるとき、人はもっと丁寧に言うと思うのだ。

自民が負けた選挙のとき、「わしはもっと自民が頑張ると思うとったにのう」なんて、だれも言ってなかった。

文学書ではないのだから、へんてこな文体いじりをする必要は、ないと思う。

最近思うこと

千葉県松戸市●島津まさ子（46歳）

ここ二週間ほど、おっぱいが張ってしかたがなかった。グーと胸が締め付けられるように張るかと思うと、チクチク、ジワ

ジワと張っていく。妊娠したときのおっぱいの張り方と同じだ。

妊娠、授乳期間は乳房が生きているようだった。どんどん大きく膨らむだけでなく、乳房がジワジワと根を張って、拡大し、息づいていった。当時の感触がよみがえった。

妊娠したのだろうか。予定日より二週間遅れている。でも遅れるのは今月に始まったことでない。私も四十歳の半ばを過ぎて生理日が狂うようになった。ドンドンずれて、半年に一度生理がスキップしてしまう。

「だから、今回も大丈夫さ」と思っても不安でしかたがない。

思い切って産婦人科へ行った。結果はシロだった。

帰り道、ホッとして自転車のペダルも軽かった。

薬剤師の友人に電話で報告した。彼女が言うには「更年期かもしれないわよ。更年期になると黄体ホルモンが出て、そこだけが妊娠初期と似ているのよ。妊娠と間違う人もいるのよ」

そうか私も更年期の仲間入りか。

二、三日して、近所のPTA仲間の一人に会った。現在三十八歳になる、中学一年生の子を持つあるお母さんが妊娠し、三日間迷った末、産む決心をしたという。ついでに私も最近産婦人科に行ったことを話した。

彼女は言った。「閉経するころって、とても妊娠しやすいんだってよ。気をつけるように母親から注意されたわよ」

私の母は若くして未亡人になったから、こんな注意はしてくれなかった。

だが、自分を含めて、女性の避妊のあいまいさにあきれてしまった。

若くもない閉経前後に特に妊娠しやすくなるはずもない。避妊をオギノ式に頼っているからだ。生理日と生理日の中間が排卵日なのはだれでも知っている。その期間だけ注意する。

だが、私のように更年期に入った女は生理日が狂う。するとオギノ式は効をなさない。

たくさんの女がホゾをかむ。閉経前後は妊娠しやすいという非科学的なことが、まことしやかに伝わっていく。

〝わいふ〟の書評欄に載っていた「モノと女の戦後史」は、モノと女の意識のかかわりが述べられていて面白かった。ここでも避妊具の章があり、著者は大分ページを割いている。

避妊の歴史から、日本の女性の避妊へと進む。

「日本の夫婦は受胎期にはコンドーム、不妊期には何も使用しないという方法を全体の七〇〜八〇パーセントが採用している」とある。「閉経のころは妊娠しやすい」を、まさに裏付け

ている。

「日本の夫婦は避妊が下手だから、大抵一人か二人は日の目を見ない子供がいる」と上野千鶴子さんも言っていた。

先進国の女性の三、四割がIUDやピルを使用し、年齢が進むと不妊手術をするという。ところが日本はコンドームが七四パーセントで、IUDは五パーセント、ピルは一パーセントだそうだ。

著者は言う。IUDやピルの避妊法が効果が高いわけではない。これらが画期的方法なのは、女性の側が確実に主導権を取れるのだ。

私だって、コンドームとオギノ式の併用では失敗が多いぐらいは知っている。もし運悪く妊娠したら中絶すればいい。中絶の後遺症はあまり聞かないしと、あいまいに自分を納得させていた。この私のような意識が、一年間の中絶件数五十万件の数字になって表われる。

最近は健康ブームでみな体の管理に熱心だ。ウォーキングだ、テニスだと運動もはやりだ。

これに加えて、女性はやせることにも熱心だ。自己の体の管理に情熱を注ぎながら、一方で妊娠中絶をする。あるいは、今回の私のように妊娠の不安にかられる。

中絶は体を痛めつけるから避けるべきなのだが、避妊への意識、性的なコントロールへの主導権を取ることこそ考えなくてはならないのだ。

この本を読みながら、自己の肉体がいかに自立していないかを知り、恥ずかしかった。私を含めた女性の自立のなさは、何に起因しているのだろう。

私がピルを知ったのは二十年ほど前だが、当時は副作用があるのではないかと疑問視されていた。だが、二十年以上経ってもピルの報告を新聞や雑誌で見かけない。進歩しているのは体外受精ばかりのような気がする。もっともっとピルの情報が出されてもいいのではないか。

日本女性の意識も低いかもしれないが、これだけ医学が発達しているのだから、避妊の技術レベルももっと向上していいはずだ。「子供は授かりもの」で、中絶、避妊が罪悪視される思想がすべてにわたって浸透しているように私には感じられる。

婦人科というところ

京都市右京区●石川喜子（31歳）

発端は発熱と下腹部及び外陰部の痛みでした。

私は近所にある息子を出産した産婦人科に行きました。そこでは卵巣がはれているので摘出したほうがよいのでは？と言われました。「摘出」と聞いて私は一軒の病院だけではだめだと思い、別の総合病院の婦人科へ行きました。そこでは痛みと発熱は恐らくばい菌が入ったせいで、卵巣ははれていずただ便秘であると言われました。

私は二軒がまったく違う意見だったので、さらに三軒目へ行きました。そこでも二軒目とほぼ同じ意見でしたので、二軒目の病院に通うことにし、抗生物質を服用し膣を消毒してもらい、どうにか発熱や痛みは治まりました。

一軒目に通院していたらと冷や汗ものでした。

私は婦人科に通院しているのだから、この際かねてから考えていた避妊リングを入れようと思い、担当医に相談しました。

彼は生理が終わってから三日以内に来てくれたらすぐにリングを挿入できると言い、私にFD－1という避妊リングの説明書を手渡しました。

私は説明書のほか、「女の医学書」も読んで世界中で六千万もの人がリングを使用していることを知り、コンドームを買いに行く煩わしさや、セックスのときにコンドームをしなければ……と一々思うこともなくなるのだし、費用も二年間装着して二万円ほどなら決して高くはない、失敗は三パーセントくらいでコンドームとほぼ変わらないので、これはいいと思い、生理が終わるとすぐに病院へ行きました。

ところが、避妊リングを挿入するときスゴイ痛みを感じ、そのうえめちゃくちゃ体がだるく、頭が後ろに引っ張られるような貧血に近い状態になり、うろたえました。

そんなことは説明書を読んでも、「女の医学書」にもどこにも書いていなかったのです。

担当医はその日一日は安静にし、入浴も自転車に乗ることもだめだと言いました。

私はその日自転車に乗って病院まで行っていたのでした。

どうしてこうなることを説明してくれなかったの？

私はすごく腹が立ちましたが怒る気力もありませんでした。あまりつらいのならベッドで少し休んでいくか、と言われましたが、どうせ会計のところで待たされるだろうし、イスに座っていれば少しは気分も楽になるだろうと私は断わりました。

でも気分はましにはなりませんでした。自転車を押して、途中で昼食を取り休憩して、自転車を押して、徒歩四十分の道のりを帰りました。

翌日には熱が出て出血もしてきました。少量の出血はあると説明されていましたが、とても少量とは思えませんでした。

そのことを知人に話すと、私も同じ状態だったと言われ、そのうえリングを外すときは子宮内を掻爬（そうは）し、リングと子宮の接点に生理のカスがたまっているのをとるのだ、と言われ、しかも費用はリングを取り出すのと新たに入れるので倍かかると言われました。

だまされた！　そんな気持ちになりました。

もっと挿入前に情報をたくさん仕入れていれば、と悔やまれました。しかし婦人科の説明不足にも腹が立ってしかたありませんでした。

病院に電話して、その旨を尋ね、説明書に挿入当日は安静にすることという一行を入れてくれと頼みました。

しかし病院の対応は非常に不愉快なものでした。リングの説明書には医療器具メーカーの名前も住所も書いていませんでしたので、メーカーにも直接説明書のことを言いたいと言っても教えようとしませんでした。

婦人科って一体……医者への不信感が募る一方です。

（え・梅村　苺）

●エッセイスト・クラブ

六十の手習いに目覚めて

東京都足立区　須賀まり子

私には今年七十三歳になった母がいる。ゴツゴツと節くれ立った手はよく働いたことを物語り、そのお陰で寄る年波にも負けない体力にも恵まれている。

そんな母であるが、連れ合いを亡くして十六年。独りゆっくりと歩くたそがれ時の道はいかばかりであろうか。

話は私の結婚が決まったころの十数年前へとさかのぼる。

――そのころの私の生家は、母と私と兄夫婦と三人の甥と姪とで合計七人。日本の典型的な同居家族であった。当時、甥や姪はまだ幼く、食事時、特にみながそろう夕食などはにぎやかさを通り越していた。

わいわい絶え間なく飛び交う声の中、食事も済み、後片付けも終わると、いつも決まったように兄たちは自分の部屋へと引き揚げていった。

母と私の二人きりになった茶の間には、まるで潮が引いたような静けさが訪れた。付けっぱなしになったテレビを見るでもなく何となくながめている母。もうすぐ私がこの家を出ていってしまったなら、母は毎晩こんなふうにポツリとしているのかと思うとどこか後ろ髪の引かれる思いがして胸が痛んだ。

その年母はちょうど六十の還暦であった。

生家は兼業農家で、その数年前までは畑仕事は主に母が切り回していた。来る日も来る日も土と向かい合う日々。趣味に心を傾ける暇もなく、気晴らしに外出することなど年に一度あるかないか。

働いて働いて、その合間に四人の子供を育てて……、そんなふうにして女として盛りの時期をただがむしゃらに過ごしてきた。

母にしてみれば、結婚してからというもの、慣れない農作業と家庭のことに追われ続けてやっと自分の時間を手にすることができたと思ったらおばあさんになっていた、というのが実感ではなか

ろうか。

母の老い先を思えばせめて父が生きていてくれたなら、けんかしいしいでも隠居生活の楽しみ方も寂しさも違っていたであろうに……。

しかし、その父は三年前に亡くなっていた。享年七十三歳。母とは十六も年が離れていたので致し方ないことかもしれない。

この先、母はどう生きていくのだろうか。楽しくやっていけるだろうか。うちのため、子供のため、夫のため、といつも自分のことは二の次にしてきた。せめてこれからは自分のために生きていってほしい。家を後にする娘としてそう願わずにはいられなかった。

長い間家から解放されることのなかった母にも、たった一つだけこっそり習い始めていたものがあった。それは、声高らかにこぶしをきかせて歌うあの民謡であった。

父が晩年肝硬変を患い病院に出たり入ったりするようになったころ、母も畑仕事を少しずつ離れるようになった。そのころからである。近所の家に週に一度先生が教えに来ているというので、誘われて顔を出すようになった。

といっても毎週毎週通えるわけではなく、一、二度行っては休んで、また行っては休んで、と辛うじて習っていたといえるもの。父の入院中はことさら足が遠のいた。

その民謡を真剣にやり始めたのは、私が結婚してから。まさに、六十の手習いである。孫に囲まれた生活ははた目にはほのぼのと映るが、母の心中を計り知ることはできない。ただ暇な時間をつ

ぶすためではなく、心のすきまを満たすものが欲しかったに違いない。

初めて母の歌を聞いたときは、ヒドイものだと思った。どうひいき目にみてもいい声とは言い難い。たとえていうならば、鶏が首を絞められたような声？である（高い音を無理に出すものだから、のどが締まって苦しげに聞こえる）。

それでも母は熱心だった。昔友人に譲り受けた三味線を引っ張りだし、いつの間にか先生に出張してもらう手はずも整えていた。

母の意気込みに、兄や義姉、そして幼稚園生の末の姪までがその気にさせられていた。アッという間に家族ぐるみの民謡教室になった（だけど今残っている生徒は母と義姉だけ。四歳から始めた姪は、学校で歌を歌うときこぶしを回す癖が出てしまって恥ずかしいと言って小学四年でやめた）。

母は毎日稽古を欠かさない。夕方になると三味線の音がつっかえつっかえベン、ベン、ツン、ツンと鳴り出す。昼は昼で、新聞広告の裏に歌詞を写したり、採譜をしたりと茶の間のテーブルに向かっていることが多くなった（母の文字を書く姿を見た記憶のない私は、こんな姿もいいものだと内心感激した）。

年を取ってからの習いごとは若いときのようにはいかない。目に見えるように上達するわけでもないから、教えるほうも教わるほうもかなりの根気と忍耐がいる。

一方、意外なことに母と義姉との間は年々近しくなっていった。テレビの民謡番組を一緒に見たり、今度の発表会はああだとかこうだとか、また着物はどうするだとか。こちらのほうは思いがけない成果が生まれた。

ボチボチ、コツコツと十年。母に名取の話が持ち上がった。「えーっ、名取？」私は耳を疑った。「お母さんが？」としつこく聞き返す。母は照れ隠しに「遊びでやってるんだから、と先生に断わったんだけど……」と言いながらにこにこしている。

そこまで頑張れるとは夢にも思わなかった私は、母の粘り強さに感服した。丸くなったその背中にまた一つ教えられた気がした。

名取披露の晴れの舞台のその日、母はもうあの鶏の……声ではなくなっていた。聞きごたえのある安心した歌いっぷりであった。

スポットライトに照らし出された母の姿に、私は天国の父を思った。今日の日をだれよりも喜び、また驚いているのは父だろうと。母が自らの手で飾った〝有終の美〟に、「バアさんもなかなかやるわい！」と父の声が聞こえてくるようだ。

丹下左膳

東京都葛飾区　細谷　登美

ある日、届いた郵便を何げなく開けてみたら、出てきた雑誌の表紙は丹下左膳の写真だった。じっとこちらをにらみつけている。私はなぜか懐かしさが込み上げてきて身動きができなくなってしまった。

亡夫が昔大学祭の余興で、丹下左膳をやったのを突然思い出したのだ。そのときに見せられた写真はカッコよかった。大学時代は剣道部の副主将だったし、それにいつも歌舞伎座で「ウリャーッ」と掛け声をかけていたほどの人だから、左膳の役はさぞご機嫌だったに違いない。

本は「キネマ倶楽部」といい、洋画や邦画のビデオを販売する会社の会報だった。いつも忘れたころにやってくる。

会報には「丹下左膳・魅力は今も」という題で黒木和雄氏が書いている。かいつまむと……、「大正末から昭和の初めは映画界の黄金時代で、大人気となった丹下左膳を三つの映画会社がシリーズものとして競作。左膳役はそれぞれ嵐寛寿郎、団徳麿、大河内伝次郎で、三社ともベストの布陣で臨んだこの競作、軍配はいずれにと、三社も観客大衆も関心ただならぬものがあったという。中でも伊藤監督と組んだ大河内の左膳は、一大センセーションを巻き起こす。封切り館の満員の客が銀幕の左膳の疾走とともに〝ウォーッ、キャーッ〟と異様にどよめいた。〝移動大好き〟の愛称を持つ伊藤大輔監督は〝まったく大した野郎！〟と騒がれた。間もなく治安維持法ができ、暗い時代に生きた大衆はニヒルな左膳にもろ手で拍手を送ったのだろう」

とある。

戦後の作品も合わせると、左膳ものはなんと三十本もつくられたという。だが古典的名作といわれた伊藤作品は、どこを探しても見つからないそうだ。亡夫はそれをとても残念がっていた。

外国ではどんな映画でもフィルム保存がされているという。そのころの日本は、保存管理の重要さなど考えも及ばず、経済的にもとても実現できなかったのだろう。

戦後、京橋のフィルム・ライブラリーができ、上演作品の題名につられて二人でよく見に行った。それにしても、いつだったか保管のお粗末さで火事を出し、折角集めた貴重なフィルムを大分灰に

したようだ。

映画華やかなりし昭和の初め、私の育った田舎には常設館がなかった。だから雨の降ったようなチャップリンは思い出すけれど、チャンバラ映画は記憶がない。ただガキ大将の男の子の身ぶり手ぶりの話で、嵐寛（嵐寛寿郎）や阪妻（阪東妻三郎）、大河内の活躍ぶりは知っていた。映画の黄金時代がちょうど青春時代だった夫は、邦画も洋画もその魅力をたっぷりと満喫したのだろう。もともと女の子はチャンバラなどに興味がない。そのころの私はお人形ごっこにうつつを抜かしていたのだ。

黒木氏の話は続く。

「原作者の林不忘、本名長谷川海太郎（明治三十三年生）は、二十歳そこそこで四年間アメリカ各地を放浪し、アメリカ活劇のカラッとしたテンポの速さを取り入れる。林不忘の名で時代小説を、牧逸馬の名で現代恋愛小説を、谷譲次の名でアメリカ下層社会を放浪する日本人、めりけんじゃっぷものを書き、この三つの名前がいずれも成功。一人三人という超人的な作家活動を続け、三十五歳で急死。今では本名も筆名も知る人はまれで、彼の生み出した丹下左膳の名前のみが知られている。左膳が俄然人気の的となったのは、白地に黒襟の浪人の着流し姿で、右目上から下にかけての刀傷による隻眼、右腕がなく、虚無と退廃の妖気を感じさせるからだ」

残っているのはマキノ雅弘作二本と、山中貞雄作、三隅研次作、中川信夫作が一本ずつで計五本、主演はみな大河内となっている。大河内はそれぞれの監督の気持ちをどう受け止めたのだろう。「シェイは丹下、名はシャジェン」という、あの声を思い出す。見てみたい気もするが、かといっていまさらという気もする。どちらにしようかと、私は思い出しては考えている。

娘の幸せを願う

東京都武蔵村山市　大沢　陽子

「動物保護行政の促進」を求める署名を集めに行って、里帰りしていた裕子ちゃんに会った。裕子ちゃんが、眠っている赤ちゃんを抱いてきて見せてくれた。色白のふっくらした赤ちゃんだった。裕子ちゃんの笑顔がとってもきれいだった。

「今日裕子ちゃんに会った。幸せそうだったよ」

勤めから帰ってきた娘に言った。娘は裕子ちゃんと同じ年。小・中とも同じ学校で、よく一緒に通った。裕子ちゃんは一流会社に就職し、結婚し、赤ちゃんもいる。娘は、派遣会社に登録して気ままな勤め方をしていたけど、昨年あたりから仕事がないらしく、今は安い時給で働いている。

「ね、早く赤ちゃんを抱かせてよ」

「甘いよ。子供を一人しか産まないで、赤ん坊を抱こうなんて甘い」

「もうすぐ二十九でしょ。この間も孫を連れた友達に出会って、孫ほどかわいいものはない。大沢さんだって、犬だ猫だって言っていられなくなるわよ、あんまりかわいいんで。なんて言われちゃった。もうそろそろ結婚を考えてよ」

「やだよ。お母さんみたいに人生を誤りたくないからね」

「まあまあの人生でしょ」

「お父さんと結婚しなければ、もっといい人生だったかもしれないよ」娘は言う。今のところまったく結婚する気はないのだ。

私が、いついつどこそこに行こうと思うけど、などと夫に言っていると、「いいですかなんて言ってないで、行くって言えばいい」と娘は言う。夫が「もうすぐお昼だけど」と私に言うと、「おなかがすいたと思った人がつくればいい」と言う。

「今日おふろを沸かすでしょ」と言えば、「入りたいと思った人が沸かせばいい。お母さんは今忙しいんだからね」と言う。うちではいつも一方的に夫が優位で、彼文句言う人、私聞く人という感じで暮らしてきたけど、娘は負けていない。ポンポンポンポン言いたいことを言う。

娘は大学を出てからも、建築だ、織物だと色んな学校へ行き、今は働きながら編み物を習っている。色々習ってもそれと仕事とが結びつかず、いまだに自活できない。

収入の多かったときはお金をためては外国に行っていた。美術館巡りに出かけたり、体制の変わる前の東欧の各国を回って三カ月近く帰ってこな

かったりした。言葉も分からない一人旅でどうしているんだろうと思うけど、少しの英語と身ぶりと絵をかくことなどで話は通じるらしい。行った先々から元気そうな絵ハガキが送られてきた。

「お母さん育て方うまかったね。一度も勉強しろって言われたことなかったもんね」と前に娘は言った。そうでしょと自分でも思っていた。娘は時間の使い方でも何でも自分のことは自分で決めた。高校に入ってからのお弁当はずっと自分でつくった。娘は私より料理がうまいのだ。手のかからない子で、私は楽で、自主的な人に育ってくれてよかったと喜んでいたけど、ここ二、三年は育て方がよくなかったのか、と思ったりする。このまま年を取ったら、娘の未来は明るくないような気がして心配でしかたがない。

私の暮らし方を見て、結婚したら不自由になる。男は威張るから嫌だという思いを持ったとしたら反省しなければならない。

娘に幸せになってもらいたい。子供を持って私は幸せだった。だから娘にも持ってもらいたい。赤ちゃんは柔らかくって暖かくってかわいい。笑ってもあくびをしてもトントン布団をけっても何をしてもかわいい。こんなにかわいいものはない。赤ちゃんを抱く喜びとか、育つのを見る喜びとか、娘にも味わってもらいたい。

結婚相手はどこの国の人でもいい。娘が好きなら。最後まで一緒にいるのが無難なんだろうけど、そうでなくてもいい。

結婚については、どっちが幸せか一概には言えない気がする。だからこのことについては心のままに。ただ、子供は持ってほしい。自立できる仕事も持ってほしい。

もう大人だから、自分の人生は自分で選びとっていくほかないんだけど、子供がいて孫がいてというような人生のほうが暖かそうで、私としては安心できる。

シロ

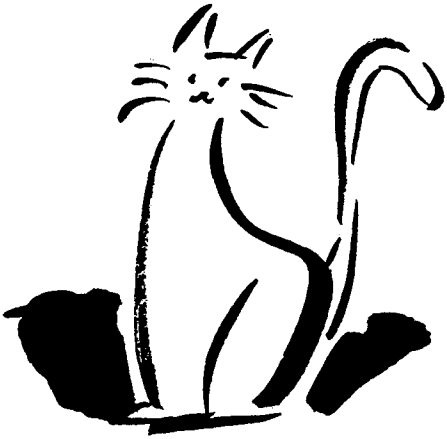
香川県小豆郡　広瀬サカヱ

隣の地区に出かけての帰り、新築の家の勝手口から怒声が聞こえてきた。

「汚い、出て行け！」追われてヨロヨロと、こちらに歩いてくるものがいる。雨ざらしのぼろ布のような、その生き物の耳に見覚えがあった。両方の先がハート型に割れている。

「シロ？　シロじゃないの」相手は緩慢に顔を上

げて立ち止まった。やっぱりシロだった。
そのまま、うちについてきたのを見て、「子猫じゃないか、シロがこんなに小さいはずがない」と夫は言う。往年の一抱えほどもあったころからは想像できない、うらぶれた姿であったから。
それから終いの日までの一週間をシロはずっとわが家で過ごした。
私はシロと付き合った長い日々を思い返した。まだ子猫の時分からうちの勝手口に来てえさをねだった。ねだるといっても、ただじっと座って待っているだけ。その辛抱強さに負けて、ついついえさを与え続けて十数年が経っていた。



幾ら野良猫だといっても、それだけ長い間付き合っていると、少しは人に慣れてもいいはずなのだが、野良の習性というのだろうか、人を警戒して体に触れさせなかった。
えさを食べているとき、そばを通ると、うなり声をあげるし、くわえることができるものなら何でも人の目につかないところに持っていって食べるのだった。一度夫は、勝手口でえさを食べているとき、魚の頭を追加してやろうとして、したたかに手をかまれ、「シロにはこれから絶対、えさをやるな」と怒った。
それでもシロは翌日、ケロッとして勝手口の外に座っていた。
飼い主にはじゃれつくのに、見知らぬ人には猛然と跳びかかる犬、ニャーニャー鳴いてひざにのってくる飼い猫。それらとは違ってシロは、〈えさはもらうがこびは売らんゾ〉といった毅然としたところが私は気に入っていたのだが、相手はついぞ気を許すことはなかった。
大きな体にものを言わせて、近隣の猫の頂点に立って、過保護な飼い猫たちをいつも脅かす嫌われものでもあった。
小さいころは、丸顔で白地に大きな茶色のはん点が入った毛をしたかわいい猫だった。長じては

肥えて、顔は将棋の駒のような形になり、けんかに明け暮れて満身創痍、耳の先は両方とも割れていた。

数年前、わが家で小さな猫を飼いだした。その猫は、シロがえさを食べているところで、跳び回ったり、付きまとったりしていたが、シロは意に介せず、完全に無視していたのは不思議だった。

しかし、うちの猫が成長して、シロをしのぐほどに大きくなって、雄猫同士でしれっな闘いを展開しだすと、始め優勢だったシロも寄る年波には勝てず、形勢不利とみたのか、次第にわが家に足が遠のき、ついには姿を見せなくなっていたのである。

シロがヨボヨボになってうちに来た日、私はうちの飼い猫に言い聞かせた。「シロはもう死にそうなんだから、絶対に手出しをしてはいかん」と。この言葉を理解したかどうか、恐らくはけんかするには相手不足と見たのだろう。今度はうちの猫がシロを無視した。

真夏のことだったから、シロは庭の木の下や、風の通る軒下で終日寝ていた。

えさと水を持っていってやると、大儀そうに首をもたげて、一口水を飲むのがやっとだった。そして、寝たまま私の足に首を擦り寄せるのである。白い毛は灰色になり、目やにをつけ、のみが浮いているので、手を出すのはためらわれたが、そっと背中をなでてやると、満足そうに薄目を開いてのどを鳴らす。

元気だったころは指一本触れさせなかったくせに。生涯、野良の気性を通して、最後に見せた甘えであった。

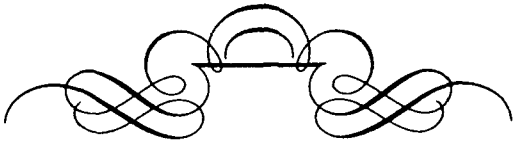
そんな一日、シロがふらふらと起き上がって、カンカン照りの表に出て横になった。驚いた私は、ついに頭にきたのかと慌てて、抱いて日陰に移した。後日、友人から聞いた話によると、やはり飼い猫が死ぬ直前、夏だというのにトタン屋根の上で寝ていたというのである。「体温が下がるのかしら」と友人は言う。

一週間目にシロの姿が見えなくなった。隣の奥さんが三時ごろ、よろよろと裏門から出ていくのを見たと教えてくれた。

首をもたげるのさえやっとだったのに、遠くへは行くまいと、辺りを随分探し回ったが見つけることはできなかった。

シロのような終末を迎えることができたらと、うらやましく思うが、人間である私には不可能なことである。

（え・カステラネンコ）



派遣社員の行方

埼玉県浦和市●藤永洋子

今から一年四カ月前、「私にできるのだろうか」という不安と戦いながら、派遣社員として働き始めた。研究アシスタントという名目で、あるシンクタンクと週四日の契約をした。まだバブルの名残があった当時は、よほど人手が欲しかったとみえて、できたら週五日来てほしいし、マッキントッシュを覚えてほしいとのことだった。

私はといえば、実に四年ぶりの現場復帰。その空白の四年間に、世の中は急速な機械化を遂げていた。マッキントッシュとは何のことやら？　じゃ、一太郎は？　花子は？　面接担当者の口から出る固有名詞に頭はこんがらがるばかり……。結局、アルファベット入力ができるということで、採用となった。今思えばラッキーだったし、穴があったら入りたい。

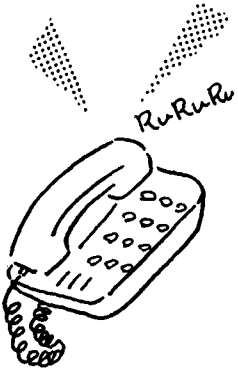
さて、仕事より先に味わったのは、あの通勤ラッシュ。私も仕事人間の仲間入り！とばかり、電車のドアに突進していく。これがナントも快感だった。週の真ん中水曜日に休みを入れたので、再就職の身にはちょうどよかったのかもしれない。

三人同時に採用されたので、昼食を取る仲間もできた。順調な滑り出しだった。

最初の仕事は、与えられたテーマごとに新聞の切り抜きをすること。日経金融、日経工業、日経産業など、家庭ではお目にかかれない新聞を前に興味津々。英字新聞を前に、記事の切れ目が分からずおろおろすることもあった。新聞の次は資料室で雑誌や専門書、新聞の縮刷版などから必要な情報を取ることを覚えた。オンラインで情報提供が受けられることも初めて知った。

つまずいたのはその後である。機械関係にまったく弱い私は、新種のコピーマシンの前で、たった一枚のコピーを取るのに手間取ってしまう。ここシンクタンクなるところでは、「報告書」というコピーそのものが製品となるので、汚れやズレは許されないのだ。マシンが七台も並ぶコピー室で右往左往する自分が悲しかった。

それを乗り越えるといよいよマッキントッシュのお待ちかね。最新機種ということだったが、初めてお目にかかるマウスは、私の手にかかると、まるで酔っ払いのネズミだ。動かしているのは紛れもなく私の右手なのに。



「何でも聞いてください」と、三歳も年下のハンサムな担当者が言ってくれるけれど、そうも甘えてはいられない。そのうち、迷惑顔を向けられるに決まっている。こっそりノートをつくり、マニュアルをひもとくことにした。勤勉な自分と褒めてあげたいところだが、そうしないとまったくと言っていいほど覚えられないのだ。驚くほどに物覚えが悪い。昔はこんなんじゃなかったのに……。

そのころは、途中で投げ出すわけにはいかないと、意地だけが私を支えていた。

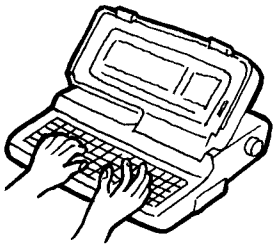
やっと一歩前進したと思ったら、突然の異動。今度は六歳も年下の女性研究員がやってきた。均等法世代との遭遇となって、正直なところ複雑な気持ちだった。「女の敵は女」なんていうけれど、悲しいかな私にも嫉妬心が芽生えてしまった。とはいっても、私は彼女と同じ土俵には上がれない。頑張りたくても相手にされるはずもない。

そして、今、新聞・テレビの向こう側にしかなかったはずの「不況」が私の前にやってきた。週二日、二カ月ごとの更新という契約変更である。

振り返れば、派遣社員として働いたことは、社会復帰を果たすためのワンステップとなり、適度な刺激を与えてくれた。自分の現実と直面し、世の中とのズレを修正することができたのだから。しかし、二年目を迎えようとしている今、切に自分の土俵が欲しいと思うようになった。会社という規制の枠組みの中では、私の土俵は一生見つからない。

とはいっても、「次」がそう簡単に見つかるわけもなく、当面、時給アップのためにワープロ検定を目指す決心をしたところである。

（え・奥島千恵子）



加藤秀一・坂本佳鶴恵
瀬地山 角 編

フェミニズム・コレクション

—全3巻—

Ⅰ 制度と達成
Ⅱ 性・身体・母性
Ⅲ 理 論

リブ以降の基本文献を集成。 内容見本呈
各3296円〒380

吉澤夏子

フェミニズムの困難

どういう社会が平等な社会か イメージ作りをめざす。2369円〒310

杉本貴代栄

社会福祉とフェミニズム

アメリカの社会福祉をフェミニズムの視点から再検討。2884円〒310

J.L.フランドラン
森田伸子・小林亜子 訳

フランスの家族

アンシャン・レジーム下の親族・家・性 16～19世紀。 3811円〒380

姫岡とし子

近代ドイツの母性主義フェミニズム

母性を軸にブルジョア女性運動穏健派の軌跡を追う。 3605円〒380

女性学研究会編

女性学と政治実践

女性学研究 第2号 運動の理論枠を拡げ政策提言へ。 2575円〒310

＊定価は消費税込みです。

勁草書房

東京都文京区後楽2－23－15
☎3814－6861 (振)東京5-175253

新連載

ミズ色の人間模様

千葉市中央区
石川　久代（31歳）

源氏名は朝香（あさか）

「お早うございまーす」

午後七時をまわった通りを歩きながら、私は顔見知りのパブレストランのウエーター氏にあいさつをする。

「朝香ちゃーん。今日もきれいだよー」

調子のいいお愛想ににっこりほほえみ返しながら、今日の指名ノルマをもう一度指折り数えて、ネオンのともったビルの階段を地下へと駆け下りる。

ここは、いわゆる歓楽街。

今から十二年前、当時十九歳になったばかりの私は、この街で働いていた。仕事はクラブホステス。いわゆる水商売、「おミズ」である。

なぜ、私がこの街で働くようになったかの説明はあとにして、ウエーター氏が呼んだ朝香という名前は、もちろん本名ではない。水商売で働く人間は普通、源氏名という偽名を使う。これは女性に限らない。店のマネージャーやウエーター、ポーター（客引きとも呼ばれる）などもたいてい源氏名を持

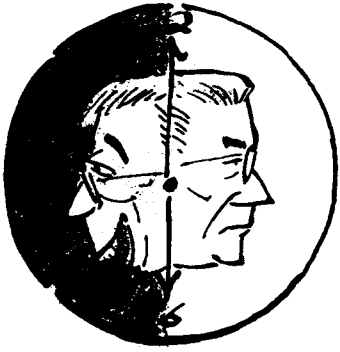
っている。

女性の源氏名は、かわいい響きや特徴のある名前が多い。これは名前を覚えてもらうのと同時に、忘れないでいてもらうための必須条件なのだ。どこにでもある名前というのは、下手するとお客様の奥様と同じ名前などという可能性があるので、なるべく一般向けではないような名前を付ける。マコ、ねね、ミカ、ルリなどはかわいい名前の代表であり、むらさきとかカンナ、果てはなめ子などという特徴のある名前もある。

男性は何といっても景気のいい名前が好まれる。○造、○助といったたぐいの名前は見当たらない。パリッとタキシードを着こなしてテーブルの間を歩くとき、「○造さーん」などと女の子から声が掛かったりすると、店全体が興ざめするからという理由を聞いたことがあるが、ほんとうかどうかは分からない。

私の朝香という名前は、担当になったマネージャーと相談して決めたのだが、実はこの名前は将来自分に女の子が生まれたら付けようとひそかに決めていた名前だった。そんな神聖（？）であるはずの名前を源氏名として使ってしまったのだから、私も相当ちゃっかりしている。

一般の人にとって（何をもって一般とするのか私にもよく分からないが）、水商売というのは多分あまり縁のない世界だろう。そして「おミズ」というのは蔑称の最たるものではないかと思う。「おミズ」イコール自堕落な女、頭の悪い女、不幸な女……。そんなイメージを持つ人が多いのではないだろうか。確かに水商売は広辞林によると「客の人気によって立っていく、盛衰の激しい商売」ということで、その不安定さや虚構性は認めなければならないが、決して不誠実な仕事ではないと思う。私は水商売を推奨するつもりはないが、世間でいわれるイメージのようなとらえ方だけはしたくない。それは私の安いプライドかもしれないが、私にとっての水商売は大げさにいえば悲喜こもごもの人生が凝縮されたドラマチックな仕事だった。そして人間には昼と夜の顔のあることを教えてくれた世界だった。



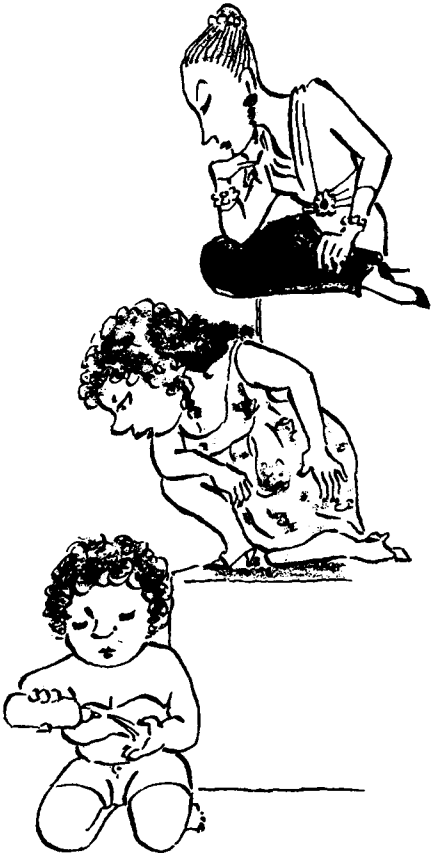
今では水商売のことを風俗営業といって、私の働いていたころとは多少様変わりしているようだが、この世に男と女がいる限り水商売の需要と供給は尽きないのではと思う。

水商売は男女とも需要にもなり供給にもなれる世界だし、（ホステスもいればホストもいる）バイセクシュアルな人間だって重用される。

過去があろうが、うそがあろうが、水商売はそういったたぐいの差別に関しては、昼間の世間よりずっとまともなのではないかと思う。

もちろん水商売にも差別はある。例えばクラブと一口に言っても、超高級会員制からキャバクラ（キャバレーとクラブの合いの子）、パブクラ（パブとクラブの合いの子）とあるし、キャバレーと言われるものでもオーソ（オーソドックスな色気を売り物にするもの）からピンク（過激なサービスを売り物にするもの）までの店がある。さらにソープランド（私のころはトルコといったが）、立ちんぼ（街角に立って客を引き売春をする人）なども水商売の一員である。

同じ水商売ながら、クラブで働く人間はキャバレーを下に見なし、キャバレーの人間はソープを見下しといったカースト制度のような構図は確かにあった。そして例えばオーソのキャバレーで働いていた女性がピンクの店に勤めることはできても、ピンクの女性がクラブで働くことはできないといった暗黙の了解があった。



「水商売」のランク分け

さて私の働いていた店だが、名前上はクラブだが実態はキャバクラというほうが正しい店だった。クラブとキャバレーはどう違うのか簡単に説明すると、まず決定的な違いは値段である。当時の相場でいえば（もちろんピンからキリまであるが）普通クラブは一人平均三万円、キャバレーだとその半額くらいで楽しめる。私の店は中間で大体客単価二万円くらいだった。よく銀座のクラブなどで「座っただけでウン万円」と紹介されているが、それは特殊な例ではないかと思う。もちろん座っただけで何も注文しなくてもお金は取られる。これはテーブルチャージというもので、このテーブルチャージの値段イコールその店の格ともいわれる。

水商売の店ではあまり料金の明細書

を出さないので、世の奥様方が「ウチのだんなはぼったくられているのではないか」と不安に思うのも無理ないが、一部を除いて一応正当な料金である。私も正確な明細は分からないが、少なくとも先程のテーブルチャージ、ホステスチャージ（指名料）、ボトルキープ代、チャーム代（突き出し）、それにメニュー（おつまみ）、飲食税などを合わせれば二万三万という額になってしまうのだ。ちなみに私の店では、ボトルがキープされているとして、先程の値段くらいはかかってしまうのが普通だった。

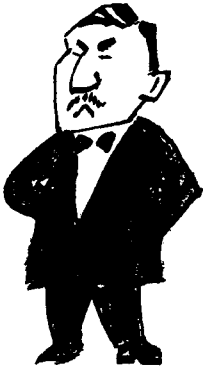
ホステスチャージは一人指名で二千五百円だから三人呼べば七千五百円。テーブルチャージが二千円。ボトルキープ代が千円。あと二、三品のおつまみとホステスの飲み物を取れば五、六千円はかかる。それに税金を払えば、大体二万円ぐらいにはなるわけでぼったくりでも何でもない。実際、お客様がぼったくりと感じたらもう二度とその店には来ないであろう。高いと感じることはあっても絶対的に不当な値段だとは思われないから、多くのクラブやキャバレーは経営していけるのだと思う。

次にクラブとキャバレーの違いを挙げれば従業員の質の問題があるだろう。店の主役はもちろんお客様だが、いいホステスがいない店には当然いいお客様は来ない。そしていいホステスをしっかり管理できる能力のある男性従業員も影の大切な存在なのだ。いいホステスとは決して美人だからとか、色気があるからというものではない。私などホステスとしてはヒヨッ子だったが、「すごい」と感心するホステスはやはり高級クラブに多かった。

彼女たちはプロなのである。酔ったふりして絶対に酔ってはいない。上手に甘えてお客様にお金を使ってもらう。シビアだが必ず見栄を忘れない。うそはもちろんつくが、そのうそを許されてしまうだけのかわいさと器がある。

男性従業員もここぞという引き締めどころをよく知っている。暴力団関係者などには毅然とした態度をとる人も多い。「水商売って暴力団のことでしょう」と言う人がいるほど「おミズ」は暴力団と仲良しと思われているようだが、少なくとも一流の店を目指すなら暴力団に付け入られないよう万全の対策を施している。

お客様がそのスジと分かったときなどマネージャーの腕の見せどころである。「毅然としたなおかつ丁重な態度で接すれば案外素直に帰ってくれるものだよ」とは私の店のマネージャー氏の言葉である。暴力団関係者もその辺は心得ていて、自分たちが関係する以外の店へはそうそう立ち寄らない。だか



ら私も二年半のホステス業の間、暴力団のお客様を接客したのは二、三回だったし、すぐにマネージャーが気付いて助けてくれた。ただしこれには余談があるが……。

クラブにはやはりよりプロらしい従業員が集まり、キャバレーは時間や異性関係にだらしなかったり、お客様を差し置いて自分が酔っ払ってしまったりするようなホステスもいる。だから歴然としたものではないが全体的に見ると質の差というのを否定できないだろう。

その他の違いを挙げるとすれば、箱の大きさの違いというのもある。「箱」とは店の規模のこと。テーブル数、ホステス数などは圧倒的にキャバレーが多い。クラブが少数精鋭ならキャバレーは薄利多売だからだ。昔は劇場型キャバレーといって広いステージとダンスフロアを持ち、テーブル数三百、ホステス五百などという店があったというが、私のころはせいぜいその半分といった感じだった。ちなみに私の店はテーブル数三十五、ホステス数五十といったところで規模からいってもキャバレーとクラブの中間だったのだ。

値段、従業員の質、箱の大きさ、どれをとっても私の店はキャバクラと呼ぶのがピッタリだったと思う。マネージャー氏は常々「クラブホステスとしての誇りを持って仕事をしてください」と言っていたが、ホステスの間では「ウチは値段だけクラブで女はキャバレーよ」と自嘲気味に話されていた。

きっかけは、不倫

十九歳だった私がなぜホステスという仕事に就いたのか、これは意外かもしれないがスカウトされたからだった。もちろん伏線はあった。そのころ私は大学一年生だったのだが、親元を離れ

妻子ある男性との初めての大人の恋に盲目となっていた。「三百万あれば女房と別れられるんだけどなぁ」という言葉を真っ正面から受け止めてしまった私は、アルバイトを探しに街へ出た。そのとき道に迷って歓楽街へ足を踏み入れてしまったのである。

あるビルの前で店舗の改装工事が行なわれていた。そこで指揮をとっていた男性に駅への道を尋ねた私は、

「こんなとこで何してるの？　かわいい子が危ないじゃないか」

と話しかけてきたその人につい気を許してしまった。

「アルバイト探してるの？　運命感じるなぁ。君みたいな子を探してたんだよ。君もてるでしょう。すごく感じがいいもの」

甘言と分かってはいてもそこは田舎から出てきたばかりの若さゆえか、つまらない自意識のゆえか、私はその男性と三日間だけのアルバイト契約を結んでしまった。三日間というのは新規オープンするそのクラブのレセプション期間で、通常のホステス数だけでは人手が足りないためお手伝いとして働くという条件だったからである。

「ただにこにこして、何にも心配しなくていいんですよ。全部私が指示しますから」

その言葉どおり、三日間の間私は彼の指示に従いただテーブルの間を行ったり来たりして、

「いらっしゃいませ」

と言いながらビールをついだり水割りをつくったりしただけだった。一緒のテーブルにつく本職のホステスも承知のもので、危ない場面になりそうになると、さっとかばってくれたり機転を利かせてくれるのである。

約束の三日間が終わると、社長自らが、

「とてもよくやってくれてほんとうに助かりました。もっと長く働いてほしいんだけど、あなたの意思を大切にしたいから」

などと言ってアルバイト料を渡してくれた。時給二千円。三日間のトータルで三万円というお金は、私の半月分の生活費に相当するほどの大金だった。

きつねにつままれたような三日間が終わり、私はまた大学生活と不倫という不釣り合いな日常に戻っていった。不倫の恋は強烈ではあるがやりきれなさも倍増する。

自分がどんどん惨めになっていくような錯覚に陥っていた私は「毒をもって毒を制す」という言葉を実践してみようと思い始めた。この恋よりもっとつらい思いをすれば、こんなやりきれない日々から救われるのではないかと考えたのである。

そんな折、かの男性（マネージャー氏）からまるで私の心を見透かしたように電話が入った。

「たまには食事でもどう？　近況も聞きたいし」

それが入店の誘いであることは未熟な私にも分かっていた。

それから一週間後、私はマネージャー氏と自分の源氏名を付けていたのである。

―つづく―

（え・西田淑子）

おさない子を育てる

カウンセリング四年間

神奈川県綾瀬市●宇都宮典子（47歳）

私はA市立公民館で社会教育指導員をしている。初妊婦さんを対象とした学級を企画した。〝わいふ〟の田中編集長に講師をお願いして「はじめての育児」というテーマでお話をしていただいた。講義の中で「――子供が十人いたら、四人はいわゆる手のかからない育てやすい子、五人はどっちにもなる子、残りの十人目の一人に、どうしようもなく育てにくい子がいる。そういう子に巡り会ってしまったら、こういう子なんだと思うこと――」というお話があった。私は、ああこれだ、うちの息子はこの十人目の一人だったのだと胸がキュッとなった。このことが分かっていたら、以下のようなことはなかったと思う。

田中編集長のお話をうかがって、私の育児にまとわりついていたすべてのものにピリオドが打てたような気がする。

長女五歳、次女二歳に続いて長男が生まれた。夫が三十六歳、私が三十歳であった。エンジニアの夫は新製品の開発研究で、帰宅は深夜のことがざらにあった。

そのころ、夫は係長から課長に昇格した。欲しがっていた男の子だから、まめに育児に参加するだろうという私の思い込みがあったが、寝るためにだけ帰ってくるような生活が続いた。

当時のことを思い出してみると、私は疲れているし、余分な時間はないはずなのに、3LDKの家をよく模様替えをしていた。団地では床に段差がないので、大きな家具も敷物をすると、押したり引いたりして移動はそうやっかいではない。無意識のうちに気分転換をしていたのだ。ほかに気分転換をする方法を見つけられなかったかと今では思う。セルフコントロールというところだろうか。

息子はよく泣く、下痢をする、私がトイレに行っても後を追う、小児科の建物に入っただけで泣く。十一カ月で歩き始めたが、外へ出ると、手を離すとどこへでも行ってしまう（赤ん坊なら当たり前のことば

かりだが)。

夫のこと、三人の子供の世話、自分の楽しみの中断、私は毎日イライラしていた。母親が精神的によい状態でないことは赤ん坊によいわけがない。息子は何かを感じ取っていたに違いない。

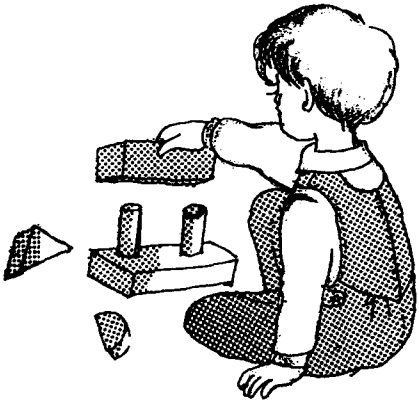
言葉が遅い

息子は二歳近くなっても、あまりよくしゃべれない。公園で遊ばせても、大通りのほうへどんどん歩いていって、ほかの子供たちと交わることは好まなかった。自閉症、多動児などの心配が起こり、私はY市の児童相談所に連絡して出向いていった。

親子での面接の後、担当のカウンセラー氏が言った。「知恵遅れかもしれません」その日、ほかにどのような話をしたか、どのように帰ってきたか覚えていないが、その言葉だけが今でも脳裏にある。ただ、ショックではあったが、心の奥で〝まさか〟という気持ちが確かにあった。言葉は遅いが、相手の言葉は理解していることが生活の中で分かっていたから。娘たちの成長の仕方と息子をつい比較していたのだ。

引っ越し

息子が三歳のとき、団地から一戸建の家に引っ越した。夫はもともと団地住まいがあまり好きでなかったので、一生懸命、家探しをした。同じような年齢の親、子が住む団地生活から移ってきて、私は気持ちが楽になったことに気付いた。団地を売って頭金にした住宅ローンを組んで、経済的には苦しくなったが、子供たちが幼かったので、経済的なことより精神的に楽なほうが私にとってうれしいことだった。



B児童相談所へ

引っ越ししてきた市は当時、人口六万人に満たない小さな市なので、すべての行政機関がそろっているというわけではない。二つ隣のB市の児童相談所を紹介された。Y市でのことが頭から離れないまま、私は息子の幼稚園入園のことを考え始めていた。ここでの対応は、一人のカウンセラーが息子と遊びながら様子を見てくださり、もう一人のほうが私の話を聞いてくださった。二人とも中年の女性である。週に一度、母子で楽しみにして出かけていった。娘たちも一緒のときもあり、三人と先生(私たちはカウンセラーの方を先生と呼んだ)で色々な遊びをした。おままごとの道具の中で野菜や果物のおもちゃがあり、息子は担当のカウンセラーの方を「しいたけ先生」と呼んで喜んでいた。

私は息子が集団生活に慣れるようにと、幼稚園より保育園を希望した。保育園は保育時間が長く、給食、昼寝などが特長だ。しいたけ先生方は、保育園の入園の手続きも親切に手伝ってくださった。入園時に何

らかの問題児の項目に記入されると、小学校、中学校に入るまでずっとついてまわるので、その点も心配ないようにしてくださった。つまり、ちょっと普通とは違うけど、これといった決め手の問題、障害はなかったのだ。

小児療育センター

市の保育園に入園してからは、私たち母子のケアはB市の児童相談所から県の小児療育センターにバトンタッチされた。より専門的な機関を紹介されたのである。有料の患者さんもいる中で、私たち母子は無料だった。それは福祉課の扶助で、やはりまだ、要治療の状態から抜けていないことを意味しているのだ。でも私は落ち込むことはなかった。親しい人にはこの状況を、むしろ喜んで話した。希望的な通院（？）だったから。

予約された一時間に行なわれることはB市の児童相談所と同様で、母子別々にカウンセラーと対する方法であった。このセンターは設備が充実していた。子供が遊ぶ部屋にある鏡は、隣の部屋ではガラスになっていて複数の専門家が観察している。

ある日、息子の脳波を調べることになった。睡眠薬の錠剤を嫌がりながらやっと飲んだ息子は、意識はもうろうとしてきても、眠りにつくことができない。恐怖感もあっただろうし、何より神経が過敏な子なのである。担当医は次にやむを得ず注射をした。ようやく脳波を調べる作業に入ることができた。

結果、「脳波に異常はありません」この一言で私はホッとした。その後は薬が効きすぎて、息子は帰りの電車の中でぐずりながら眠ったまま、タクシーから降りても、午後、夜と一度も目を覚まさず朝まで二十時間以上も眠り続けた。翌日は、園の運動会で、昨日のことなど何もなかったように元気に参加した。私は大人のリレーで転んでしまったが。

お母さんと一緒におふろに入る

息子のほうは自然な成長で、私のほうは先生方の目に見えないアドバイスで、二人の間に少しずつ変化が起きてきたはずだ。

あるとき「てっちゃん、今日はだれとおふろに入る？」と私は聞いた。「てっちゃん、今日、お母さんと一緒におふろに入るよ」私は耳をうたぐった。センテンスになっている。ほとんどの会話が単語だけで済ませてきた息子の言葉が。「てっちゃん、今何て言ったの、もう一回、お母さんに言って」私はうれしさのあまり、こう言ってしまった。「お母さんとおふろに入るって言ったの」と息子は言ってくれた。

子供の成長の仕方は様々なのだ。ゆっくり見つめていこうという気持ちが、やっと持てるようになった。

入院してよかったわね

五歳の春に腕の顆上骨折をして一カ月の入院、五カ月のリハビリテーションというアクシデントに息子は見舞われた。リハビリ中にもセンターに行った。事のいきさつを話すと、カウンセラーの方は「てっちゃん、入院してよかったわね」とおっしゃった。気の毒でしたね、大変でしたねと言われるとばかり思っていた私は「えっ」という感じだった。「一カ月、お母さんとずっと一緒にいられたんですものね」とも。

骨がつながっても腕が曲がるかもしれない（肘関節の骨折で、現に関節に近いところが少し曲がっている）と医師に言われたときから私は落ち込んでいた。カウンセラーの方の言われるような考えは一秒たりともしたことがなかった。過ぎたことを悔やんでもしかたないのだ。そして何よりも、カウンセラーは息子の側の心の中を見ている。一カ月の入院はマイナス面ばかりではなかったのだ。息子の情緒の安定に役立ったのか。私たち母子を久しぶりに観察してのカウンセラーの方の感想か、あるいは心理学を十分に学んだ人たちのマニュアルどおりの対応か、いずれにしても私をうれしがらせてくれた言葉だった。

この件があってから、私の中で何かが落ちていき、またまた気分が楽になった。

「センター」を卒業

センターに予約する期間が、一カ月ごと、三カ月ごと、半年ごと、そして一年後と、徐々に長くなり「もう来なくてもいいですよ」と言われた日は、今までお世話になった先生方への感謝の気持ちと、息子はもう大丈夫なんだという気持ちで私は泣いた。問題があったのは私のほうで、息子とのかかわり方がとても下手だったのだ。

息子が三歳から七歳までのカウンセリングの主役は実は私だったのだ。息子が0歳から三歳までのことを思い直すために三歳から七歳までの四年間が必要だったのだ。骨折後のリハビリがギプスをしていた期間と同じだけ必要なように、まさに心のリハビリ期間だった。

私と夫、私と子供とのかかわり方とか自分の在り方を、自分で考え、気付かせてくれるためのカウンセリングだったのだ。先生方は何一つ断定的に、命令的に、また批判めいたことはおっしゃらない。面接では、日常のことやとりとめのないことを話しただけのような気がする。

二十歳になれば

私が悩んで行動を起こすことに対して、夫は無関心でも、反対でも、賛成でもなかった。好きなようにさせてくれた。仕事で手一杯だったこともあるだろう。また、夫は子供は勝手に育つという考えも持っていた。「二十歳になれば普通になるよ」という何げない言葉に、私は救われた気持ちになり、それを励みに暮らしてきたような気もする。

中学三年ころから少し勉強が好きになり、高校二年の今は、毎日陸上部で長距離を走っている息子。将来は英語の先生になりたいと言っている。そしておしゃべりである。小さいころの彼を知っている人たちは、あまりの変わりように戸惑っていて、それをながめて私は面白がっている。

（え・小島佳子）

連載2

ともに生きる

――娘の発病そして臓器移植――

東京都世田谷区　本庄たよ子

家の改築

娘が仕事を辞めようかと言い出したころから私は家の改築を考えていた。共働きならともかく、都内の家賃は負担が重すぎる。また病院に通うのも朝のラッシュアワーに長時間もまれなければならない。世田谷に住めば北千住の半分以下の時間で通うことができるのだ。

たまたまわが家では、長男と次男が二人とも結婚して出ていったので、娘の部屋ともども空いていた。二階は夫の書斎と義母の居間が使われているだけである。ちょうど夫が停年退職をしたばかりで、改築の費用も何とか捻出(ねんしゅつ)できそうだ。改築するには願ってもない状況だった。

私は母に頭を下げて頼んだ。これから始まる工事の煩わしさと、若い夫婦との同居生活は、年老いた母にもかなりの気を遣わせてしまうことになるからである。

孫娘の発病に心を痛めていた母は「それが一番安心だ」と喜んで賛成してくれて、私もまず第一関門通過にほっとした。

そして次は、娘の夫のご両親に了解を求めなければならない。結婚したとたんに発病、そして嫁の実家に同居ということになってしまうのだ。あちらでもこれからの生活を心配して「二階に住むとよい」とおっしゃってくださっている。もっと

90年10月　退院の日

も透析に通院するのには、ちょっと遠すぎるということはあったのだが、本来ならば夫の家に住むのが普通である。

ご両親、特にお母様には色々葛藤もあったことと思うけれど、「千佳さんの気持ちが一番大切です。病気をしたときは気を遣わずに療養できるのが何より……」と快く許していただけたのはほんとうに有り難かった。

娘の夫も「千佳のために僕は喜んでマスオさんになりますよ」と言ってくれた。

さて、改築の第一歩を私は踏み出した。わが家は十年ほど前に旭化成のヘーベルハウスを建築したので、そこのリフォーム課へ連絡した。すぐに来てくれたが注文がこんでいるので、大分先まで待つことになるらしい。

それが「娘が透析に通うための同居」と話したとたん、態度が変わった。「それは大変なことですね。以前に透析中の奥様の家を改築したのですが、通院はつらそうでした。そんなご事情なら何とかすぐに取り掛かるようにしましょう」と言ってくれた。

それからはまさにトントン拍子で、息子の部屋の本棚は押し入れに、娘の部屋はシャワールームと洗面所に、ベランダにはリビングキッチンが増

築された。二階に直接上がれるらせん型の外階段も取り付けた。

建築の設計、工事の交渉は私が一切引き受けた。もちろん夫も協力を惜しみなくやってくれてはいたけれど、一日も早く娘を迎えたい一心で張り切っていた私に、「女の底力を見た」と言った。結婚して三十七年、この家に来て私が自分の意志をこれだけ強く押し通したことは初めてであり、最後だと思うくらい私は頑張っていた。自分のためだったらこんなに頑張ることはなかっただろう。

いや、やはり私のためだったかもしれない。私は娘を身近に置きたかった。何としても娘の力になりたかった。

家の中を新しく変えていくということは、夢があり喜びがある。この改築が、娘の病気に立ち向かうファイトも与えてくれたように思えるのである。

娘の入院中、同室だったOさんが話したことがある。彼女は韓国人だが「日本にはとてもよいことわざがあるね。何と言ったかな。幸せでないのに幸せがある、ということよ」私たちはしばらく考えて、不幸中の幸いということわざを思い出した。「そう、ほんとうにそうよ。どんなに不幸でも必ず何か幸せがあると思うよ」と彼女は言っていた。

病気は不幸なことだ。でも確かに私たちは不幸中の幸いに恵まれていた。改築のことでも、またこれから起こる数々の試練のときでも、幸いなことはたくさんあったのだ。

退院そして通院

暑かった夏も過ぎて、娘は退院した。

しばらくの間はこちらで暮らし、通院に慣れたら新居のある北千住へ戻り、こちらの改築が済んだら引っ越してくることになった。

退院の翌日、秋物の衣類を取りに次男の車で北千住へ行った。一カ月前に慌ただしく出ていったマンションのドアを開けると、娘は奥の部屋まで行き、しゃがみ込むと静かに泣いた。病気になってから一度も泣き言を言ったことのない娘が、初めて泣いた。

どんな思いがあふれているのか。それは口に出し尽くせぬほどの思いだろう。娘の夫も、次男も、私も、かける言葉もなく、それぞれがじっと黙ったまま娘の心を思いやっていた。

いよいよ透析のための通院が始まった。

八時には病院へ入らなければならないが、ラッシュアワーの時間である。娘の手首には透析のためにつくられたシャントがある。満員電車は危険

なので、始発で乗り継げるバスで通院することにした。バスは時間が不定期なので三十分の余裕をとって七時前に家を出た。

透析室では四時間もチューブにつながれたままになるのだが、その間は本を読んだり、昼食も片手で食べられるし、隣の人とおしゃべりすることもできる。六十歳を過ぎた方たちが多いので、娘は「こんなに若いうちから、かわいそうに」と同情されたそうだ。しかし娘は、透析のつらさよりも、ようやくまた新婚生活を始められたことの喜びが勝っているようだった。

透析にも慣れてきたので北千住のマンションへ戻ることになった。こちらの改築が出来上がるまで三カ月間、二人で水入らずの生活を楽しんでほしいと願っていた。結婚して初めてのクリスマス、そしてお正月を娘は心を込めて祝っていたようだった。

年が明けて改築も順調に出来上がり、二人は引っ越してきた。

透析に入って四カ月が経過していた。食事は極

北千住へ戻る日　二人の生活がまた始まる

90年12月　両方の両親を招いてクリスマス

度に制限されていた。塩分はもちろんのこと、好物の果物や生野菜類はほとんど口にすることが許されなかった。蛋白質も少量しか取れないので、カロリーは油と糖分で補うことになる。野菜はすべてゆでこぼしてから調理しなければならない。野菜にはカリウムという栄養素が含まれているのだが、健康な腎臓は必要以上のカリウムは排出することができるのに、人工腎臓の力ではカリウムが血液中に蓄積されて心臓が止まってしまうことにもなるという。

当然、体重はますます減ってきていた。結婚後八カ月で八キロも減っていた。

また透析の副作用として体がかさかさしてきた。入浴後はかゆみ止めのローションを全身に擦り込んでいた。皮膚の色も青黒くよどんだようになった。左腕の血管は針のあとが盛り上がり、かさぶたになった傷があちこちについて痛々しかった。そのほか目に見えないところで、倦怠感、頭痛、吐き気などにも娘は耐えていたのだった。

娘の人生はまだまだ長い。これからなのだ。私は、私の腎臓を娘に分けてやりたいと思った。

臓器移植を考える

いつか移植をしたいと思っていた私たちは、娘

の高校の先輩Sさんに体験談を聞くことができた。語学を生かしてテレビの外国語番組にレギュラー出演しているキャリアウーマンのSさんは、多忙な生活の中から一日を空けて私たち母娘を自宅に招待してくださった。

Sさんは父上の腎臓を移植され、その後結婚して男児に恵まれている。「子供を産むということは素晴らしいことよ。ぜひ移植をして赤ちゃんを産むといいわ」と、励まされて私たちは決心した。

そのとき、移植するまでの数々の検査や、腎臓を傷つけないように取り出すために提供者の方に相当な負担がかかるなどなど、思ったより大変なことを知らされたが、私にとっては希望の光のほうが大きかった。

臓器移植とは、向かい合ってみるととても重いものであった。私の胎内から生まれ出た娘に、私の腎臓を一つ分けて、また健康な体にならせたい……という単純明快なことなのだけれど問題は数々あった。

T大医科研の生命倫理審査委員会の委員を務める夫は、医学及び倫理面での賛否両論の意見を踏まえて非常に慎重だった。

まず、日本では脳死臨調で答申されたとはいえ、脳死イコール臓器移植という問題のとらえ方により、臓器移植そのものに対しても厳しい見方をする意見がある。

「人の臓器をもらってまで生きたいとは思わない」という。提供するのが嫌な人は断わればいいし、他人の臓器をもらいたくない人はそれでもよい。それは自由に選択されるべきことだ。でもほかに根本的な治療法がなく（特に心臓や肝臓病）移植を受けなければ生きていかれない人に対して「私は臓器移植に反対だ」と言うのは「あなたは死んでもしかたない」と言うのと同じではなかろうか。

それは、臓器売買、脳死、医療不信などなどの問題があるからなのだが、自分が生きていくことに対して反対する人や、冷たい目を向ける人がいる、ということはつらいものだ。

臓器移植を受けた人の中には「心が凍るような

91年　二人で迎える初めてのお正月

ともに生きる

言葉を投げかけられた」とか「他人に知られたくない」と肩身を狭くして生きている人もいる。

また医学的に見ても難問は様々ある。一番の問題は拒絶反応だ。人間の体には、自分の体内に入ってくる異物を拒絶する働きがある。例えば、風邪のウイルスが入ってくればそれを除こうとする。それと同じように、新しく入ってきた腎臓を異物と見なして、拒絶しようとしてしまう。

たとえ母親からの臓器移植であっても、これは起きる。子供は父親と母親の組織適合性遺伝子を半分ずつもらっている。だから娘の体の父親からの部分が、新しく入ってきた母親の腎臓に対して、拒絶反応を起こすというのだ。

「つまり、娘の体の中の僕の部分が、君の腎臓に対してけんかをふっかけるんだ。悪いのは僕かな」と夫が言うので、私は「もう夫婦げんかはしないようにしよう」と、本気で冗談を言ったりした。

十数冊の臓器移植の賛否両論にかかわる書物を、夫は私や娘夫婦に読ませた。私たちは十分話し合いをして移植することを決めた。一番つらかったのは、移植した腎臓が定着しなくても気を落としたりしないという覚悟をすることだった。心臓や肝臓と違って、腎臓は定着しなかった場合、人工透析によって生命は助かるのだから、と心に言い聞かせた。

次は、私の体が臓器提供者としての条件を満たしているか、ということである。血液型は同じO型なので第一段階はクリアしていたが、詳しい検査のために日赤センターからの紹介で虎ノ門病院に入院した。

建築中の家

入院第一日目は尿中への排泄量を知るために赤い液を注射して採尿するPSP検査を四回した。ほかに心電図、血液凝固テスト、腹部と胸部のレントゲン撮影、アレルギー検査、血液検査と、一日中スケジュールに追われて過ごした。

二日目は胃カメラである。太っているのにのどが細い私は一番苦手な検査だったが、うまく飲み下すことができてほっとした。その際、医師たちが集まってきてカメラをのぞき込んでいたのが不

安だったが、後で聞くとポリープが見つかり採取して検査したところ良性だったとのこと。やれやれである。

そのほかツ反と負荷心電図も受けた。

三日目、いよいよ検査のメインである血管造影をする。足の付け根を少し切って動脈に造影剤を入れて腎臓を見るという。まるで本物の手術のように手術着を着せられ、ストレッチャーに寝かされてレントゲン室に入る。物々しい雰囲気の中、看護婦さんや医師たちに力づけられ緊張したが、痛みもなく終わった。若い医師が「教科書のようにきれいな腎臓でしたよ」と、感動したように言ってくれたのがとてもうれしかった。からからに乾いたのどに看護婦さんが冷たい氷をふくませてくださった。病人をみる優しさが身にしみた。

その夜はほっとしたのと同時に、動脈からの出血を防ぐため固定用テープに締め付けられて、腰の痛いのには参った。

四日目は娘と二人でHLAという白血球の検査、五日目は腎臓と肝臓の超音波による検査などが次から次へという感じで行なわれていった。その夜、医師から今までの検査結果はまず問題なし、と言われて力が抜けてしまった。すごく緊張していたのだ、ということが急に感じられるようだった。

六日目最後の検査は婦人科である。

隣のベッドに長期入院していたおばあさんが、私を色々励ましてくれていたのだが「この前の人はずっと検査に合格していたのに、一番おしまいの婦人科で駄目が出て、ほんとうにかわいそうだった」と言った。

あと一つだけと思うとかえって不安になってしまうもので、その朝は食事がのどを通らなかった。

診察した婦人科医に「見たところでは何もなさそうだが二週間後に検査結果が分かります」と言われてあとはただ祈るのみ。まず今のところ問題はないとのことで退院となった。そして二週間後、臓器を提供できるという許可が下りたのである。

このときほど私は健康に感謝したことはない。出産以外は入院の経験もなく、風邪を引いても三日と寝たことはない。こんなに健康な体を与えてくれた私の母に、改めて礼を言いたいと思う。それだけに、病気にかからせてしまった娘にすまないと思う気持ちもある。だから娘に、この健康を分けてやることができるのはほんとうに有り難いことだ。

これも「不幸中の幸い」であった。

－つづく－

（写真提供・筆者）

ONE POINT ワンポイント情報

●私の愛読コミック●

「こち亀」狂い

東京都足立区
志村ユリ子

「こち亀」を知ったのは十二年前、長男を産んで入院していたときである。

「退屈だろう。これ面白いぞ」と、夫が買ってきてくれたのが、この「こちら葛飾区亀有公園前派出所」なるマンガ本だった。

初めは、やたらに刺激的で、けったいなものに思われたのだが、産後のボーッとした頭にはちょうどよかったらしい、じきに夢中になってしまった。

登場するお巡りさんが、らしからぬ事件を次々に起こす。おかしくておかしくって、くっつきかけたおなかが破けるのではないかと心配になるほど笑い転げた（お産は帝王切開だったのだ）。

育児休業中は、「こち亀」ばかり読みあさっていた。専業主婦となった今はうんざりするほど次から次へと仕事が目につくのだが、そのころ家事は姑任せで外に出ていたものだから、たまに家にいても大して仕事が見つけられなかった。本でも読もうかと思うのだが、ムニャムニャする赤子がそばにいては堅い本？は頭に入らない。かくて、一年間の休みが終わるころには大層な「こち亀」狂いに仕上がっていた。

やがて、もう一人子をもうけ、その息子たちがマンガを読める年齢になった。子は親を見て育つ。息子たちもしっかり「こち亀」大好き人間になっていた。ようよう、私にも世の親の教育的配慮が芽生えてきた。

集英社刊

子供に与えていいのだろうか。内容があまりにも暴力的でありせつな的でありはしないか。

考えた挙げ句、やっぱり処分することにした。だが、折角買い集めたのをポイと捨てるのは何とも惜しく、夫の友人にもらってもらうことにした。集めたら段ボール箱に一杯あった。四、五十冊はあっただろうか。

これで終わりならメデタシ、メデタシなのだが、そうは問屋が卸さなかった。「こち亀」はけっこう人気があって新しいのが続々出る。見つけるとついつい手を出し、息子たちに隠れて読んだ。たまってきて、また息子たちの目にも触れるところとなる。

そうこうするうちに、上げたはずの「こち亀」も返ってきた。名残惜しげに見えたものらしい、見終わって用なしだが捨ててもいいかと打診してきたの

だ。さしも熱かった私の「こち亀」熱も大分冷めてきてはいたが、結局は引き取ってしまったのだ。

以後、今度は息子たちの「こち亀」狂いに悩まされることになる。一時全部隠したが、それもかわいそうかと、読んでもいい曜日を決めたり、一日一時間までとしたり、夜寝るときだけと約束させたり……、色々とやってみるが、なかなかうまくいくものではない。根っからのマンガ好きに育っている。

特に次男がひどい。ほかのマンガにもどんどん手を広げていくし、童話にしてもどこかマンガっぽいナンセンスものを選んで読むことが多い。普段の会話の中にも「両さんなら……」などと、マンガの中の人物をしょっちゅう引き合いに出す。小四にもなるのに虚構の世界と現実の区別がつかないのだろうか。ちょっと心配である。

ま、人生楽しみがたくさんあったほうがいいか……、よそ様より寛大ではある。長男から「マンガ好きはイデンだから」と、嫌味ったらしく言われるまでもなく責任は十分感じている。

夫もとんだお見舞いをくれたものである。

やっぱり「火の鳥」

大阪府茨木市
三好　敬子

私は「鉄腕アトム」のアニメが、テレビで放映され始めたころに小学生だった、という年代である。夕食のはしを持つ手を宙に浮かせ、口を開いて見呆けていて、妹とともに母に叱られたものだ。

妹は、別の時間帯にやっていたディズニーのアニメが一番好きだ、と言っていたけれど、私は断然「鉄腕アトム」！だった。アトムの正義感、優しさは、三十年経った私の胸の奥底に、今もしみついている、とはっきりそう思う。

その後放映された、「ワンダースリー」も「ジャングル大帝」も、大好きだった。最終回には胸の痛みが抑えられず、泣きながら見ていた（と、今記憶がよみがえってくる）。

マンガ少年が復刊された、という話を聞き、早速買ってきたのは中学生だったか高校生だったか。そこで初めて「火の鳥」を読んでブッ飛んでしまった。何てすごいマンガなんだろう、手塚治虫って何てすごい人だんだろうと、半ばぼう然としてしまった。

「黎明編」「未来編」と読み進むうちに、そのスケールの大きさに圧倒された。人の一生なんて宇宙の大きさと比べるとちっぽけなものだ、と初めて感じさせてくれたのは、もしかすると数々読んだ本よりもこの「火の鳥」だったのかもしれない。

大人になって、「鉄腕アトム」や「ブラックジャック」の新書版サイズのものを、次々買いそろえていった。そして、それは一応大切においていたのだけれど、結婚、出産、子育ての日々の中で忘れてしまっていた。息子たちもあれらの本を読むだろう、と思いかけたころに、手塚さんは逝ってしまわれた。知人を亡くしたかのような心にあいた穴。

改めて、ハードカバーの「火の鳥」を買い求めた。独身時代に読んだ「鳳凰編」も、十分に私の歴史観を引っ繰り返してくれたが、「太陽編」はもっとすごかった。

仏教と昔からの日本の土俗の神との関係（？）も、解き明か

角川書店刊

してくれたのだ。時を超え、繰り返される愚かな人間の営みをも超越して貫かれるものは、何なのだろう。「愛」というのは、あまりにもロマンチストだろうか。輪廻を超えて、なお愛が残る、と手塚さんは言いたかったのだろう、と私は思うのだけれど……。

「アドルフに告ぐ」も最近読んだ「ブッダ」も、睡眠時間を削っても惜しくない本だったが、やっぱり「火の鳥」にはかなわない気がする。

中学生と小学生の息子たちも、次々読んでいっているが、何度も読み返してほしい。子供のころに出会えたことが、きっと後で大きな意味を持つと思っている。

読むと力がわいてくる

東京都杉並区
中尾　和子（31歳）

漫画愛好歴二十五年、少女漫画を語らせたら、ちょっとウルサイこの私。日々、漫画を心の友として、落ち込んだときの元気回復剤は何といってもこれに限る。というわけで、今日はみなさまに読むと力がわいてくる作品を二作、ご紹介したいと思います。

まず一作目。レディスコミックからですが、ささやななえの「おかめはちもく」（小学館）。

主人公は、結婚三年目、子供なしの安西靖夫さんとまち子さんご夫婦。描かれているのは、ごく普通の二人のごく普通の日常。でもこれ、奥が深いんです。そうなの、そうなのよねェとうなずきながら、すっかり、まち子さんの世界に入り込んでしまっています。平凡な毎日って、はたから見るとこんなに面白くも滑稽だったのねェ。主婦って幸せ……と、素直に思わせてくれる作品です（残念ながら絶版になってしまったそうです）。

ささやななえという作家は、実に「間」のとり方がうまいのです。彼女はまた民俗学にも造けいが深く、オカルト漫画を描かせても天下一品なのですが、それもこの絶妙の「間」によるのでしょう。夜一人きりでは読めないほど怖いので、これも機会がありましたらぜひ一度読んでみてください。

さて、二作目。これは少し若年層向きなのですが、かわみなみの「シャンペンシャワー」（白泉社）。

Ｊリーグにわいている昨今ですが、これはブームの十年も前にサッカーが好きで好きでたまらない作者が、楽しみながら描いたという作品です。そしてこれがまた笑えるのです。

私など布団の中で読んでいましたら、その笑い声のあまりの不気味さに隣で寝ていた主人が何事かと目を覚ましたほどです。

舞台は南米の小国エスペランサ（地図で探しちゃだめですよ）。弱小のサッカーチームヴ

ィトーリオに密林の少年アドルがスカウトされてきます。女の子のようにかわいらしい顔に、抜群のサッカーセンス。アドルはたちまちヴィトーリオのアイドルになり、密林で鍛えた黄金の脚で、チームの連敗記録にストップをかけます。

主人公アドルよりもさらに魅力的なのが、わき役であるはずのチーム仲間のジョゼやマルロ。彼らがまたそろいもそろってかっこよくて男気があってかわいいのです。

「男のかわいげ」を描かせたら、かわみなみの右に出る漫画家はいないでしょう。一度読んだらきっとあなたも、ジョゼに踏まれる夢を見るはず。

さあ、すぐ本屋さんに走ってください。今日からあなたもサッカー通。元気になれますよ。

以上、二作品でした。

私が漫画を読み始めたのは幼稚園のころ。それ以来ずっと漫画を心の糧として成長してきました。うれしいことに、そのころから知っている作家が、今も精力的に執筆を続けてくれています。息の長い作家が多いということは、漫画が文化として定着してきたあかしのようにも思え、漫画を心から愛する者としてはとてもうれしく感じます。

松本零士、牧美也子、里中満智子、細川千栄子、一条ゆかり、萩尾望都、竹宮恵子、大和和紀、美内すずえ、和田慎二……。

名前を挙げればきりがないほど大勢の、大好きな、大好きだった作家たち。たくさんのよい作家が、よい作品が、この人たちの後に続いてくれたら、私は一生漫画が好きでいられます。きっと、そうなるでしょう。

今は小さい私の娘にも、私が選び、大切に持ち続けている漫画を、いつか読んでもらいたいと思っています。

さあ、明日は愛読誌の発売日（「眠れぬ夜の奇妙な話」――これも面白いですよォ）。

周りの冷たい視線にも負けずに、レジに走ります。

白泉社刊

自費出版は"わいふ"へどうぞ！

"わいふ"編集部では自費出版の製作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、特集、歌集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市販よりは確実にお安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

イラストも用意できますし、文章をお書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょう。

新連載

夫に危機感を持たせよ

兵庫県　赤松　直祐

人妻に「不倫」を勧める私の主張が「れむの会」

何とも過激な見出しに、驚かれる方もいらっしゃるのではないかと思います。あるいは「何と不道徳な」とお怒りの文化人や識者もおられることでしょう。

かくいう私も、こんなタイトルを付ければ非難ゴウゴウの嵐に見舞われるのではないかと恐れおののきながらも、やっぱりどう考えてもこのタイトルしかないと結論づけないではいられませんでした。

当たり障りない、耳障りのよいタイトルは幾らでも付けられます。しかし、情報過多でちょっとやそっとでは驚かなくなった現代人には、内容のない形だけのソフトなタイトルでは底の浅さを見抜かれてしまいますし、逆にうそっぽく聞こえてしまうというジレンマをぬぐい切れず、結局開き直って私の偽らざる本音を開示して、みなさまのご批判を仰ごうと思ったのがこの一文です。

さて、その「れむの会」ですが、正式な会称は交遊倶楽部「れむの会」といいます。しかしこの会称では少し固すぎるというか、なじみにくい感じがしますので、通称を友だちサークル「れむの会」としました。

この「れむの会」の主要メンバーは既婚女性です。世間では〈主婦〉とも〈人妻〉とも呼ばれ、近ごろ最もトレンディで、世の変革の推進力として最も

恐ろしい潜在能力を秘めている、強力な圧力団体様です。そしてこの「人妻」様に、どんどん恋をしていただき、既存の「道徳」を破壊して、まったく新しい「倫理」と「道徳」をつくり出す原動力になってほしいという願いが、この「れむの会」に込められています。

ただし、現在の私の実力では全国シェアを求めるのはあまりにも能力不足ですので、会員の募集範囲を京阪神地区に限定させていただいています。

一応会則では入会資格は十八歳以上の女性と二十歳以上の男性となっており、既婚・独身・未婚を問わないとしていますが、あくまで既婚女性が主役です。

しかもその主役中の主役、ヒロインには三十五歳以上の中高年女性をもってきたいと願っているわけです。

いわば、わが国の社会規範からいえば、最も自由を束縛され、最もつらい忍耐を要求されている四十代、五十代の既婚女性に、ほんのつかのまのひそかな快楽と休息を与えてあげることによって、今の沈滞した世の中を根底から揺るがすすさまじいエネルギーが生まれるのではないか、というのが私の期待する本音なのです。

男の私が言うのもおかしな話ですが、女性がもっともっと強くならなければ長い長い歴史の前例から見ても、男の好戦的性格は改まらないでしょうし、男の独善と身勝手はますます女性を不幸に陥れていくだろうと思えるわけです。

私が「れむの会」をつくった事情

私は昨年十一月最愛の妻を乳ガンで失いました。

ご存じのように、乳ガンは早期発見さえすれば治る病気といわれています。にもかかわらず、手術したときにはすでに手後れで、簡単に死に至らしめた罪は生涯消えることのない大きな悔恨として、今も私の心に刻みつけられています。

しかし、もう済んでしまったことをいまさら悔やんでみてもしかたがありませんので、このことをクドクド述べるつもりはありません。

それよりもっと大切なことは、彼女の病気のもとになった原因が私の彼女に対する「無理解」、いやもっと大きくいえば、私の「女性そのもの」への無知にあったという点に起因するということなのです。そしてそれを私に自覚させることになったそもそもの動機が、彼女の死後五日目に分かった、彼女の「不倫」でした。

彼女は約八年ほど前からある男性と恋愛関係にあり、「不倫」をしていた事

実を彼女の残した手帳から発見してしまったのです。

私の個人感情からいえば「なぜそんな記録を残したのか。それさえなければ私がこんなに苦しむ必要もなかったし、彼女の死を惜しんで子供たちと一緒に涙を流せたのだ。それさえなければ……」という思いがあるのは事実です。

しかし、またこうも言えます。「彼女はワザと手帳を残したのだ。自分の心の軌跡を面と向かって私に言えなかったので、記録に残すことで自分の気持ちを私に伝えたかったのだ」と。

ただ、それは私の理性が言わせる単なる言い訳にすぎず、彼女自身は多分廃棄処分をしたかったのだろうが、不本意にも残してしまった結果だったということは、彼女の性格や死の直前の彼女の言動から容易に推測のつくことでした。

彼女は死の一週間前、まだ意識がしっかりしていた時期に突然退院したいとダダをこね、私をはじめ、付き添っていた子供たちや家族を困惑させました。到底退院できる病状ではなかったので、私は彼女を説得して退院を思いとどまらせましたが、その翌日、私のいない間に彼女の実母と妹にこう言ったのだそうです。

「私が死んだら、私の命より大事な大問題が起きる」と。

もちろんそのときは、私をはじめ家族のだれもがその意味を理解しかねました。

これは単なる私の推測にすぎないかもしれませんし、あるいは私のうぬぼれかもしれませんが、後述する理由で、これらの記録を処分し忘れた後悔が引き起こした言動だと思っています。

彼女の記録から推測しますと、彼女とその男性との恋愛関係は事実上は三年で終わったようですが、その後も折にふれていつでも連絡の取れる状態は維持していたようで、彼女の死後、その男性に事実を確認した際にもその男も認めていました。

妻との二十五年間の夫婦の軌跡

私と妻は昭和四十一年十一月三日文化の日に結婚しました。

私たちは見合い結婚でしたが、結婚後に恋愛したと私は思っています。そして最初の七年間は文字どおり平穏で愛にあふれた月日を送り、三人の男の子をもうけました。

私たち夫婦にギクシャクした波乱の芽が生じ始めたのは、昭和四十九年のわが家の転居のころからでした。私は長男でしたのでそれまでは私の両親と同居し、妻は私の母との折り合いも比較的順調でしたし、まさに絵にかいたような良妻賢母ぶりでした。それが私の家庭のある事情から、両親と別居を余儀なくされ、私の父親に対する不信感が生じて妻の心が乱れ始めたと言えます。

もちろん私にも責任の半分はあります。実はそのころ、私はある事情から転職をしまして仕事に夢中だったことと、その後の深刻な不況から収入が格段に減少したことで、幼い三男を保育所に預けて妻が働きに出なければならなくなり、夫婦の会話が極端に減ってしまったことによります。

そしてその後の十年間は、徐々に彼女との亀裂が大きくなっていき、まさに家庭内離婚の状態にまで追い込まれて、昭和五十九年からの三年間は、私の単身赴任という形で、実質的な別居生活に入ってしまいました。

三年後に私が帰宅したときにはわが家に私の居場所がなく、外に小さなアパートを借りての別居生活はその後も続いていましたが、実は長男の大学進学問題をきっかけに、徐々に雪解けムードが出始めていたのもこのころからでした。

彼女は昭和五十三年ごろから収入減による生活不安と、夫婦のコミュニケーション不足が原因で軽いノイローゼ状態に陥ったことと、それ以後の長期にわたる不眠症で健康を害し、収入不安がなくなった後も、その後遺症が彼女を苦しめてきました。そしてこの当時、昭和六十二、三年ごろは、すでに精神的に耐えられる限度にきていたようです。

その間、私も彼女も何度か離婚を考えたことがあります。あまりにもお互いの性格が違いすぎることと、どんなに努力しようと試みても彼女の健康状態が精神面をコントロールできず、拒否反応ばかり先立つ有り様では、話し合いの余地はないような錯覚にとらわれていました。

しかしそのこと、離婚問題で正面から向き合うのを、私たちの両方が避け

ていたのが、結果的にはよかったのだと思います。

私自身はそんな状態であっても、最終的に本気で彼女と別れたいとは思いませんでした。

彼女の家庭維持の努力とわが子に対する限りない愛情は、ほんとうに頭の下がる思いでいましたし、ずっと彼女の努力に報いられない自分の無力さを恥じてきましたので、何としても彼女を家庭に戻し、健康を取り戻させたいと願ってきました。

この別居期間中、私の身辺に女性の影がまったくなかったわけではありません。それなりに思いを寄せた女性がいないわけではありませんが、残念ながら実行に踏み切れなかったのも、最終的に彼女に対する負い目と執着が強いブレーキになっていたからです。はっきり言って、私は彼女にほれぬいていたとしかいいようがありません。

彼女との夫婦関係を取り戻すきっかけとなったのは、長男の大学合格の知らせでした。私たち夫婦がそうした軋轢に苦しんでいるさなかにも、両親の不和に心を痛めているはずの長男が、それに耐え続けて見事に念願の国立大学に合格したことが、私に妻へのプロポーズを決意させたのでした。

私たちは家庭内離婚状態で別居中でしたから、「家庭内再婚」を彼女に申し出たのは、あと一カ月で私たちの二十二回目の結婚記念日を控えた昭和六十三年十月のことでした。

もちろん彼女から即答は得られませんでしたが、十分な手ごたえを感じてその後二週間の間に色々な応酬があったうえで、最終的に私たちの「再婚」は十一月三日を期して実現する運びとなりました。

すなわち、私がそれ以前から計画した、十一月三日から二日間の「再婚旅行」がそれでした。私が単身赴任先で毎朝毎晩見続けた雄大な富士山の姿を、一度彼女に見せてやりたいと思って、富士山から富士五湖への自動車旅行を計画したわけです。

その河口湖畔の宿で、私たちは三年

ぶり、いやそれ以前からの家庭内離婚状態を考えると、五年ぶりに夫婦の契りを交わしました。そしてその後の五年間は、結婚当初の七年間に次ぐ充実した夫婦生活に戻ることができました。

それゆえ、彼女が最後の息を引き取るまで、私は彼女を信じ、彼女に感謝し、彼女との愛を永遠のものだと思っていました。

ところが彼女の死後わずか五日目にして、私の思いが単なるうぬぼれ、ないしは思い上がりでしかなかったことを決定的に思い知らされました。

そして以後、半年以上の間、仏壇の彼女を心から拝むことができず、子供や親族・友人の前では取り繕ってはいるものの心の中では彼女をのろい続け、最近になってようやく彼女を許せる心境になってきているのが現状です。

そしてこの一年足らずの間に私は彼女の本音を知りたいと思い、「女性研究」に時間とお金をつぎ込んで、無明の闇をさまよい続けている状態が今も続いています。

妻の心と体について無知だった私の罪

私の妻の不倫はちょうど三年間の別居時代に符合しますが、その男性との交際は彼女の記録によりますと、それより二年あまりも前の昭和五十八年末にはすでに始まっていました。当初はもとより不倫などする気は毛頭なかったようですが、私との軋轢に疲れ果てていた彼女が、下心を持つ男の見せかけの優しさに心を傾けていった様子が断片的な記録の端々にうかがえました。初期のころは男の姓を明記していたのが、次第にイニシャルに変わっていくさまは、その親密の度合いが鮮明に浮かび上がり、記録に目を通しながらしばしば私は息苦しさに目を背けざるを得ませんでした。

彼女の記録は、よく企業などが製作して正月前に取引先に配布するダイアリーや、婦人雑誌の付録の日記帳などで、その年によって違っていましたから、彼女の勤務先で年末などに分け合ったものを利用したのだと思われます。

記録はすべて略号やイニシャル、時間や行き先の店名、同僚・友人の名前などが、断片的に記されているだけですから、初めのうちは何の記号か分からないものも多く判読にかなりの時間を要しましたが、解読にさほどの労力を要しなかったのは、暗号の知識など持たないずぶの素人のつくる符丁だったからでしょう。

彼女の恋人はある小さな船会社の常務という肩書きでしたが、本人が自嘲気味に言った言葉によれば、「部下もいない一番下っ端の役員ですから、小使い同然ですよ」という相手でした。私がこの男に会ったときは、すでにその会社は二カ月前に倒産していて、この男が管財人の下で会社整理を手伝っているという時期でしたので、彼女が初めて出会った十年ほど前のその男とは、多分格段の相違があったのでしょうが、私の会ったその男はあまりにも貧相で、こんな男にうつつを抜かしていた彼女

が哀れでなりませんでした。そしてすでに彼女がこの世にいないことを知っていたこともあってか、彼はあっさりと彼女との関係を認めました。

むしろ私のほうがあっけに取られるほど簡単に認めてしまわれて、開いた口がふさがらない状態で、責める気も起こらないほど拍子抜けしてしまいました。

私はこの男に会ったことを、このうえないほど後悔しました。バカを見たのは私だったからです。猛然と腹を立てなければならないはずの私が、ガックリ肩を落として帰るさまは見られたものではありませんでした。

ただこの男との関係で、妻は自分の私的なことは一切明らかにせず、自宅の電話番号も最後まで教えておりませんでした。連絡はすべて会社へ電話させていたことや、私との長年にわたる軋轢についても、ほとんど話していないことなどが分かり、彼女の情報管理の周到さに、かぶとを脱がないわけにはいきませんでした。それほど冷静に恋人との関係を漏らさぬ周到さがある彼女が、なぜ入院前にこれらの記録を処分しておかなかったのかと、その不用意さに疑問が残るところですが、再入院した昨年九月の段階では、彼女がまだ生還を期待していた事実を無視することはできません。まさかわずか二カ月でこの世を去るとは、彼女自身も思い及ばなかったほど入院後の病状の悪化は早かったともいえますが、当然ながら私たち家族には入院当初から分かっていたことでした。

それゆえ死期を自覚した時点で彼女は自分の大失策に気付いて慌てふためいたのだと、この記録の発見で私は知りました。

彼女の職場は女性が大変多い企業で、上司と部下の不倫事件が結構多かったようですが、彼女が親しくしていた元同僚たちは、こうした事件が発覚するたびに彼女が口を極めてその上司を非難しているのを知っていました。事実、彼女は私などから見ると異常なほどに潔癖なところがあり、既婚者同士の不

倫にはかなり嫌悪感を持っていましたので多分自分がそんな関係に陥るとは思ってもいなかったのでしょう。記録の随所に彼女が内心苦悩していた節が見られるのですが、いったん燃え上がった恋の炎は容易に消えるはずもなく、その二律背反に苦しんだ結果がただでさえ不眠症で弱っていた体に影響がないはずはありません。

この恋愛期間中に体調に異常を来して、再三にわたって欠勤したり、病院通いをしていますし、一時期まぶたがカサカサに乾くという奇病に取りつかれた記録もあります。

だから昭和六十三年に私が彼女との再縁を求めた時期は、彼女自身がその苦しみから何とか逃れたいと願っていた状況と、ピッタリ合致するタイミングだったのかもしれません。

後に彼女がポロっと漏らしたのは、私からのプロポーズが「うれしかった」そうで、そのときの私はただ単純に「彼女への愛情の復活」を喜んだものと解釈して、ひそかにうぬぼれていたわけですが、彼女にとっての真の意味の喜びは「不倫」の罪悪感からの脱出だったのかもしれません。

私はその三年間、静岡県での単身赴任中も帰阪後もどうすれば彼女の気持ちに同調させることができるか、どうすれば彼女に喜んでもらえるのかを考え続け、それまでは未知の世界だった「女性心理」や「女性の体」「女性のSEX」についてのあらゆる本を読みあさりました。

そして思い知ったのは、私が妻の「心と体」、特に「女性のSEX」への無知でした。

世の男性のほとんどがそうであるように、私もことSEXに関してはほとんど我流できました。オナニーを覚えたのは小学校の四年生のときですから、終戦直後のその時代にしてはかなりの早熟でしたし、性交のまねごとをしたのもその時期でした。

しかし実際にSEXの初体験はずっと遅く大学へ入学してからで、十歳以上も年上の女性に教えられて以来何の疑問も持たずに二十年間を過ごしてきました。そしてやがて五十に手が届こうかというときになって、それまでの長年の自分の行為が、間違っているとはいえないまでもまったく男の身勝手だったということを知らされてみると、改めて妻への「愛」のあかしは夫婦間のSEXの方法、「男のSEX」から「女のSEX」への転換という意識変革に直面させられることになりました。

女性の体は「全身が性感帯だ」とよくいわれますが、知識では知っていても男には実感がないためややもすれば独り善がりに陥りがちで、結果的に自己満足に終わってしまっていたという

のが、これまでの「男のＳＥＸ」の方法だったようです。

男のオーガズムは瞬発型、女のオーガズムは持続型と知識としては知っていても、女のオーガズムを体感できない男の性は、持続の時間的感覚を把握できないままに自己判断で納得してしまっていました。

男の性欲は意識的・視覚的な刺激に敏感ですが、同時に集中的でもあります。だから何らかのアクシデントで集中力をそがれてしまうと、たちまちにして欲望が冷めてしまう脆弱さを認めないわけにはいきません。

逆に女の性欲は感情的・触覚的で、相手に対する好悪の感情に左右され、好きな相手だとただ一緒にいるだけで性欲を感じ、嫌いな相手だと何もしなくとも嫌悪を催す生理現象を持っているため、例えどんなアクシデントに遭遇しようとも、いったん性欲を感じると、それが充足されるまで持続するわけです。

この男と女の性差を熟知していないかぎり、常に男だけが満足し、女性に不満が蓄積されてしまうことになります。多分、私の妻もそうだったのでしょう。私の長年の独善に耐え続けてきたストレスが、間脳のコントロールを制御不能にし、緊急避難を余儀なくされたのではないかと思わざるを得ません。あるいはこんな私の考え方は単なるうぬぼれかもしれませんし、自己満足にすぎないかもしれません。

しかしたとえ自己満足であっても、そう自覚した以上、自分のＳＥＸ観を変えないことには現状が進展しませんので、「再婚旅行」以来彼女の死に至るまで実行してきた結果、一応の成果をあげることができたと思っています。

ただ、これが可能になった背景には私の肉体的な衰えが瞬発力を失わせ、いやおうなく持続型に変化せざるを得なくなった現実を無視することもできません。ですから、若く、強力な瞬発力を発揮できる青年期の男性には容易になじめないＳＥＸ観でしょうし、どちらかというと体力の限界を知った壮年期のそれであるように思います。女性にとっては必ずしも最良の方法とはいえないかもしれません。

―つづく―

（え・カステラネソコ）

●サーブレシーブ●

笑えない〝中年の純愛〟

埼玉県熊谷市　野中詔子

「平成おったまげーション」はいつも面白く見ていますが、二四四号の連作には特に笑い、そして考えさせられました。小説としては大したことないこの本がこれほど話題になっているのは一体なぜなのでしょうか。

コマーシャリズムに後押しされて、「みなでわたれば怖くない。オジサン、オバサンだって純愛できるぞ」と中年が開き直ったのは確かでしょう。

人は現実のしがらみの中に暮らしていても、心の奥では生の根源のエロティシズムの蘇生をひそかに願っているのです。しかもその愛は日常の中の非日常としてできれば運命のように突然訪れ、大きな感動を与えながらも完結的で決して現実生活には交わらず、美しい思い出となる快楽、つまりいってみれば〝スマートですてきな恋〟がしたいと、モラルと葛藤しながらも、多くのフツーのオジサン、オバサンは思っているのではないでしょうか。それを〝純愛〟と名付けて……。

けれどもどの純愛も完結的な小説とは違い、多かれ少なかれ現実生活に複雑に入り組んで進展するものです。穏やかな波のような純愛も激しく破滅的な純愛も確かに存在しているのですが、まさに漫画の示すとおり、次第に現実に侵されて、結局は不格好な〝現実生活〟そのものになってしまうことでしょう。

そして「そんなところさ」と笑ってみても、分かっていてもそれでもなお、人はあこがれて悲喜劇を繰り返すのかもしれません。様々なしがらみや日常の現実に追われながら生きている少々疲れ気味の現代の中高年の心の中のひそかな思いを集めてみたら、ほんとうは笑うことはできなくなるような気もします。

わが社の超幹部が何かの折に「この小説に感動して一晩で読んでしまった」とまじめに論じたところ、若手職員は「マディソン郡の橋」という題と幹部の人となりからてっきりそれは戦記物に違いないと思っていたというエピソードがありますが、本人がこれを聞いたら……ガハハハと笑っておしまいかな？

なぜ書かないの？

東京都八王子市　豊城智子

わいふへの毎回投稿数は百前後、掲載数は五十だそうである。もちろん、読者に徹したいという方もたくさんおられるだろうが、もっと投稿が増えたほうが、雑誌に活気が生まれるのではないか。読者のみなさんはどう思われますか。

前号で、「毎回同じ人の作が載っているようだが、購読者には一度は掲載の機会を与えて」という趣旨の投稿があった。私はまだ、わいふ歴二年半、わいふの三十年の歴史の中ではまだまだペエペエの新人だが、このところずっと続けて載せていただいているので、このご指摘の「同じ人」に多分、私は含まれているのだろう。もちろん私も、同じ人ばかりが載ることがいいことだとは思っていない。多分、編集部だって新しい投稿者を待ち続けているに違いないのだ。

では、なぜいつも同じ人が載るのか？

当たり前のようだが、それは出し続けているからに違いない。私の場合毎号書く。これは簡単なようでけっこうつらい。人によってペースが違うだろうが、私は十枚、四千字の原稿を書くのに、三時間くらいかかる。二カ月の中でわずか三時間だが、これがけっこう取れないものだ。書いている時間は三時間でも、書きたいことをまとめるためには、かなりの時間を割いている。多少は仕事もし、最低限は主婦も母もしながらだと、この時間がナカナカ取れない。大抵締め切り前夜にバタバタと書く。ネタがなくても熱があっても苦しみながら書く。そうすれば五〇パーセントの確率で載るからだ。

私の周りにはライターの卵やらひなやらがたくさんいるが、その人たちのほとんどがわいふの読者である。ところが彼女たちの文章をわいふ誌上で見ることはめったにない。プロ志望なはずなのになぜ書かないのか？　私には不思議でしょうがないのだ。

彼女たちに聞いてみると、「だって書くことがないんだもん。アナタみたいに劇的な人生送っているわけじゃなし……。それにわいふって何だか、思いっ切り地をはうような不幸でも背負ってないと載りそうにないじゃない」

私の人生は、確かにちょっと変わっているかもしれないが、普段は別にレオタード着て掃除機をかけているわけではなし、ごく普通だと思うんだけどなぁ。それに、わいふの編集後記にはいつも明るくて軽い文章をお待ちしていますって書いてあるのに……。

わいふに書くネタは特別なことでなくていいと、私は思っている。

「いずれは書こうと思っていたのよ」

という能あるタカも、どうぞ爪を隠さないでください。

こんなことを書いたために、作品が殺到し、編集部はうれしい悲鳴を上げ、私の作品はついにボツになって、悲しい悲鳴を上げることになるかもしれないが、それもまぁヨシとしよう。

「当たり前の幸せがほしい」の匿名さんへ

埼玉県草加市　佐藤玲子

一読してため息が出ました。これまで随分ご苦労されたのですね。モーパッサンの「女の一生」を思い出しました。女にとって結婚相手次第でその後の人生が一変してしまうのは、今も昔も変わらない真実なのでしょうか。

不幸な生い立ちの女が幸福を手に入れるには、普通の人の三倍の努力が必要だと自分の体験から思います。どん底からはい上がるだけでエネルギーを使い果たしてしまいます。「サザエさんのようなささやかな幸せ」は、古きよき時代の理想的な生活ですから、人生を受け身ではなく、積極的に闘いとる姿勢がなくては手にすることはできないでしょう。

あなたは「縁あって」と書いておられますが、私には気になりました。今のご主人を結婚相手として選んだのはほかならぬご自分であることにお気付きでしょうか。それとも「望まれて結婚すれば幸せになれる」とお考えだったのでしょうか。私にはもともと色んな意味で釣り合わない相手だったように思えるのですが……。

けれども過ぎてしまったことをあれこれ悩んだところでどうなるものでもありません。浪費癖のある夫を立ち直らせる覚悟があなたにあるかどうか、にかかっていると思います。それができなければ離婚して新しい道に踏み出すしかないでしょう。あなたはまだ若く健康ですから、十分人生のやり直しがきくと思います。

どうかかわいいお子さんたちのために涙を払ってもう一度立ち上がってください。あなたの温かく力強い愛情を必要としています。優秀な頭脳と根性でこの逆境を乗り切っていただきたいと思います。

カウンセラーでもない私が偉そうなことを書くのをお許しください。私は思春期ま

午後の紅茶

考え学びあう母親たちの情報ネットワーク

A5判58頁／580円
年6回隔月20日刊行

10月号内容

特集●「性」について
性は歴史をもっている……山崎カヲル
中国における「性」のとらえ方……大木　康
子どもと語り合う「性」を……岡多枝子

十二月号予定「子ども」ってなんだ
—大人と子どもの関係—
・斉藤次郎・名取弘文・松井洋子・星建男・吉村真理子
・お父さんとお母さんの座談会　他

※本誌の定期購読承り中。年間購読料三、四八〇円を下記編集部まで現金書留か郵便振替で送付下さい。送料無料でお届けします。

（有）オアシスハウス
〒167 杉並区上井草3-17-3
TEL 3396-8589 FAX 3396-8459
振替：東京 3－713664

ただ中で最愛の父と姉を相次いで亡くし、孤独地獄を経験しています。冬の荒れ狂う海に身を投げようとして思いとどまった過去があります。どん底から浮上することの困難さは身にしみているのです。

怒り、悲しみ、嫉妬などの感情は知らずに心身をむしばんでいきますから、お気をつけていただきたいと思います。お子さんに当たったり、お酒におぼれたりなさいませんよう、老婆心からご忠告申し上げます。人間とは弱いものであることを承知のうえで、あえて書かせていただきました。

「ライターへの道」の豊城さんへ

三重県四日市市　高島直子（29歳）

元宝塚でライターなんて、平凡な生活しか知らない私から見れば、あまりにも恵まれすぎた好条件ですよ。おまけに東京に住んでいるとくれば。日本の文化が一点に集中する空間です。

書くことなんて幾らでもあるはずだし、たとえ仕事としてではなくても、将来のために一冊本を出すぐらいの量の原稿を書きためるというのもよいはずです。今は充電期間と思って、勉強したほうがいいと思います。

折角宝塚について〝わいふ〟でも連載されたのですから、もっと詳しく、自分だけの世界を書いてみてはいかがですか。

また豊城さんの体験談はもちろんすばらしいのですが、宝塚ファンとしてはトップスターとの触れ合いやエピソードも聞きたいものです。

ほかにも宝塚独特の化粧についても知りたいし、日常生活のことも通り一遍ではないリアルなシーンについても知りたいと思うのです。

中にいた人間にとっては当たり前のことでも、外から見ればちょっと変なことはたくさんあるはずです。まだまだ宝塚ネタは書けると期待しています。何しろ舞台裏を知りつくした豊城さんなのですから、たったあれだけの連載で終わるはずがありません。どんどんお金にならなくても書いてください。

私は三重県という地方に住んでいます。書くことは、三年前から好きになりました。時々新聞や雑誌に投稿したりする程度で、とても収入に結びつく仕事にまでは至っていません。だけど夢はあります。自分にしか書けない世界を持つということです。

現在四世代同居、七人家族、兼業農家の主婦が私の肩書きです。文章力もまだありませんし、自信を持ってコメントできるものもありませんから毎日が勉強です。テーマは農家の女性と、今年になってユング心理学を学ぶ会をつくりましたので心理学です。どうか豊城さんも頑張ってください。私も頑張ります。

（え・山田京子）

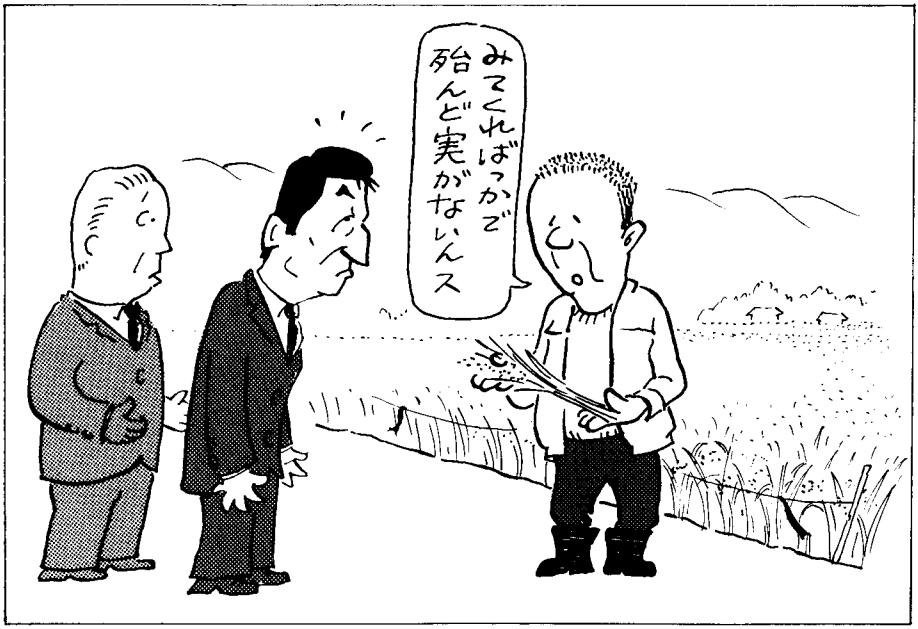
平成おったまげーション

⑪

戦後最悪の米凶作

角川春樹宅捜索

細川首相農家視察



●出席者

参議院議員 堂本暁子　飯田和子　小野田正子
松田雅子　牟礼麻衣子

●編集部　和田好子

●司会　田中喜美子

司会　今回の時事放談は選挙制度改革と政治浄化をテーマに行ないたいと思います。今、選挙制度の改革イコール政治浄化みたいに語られていますが、ほんとうにそうなんだろうか。まず堂本さんに、小選挙区制が政治浄化につながるのかどうかというところから、話していただきたいと思います。

●金権選挙区

堂本　とにかく私たちも気が付いたら与党になっていて、その与党として一生懸命小選挙区制を推進している側なんで、その批判はある意味でとてもやりにくいことではあるわけです。

ただはっきりいって、小選挙区制の最大の問題は、一選挙区に一人ということになると、女性の候補とか多種多様な各界からの立候補ができなくなるんじゃないか、というのが一番の心配。

それから、今度は選挙にお金はかからなくなるのかというと、確かに自民党は今までに比べればかからなくなる。同じ党同士の競争がないから。でも色んな党派としては、やはり中選挙区制と同じようなことになっていくんじゃないか。今まで以上に「ドブ板」選挙になる可能性だってあるという人もいる。

だから小選挙区制イコール政治浄化なのか、それより企業献金をなくすことのほうがいいのか分かりませんけど。ただいえることは、選挙民がお金を候補者から受け取らないということが大切じゃないかしら。

司会　選挙民が悪いってところもありますわね。非常に多くの部分で。

堂本　ええ、確かにそう。私が記者をやってたころにね、千葉二区という大変な汚職の巣窟(そうくつ)があった。十五年前に、お金を封筒に入れてね、一人一人に手渡した立候補者がいた。私ももらったんです。

司会　ほんとッー？

堂本　選挙事務所に行ったら茶封筒をくれたの。

司会　だって堂本さん、そこの選挙民じゃないでしょ。

堂本　選挙民じゃなくても、事務所に来た人全部にくれるの。「私、ここの選挙権ないんですけど」と言ったら、「じゃ、返して

女の時事放談

政治浄化の決め手はどこに

ください」って。また、同じ選挙区の別の候補者の事務所でトイレを借りたら、私、間違って隣のドアを開けてしまったんですけど、床から天井まで全部千円札だった。

一同　ウワァー!!

堂本「いやいや、そこじゃありません」とか言って事務所の人が慌てて飛んできたけど、それだけ千円札をたくさん持ってなきゃいけないってことですよ。私はもう、ほんとうにビックリした。

堂本暁子さん

そこの選挙区はお金のバラまきで有名なところだったんですけど、お金をわたした選挙民を徹夜で見張るの。寝返るといけないから。できるだけ選挙日間際にお金をわたして、ほかの候補者と接触しないようにそれぞれの地区に番人を立てる。

おかしかったのはね、あるおばあさんがB候補者のところへ行って「A候補者から五千円もらったよ」と言うと、「ああ、そうかね」と六千円くれたって。また次の候補者のところへ行って言うと「ああ、そうかね」と一万円くれた。私が、「一体全部で幾らもらったの?」と聞いたら、五万円だって。「じゃ、だれに投票するの?」「いゃ〜、これだけもらったから今度の選挙の日は温泉へ行くよ」って。

一同（大笑）

●政治資金規制法はザル法

堂本　この間ワシントンへ行ったんですが、リンカーンやケネディのお墓には今でも引きも切らず人が訪れる。でも日本の尾崎記念館にゾロゾロ人が来て、政治とはどういうものか再認識して帰っていくなんて

ことがあるだろうか。政治に対する意識が違うのです。

ああ、小手先のことでは私たちはなかなか変わらないなあ、本気になって、女性がその気にならないと変わらないんじゃないかなあと思いながら三〜四日前に帰ってきたところです。

司会　尾崎記念館は閑古鳥だもんね。人っこ一人いない。

堂本　そう。やっぱり民主主義のスタートした国は違うと思った。

日本の戦後の民主主義はアメリカの占領政策の中で〝ぼたもち〟的に導入されたもの。民主主義の土壌がないということが、現在信じられないけたのお金が動く政治を生んでいる。ケネディのように死んで三十余年経っても尊敬を集めるような、体を張って政治をするのではなく、むしろ政治家が汚職の代名詞みたいにいわれる状況を生んでいる。

司会　だけどまあ、民主主義は今始まったんだ、これからやるんだと思えば腹も立たないですよ。民主主義、民主主義とはやしたてられたときに定着しなくて、途中から土建屋政治のほうへ行っちゃったんだから。

和田　日本て、人民自身がつくった政府って、歴史上一ぺんもないわね。いつも上から与えられたもので。

司会　堂本さんはこの後お約束があって、時間がないので先にうかがってしまいたいんだけど、政治資金規制法というのはすでにあったわけよね。それがちっとも作動していないでしょ。あれ、どこかでザル法になって、骨抜きにされていると思うんですけど、それについて話していただけるかしら。

堂本　それはとても簡単。例えば今までは、百万円以上の企業献金は名前の登録が義務づけられていた。ところが最大の抜け道は、一人の政治家が政治団体を幾つ持ってもよかったこと。

企業が三千万円献金しようと思ったならば、三十ある政治団体の一カ所に百万円ずつわたせば三千万が名前を出さずにわたせる。だから、今までの保守党は政治団体の数を減らすことに対してものすごく反対した。で、今度はそれを一つにしよう、と。それは非常に大きな違いです。

飯田和子さん

司会　ふん、ふん。一つの政治団体に百万円以内の献金なら名前の登録しなくていいわけ？

堂本　そう。もう一つは、もらった政治献金を次から次へと政治団体に寄付して回していっちゃうとね、完全に出所が分からなくなる。

司会　それはほんとうに、まったくのザル法ね。堂本さんは、その法律が骨抜きになった過程をご存じですか？

堂本　知らない。
司会　個人の献金には上限がないんですか？
堂本　一個人は一千万円までです。㊟
司会　だったら、企業が個人を使うってことも考えられますよね。悪知恵は幾らでも出てくる。
堂本　でもやっぱり、全然お金なしで選挙はできないんですよ。特に地方区は。郵便を出すにしてもポスターをつくるにしても、自分の政治信条を訴えていくにしても、お金は必ず必要。イギリスでも汚職がさかんだったけど、とにかく腐敗違法行為防止法が施行されて、今は百五十万か二百万のお金で選挙してるそうです。そうすると、女の人でも出られる可能性がある。選挙資金が億となると、女性はほんとうに出られない。
司会　だけどまあ、イギリスと日本じゃ国情が違うし、生きている人間も違う。日本人にふさわしい、クリーンなやり方でないといけない。向こうのやり方で、というのも私はうまくいかないだろうと思うの。そこをどういうふうにやっていくか、難しい問題。

●オラが村の先生

堂本　日本に二世議員が多いという理由の一つは、やっぱり日本は〝持ちつ持たれつ〟の地盤なんですね。昨日話した方がとても面白かったんだけど、お父さんは自民党の議員だった。息子は学校の先生で、なぜか日教組になって、社会党から選挙に出た。そしたらお父さんに入れていた人が、みんな息子に入れた。地縁血縁で、〝オラが村の先生〟ということで入れるわけです。そうすると〝オラが村の先生〟は、〝村〟の人たちの面倒を見てあげなきゃいけない。橋をつくってくれと言われればつくって、学校をつくってくれと言われればつくる。そういう構図が出来上がっちゃっているんですね。

政権交代したからこれからどうなるか分かりませんけど、議員先生の口添えで学校に入れた、病院へ、老人ホームへ入れたということが現実としてあるからいけないんですよ。かつて自民党だった方の話ですが、単に病院を紹介したぐらいじゃ票を入れてもらえないから、秘書がタクシーか車

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることにしました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。
●〝わいふ〟に投稿して、さらに添削希望の方は、「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。
●投稿して、ボツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ボツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき（ワープロ原稿は20字×20行で打つこと）二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名遣い、文法、文脈などの誤りを正したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」（六四〇円）も、基礎を勉強したい方にはおすすめです。ご注文ください。

で病人を迎えに行って、病院へ入れて、そして医師を紹介して「この人をよろしくお願いします」と、そこまでやらないと悪につながらないって。就職の場合もそう、何の場合でもそう。そうすると、そういうことだけのために二十人ぐらいの秘書がいる。その人件費たるや膨大なものですから、今度はそのお金をどこからもらうかということになって、悪循環になってくる。

司会　堂本さん、地元との癒着がある場合に、全部比例区にしたらどうか、という議論も一方でありますわね。それについてはどう思われます？

堂本　比例区はもっと大変。今度、そこにお金が踊りますよ。

司会　名簿の上のほうへいくために？

堂本　ええ。四年前の八九年に自民党は十億円とうわさされていた。

司会　比例区の名簿のいいところへいくために？

堂本　ええ。ほんとうかうそか分からないけど、次のときは三十億だとうわさされていたんですよ。比例区だから協力党員も集めなきゃいけない。だから、どういう制度にしてもね、多かれ少なかれ、その体質を背負っていく。

牟礼麻衣子さん

司会　だけど、贈収賄というのは贈ったほうももらったほうも両方罪になるのに、議員候補者から一万円だか五千円もらった人は、どうして罪にならないんだろう？

堂本　証拠がないから。

政党本位の選挙になれば、個人で出ている人や無所属、女性が出にくくなる。制度をどう変えてみてもお金は流れるんじゃないか。それよりも、こんなスゴイことが起こったんだから、もうちょっとまともにやろうって、日本流にいい知恵が出てきたらすばらしいと思うんですけどね。

●連立与党のジレンマ

和田　罰則のほうはどうなんですか？選挙法に違反したのに、あまり罰則がないみたいな感じですよね。

飯田　私、いつも思うんですけど、違反した議員は二度と出られなくするとか、そのくらいの制度がなんでできないのか。それができれば一番簡単に解決しそうなのに、なんで根本の肝心なことをみなさんがおっしゃらないのかなって、不思議なんです。

牟礼　それをつくると、自分が出られなくなるからじゃないですか。

飯田　やっぱり選挙民の自覚というか、レベルが低いというのか、つくづく嫌になっちゃう。時々腹が立ってきて、〝もう日本人、大嫌い！〟って、日本人ってどうしようもないなあと思ったりしちゃうんですよ。

やっぱり自分たちが悪いんですよ、ほん

とうに。そういう議員を選ぶからいけないのね。悪いことをした議員が出られなくなれば、幾らジタバタしたってどうしようもないでしょ。だけど、涼しい顔をして出てくる。だからいけない。そんな簡単明瞭なことができないんだから。はっきり言ってね。

小野田　でもこれから、だんだん変わってくるんじゃないかしら。一人一人が色んなことを考えるようになって、個々の意見を持つようになれば。

小野田正子さん

牟礼　私は、あんまり期待できないような気がするんですね。昔は学生運動なんかやっていた夫が、選挙のときに「そろそろ日本新党かなんかにやらせりゃいいんじゃないか」って、そういう言い方をするわけですよ。特別低レベルとも思わない普通のサラリーマンの男性が、そういう意識だってことは、期待感は非常に薄いわけです。

だから逆に、社会党が分裂状態になったりして、社会党の存在意義が問われてますでしょ。結局私たちが社会党に求めるのは、平和主義だと思うんですよ。私は何が大事な根本かと考えたときに、世界の平和と国民の福祉が政治の最大課題であるべきだと思う。

堂本　ジレンマなんですよ。いってみれば。よく陰で、役所の人たちも今の政府は「最低二年間は頑張ってください」っておっしゃる。どういうことかというと、その二年の間に金脈が断ち切れる。今まで四十年近い歳月をかけて汚職の構造ができちゃったわけだから。

連立与党の中でもお米の問題とか自衛隊の問題、消費税の問題が出てきたときにすごく意見が食い違うわけです。連立与党を壊したくないという気持ちは社会党だけじゃなくて、日本新党にしてもどこにしても同じだと思います。お米は開放しないほうがいいと思っている人たちも、連立与党を守るために我慢するというか、本音を引っ込めちゃう。

ここんとこ社会党は、お米、自衛隊、消費税の問題で、与党の中でものすごく頑張った。でもその頑張りが国民には見えないまま、あたかもそれに賛成したかのごとく映ってしまう。

牟礼　いや、そんなことはないです。

司会　やっぱり社会党は頑張っていると思いますよ。でも連立与党は壊さないほうがいい。〝ならぬ堪忍、するが堪忍〟で。今のところ社会党は比較的うまくいっているような感じがしますよ。

堂本　やはり私もね、自衛隊機の問題なんて、何かのきっかけで国外へ出ていくのがすごく怖いと思う。戦争ではないけれど、民族の問題や体質が出てきているときに、時代の流れの中でどう受け止めていったら

いいのか。お米の問題だって同じです。環境のことを考えたら絶対開放しないほうがいい。消費税の問題にしたって、これまた難しい問題でしょ。

ちょうど今、ジレンマの時期。ただ一つだけはっきりいえることは、そういう批判勢力のなくなることが一番恐ろしい。

三～四人　それはそうですねえ～。

堂本　宮沢元首相が言ったそうです。私は選挙のときに社会党の悪口を言ったけど、社会党的な勢力が三割ぐらいいなかったら、日本の政治はおかしくなるって。ほんとうにそうなんです。

それともう一つは、橋ができた、道路がきれいになった、それだけでいいのかということですよ。自分が老人になったときに老後の保障ができていなかったらどうするのか、平和の問題で外向的なリーダーシップがとれていなかったらどうするのか、世界の環境が守れなかったらどうするのか。

細かいことは町議会や市議会、県議会までやればよい。やっぱり国会に出てきた人たちには、目先のことじゃなくて大局的な問題を考えてもらいたい。外交とか、国の将来についての本質的な問題を。そのために選挙民は我慢しなきゃいけないですよね。

松田雅子さん

政権が変わってすぐに四十一年来の体質が変わるとは思えないけど、元のもくあみにしてしまうのか、このチャンスを国民みんなが大事にして政治を市民の手に取り戻すのか、今ほんとうに際どいところに立っているような気がします。

司会　うちの夫なんか、「社会党が入ったらまたけんかして分裂だよ。あんなの三カ月と持たないよ」なんて言ってたけど、大丈夫。金持ちけんかせずで、上手にやってらっしゃるし、大丈夫よ。私はうまくいくと思うな。

松田　やっぱりね、社会党が一番我慢の子だというのは、私たちにもすごく見えますよ。

（堂本さん退席）

●変わらない土建屋政治

司会　〝わいふ〟というのは、世の中の動きが投書という形で三～四年早く出てくるんです。方向性をものすごく早くキャッチする。私たちも老人問題を四～五年やってきて、もう今のような在宅ケアじゃとってもやれるもんじゃないって、ヒシヒシと感じているのね。

和田　総理府が子供世代にアンケートをとったんですよ。「片親が死んで一人残された場合や、病気になった場合に親をどうしますか？」って聞いたら、「同居して看る」って答が大部分、七十何パーセントだった。昨日ＮＨＫでやっていたアンケート

だと、やっぱり九〇パーセント近くが看るとは言ってるんです。ところが「同居しますか？」の問いには、三〇パーセントしか同居すると答えなかった。

司会　何、それ。一体どういうつもりなの？

和田　ほんとうに倒れたら看るつもりなんだろうけど、それ以前に引き取らなきゃどうにもならない時期があるってことを忘れてんのよ。

和田副編集長

飯田　実際疲れてきちゃうんです。面倒をみている子供のほうが。せいぜい三カ月が限度だっていいますよ。

司会　今私、二十一世紀に特別養護老人ホームをどうするかという委員会の委員になっているからよく分かるんだけど、特養ホームへ入って元気になった人はどんどん家に帰す構えなの、政府は。十七人の委員のうち女は私一人で、あとは厚生省のお役人だとか、特養の経営者とか、大学教授ばっかり。

　その委員会でやることといったら、いかにうまく年寄りを家に帰すかという算段なの。高齢化社会で支え手が少なくなるから、どんどんお金をかけないようにしている。それだけなの。土建屋政治を変えないで、老人がどんどん増えるから大変だ、経費削減だと言って。

和田　役人はやっぱり、その枠の中でしか考えないんですよね。日本人って、自分の利害と政治と、結びつけて考えないのね。

司会　そうじゃないのよ。考えてるんだけど、目先の利害だけなの。

松田　私が政治に興味を持ったのは、大乗仏教の本を読んだせいなんです。結局社会がよくならないといけない、行き着くところは社会問題になるんじゃないかな、と。

司会　そうですか。それはよかったですね。仏教も役に立つ。

松田　特にこのところ、政治が面白いですよね。変化があって。

司会　面白いと言ってくださるのは、いいな。

小野田　これまでだったら芸能人のネタしかやってなかった昼間のワイドショーに、政治がドーンと入ってきたり、これは最近の傾向ですよね。

牟礼　テレビ朝日のニュースで、各党の言い分というのを表にしてしっかり書いてくれたんで、とっても勉強になりました。

司会　テレビの影響というのはスゴイわね。大体みなさん、テレビで勉強してらっしゃるわね。

　だけど私、意識改革も大事だけど、罰則をキチッとするってのは大事だと思うのよ。

和田　イギリスは罰則がすごいんだって。

司会　昔日本でも「間引き」って平気だっ

たけど、ものすごい罰則をつくったら、みんな怖くてやらなくなった。以前は平気でしていたことがそのうち大変な罪悪みたいになったんだから。まず一つには、しっかりした罰則をつくる必要があるわね。

●商業主義が人間を毒する

松田　一般の人の意識が高まらないと。今はまだ政治を面白がっている段階ですよね。それが選挙の投票率につながっていないでしょう。

牟礼　意識のところで、やっぱり教育というのは大きな柱だと思うんですよね。私が社会的な意識を持つようになったのは、中学のときの担任の先生が、毎朝その日の新聞の話をしてくれたんです。それから自分でも新聞を読むようになって。

　昔の先生って、ナントカ師範学校を出た先生とか、予科練くずれとか、戦争未亡人とか、いろ～んな人がいたんですよ。だから幅広い体験が子供たちに伝わっていたと思う。今の、トコロテンで金太郎アメみたいな先生ばっかりだったら教育は無理だと思う。その辺の教育制度のところから……。

田中編集長

小野田　というより、受験を何とかしてください。それしかないですよ。

和田　今小学校、中学校、高校もそうだけれど、政治に触れちゃいけないって雰囲気でしょ。だから教育どころじゃない。大体歴史をきちんと教えてないんだもの。政治の勉強には歴史の勉強が必要ですよ。それをやらないからだめなの。

　昔受験地獄が始まったころに、早稲田を一番で出た女性が、「これまで自分はできるだけ必要な本しか読まないように努めてきた。そうしないと、いい成績はとれません」って言ったんで、私ビックリしてしまったのね。大学へ行って本を読まないだなんて、どういうつもりだって思った。

　この前の戦争の経験で思うんだけど、大多数の人間が一方に傾いたら、国全体が全部傾いちゃう。怖いですよ。その人たちがみんなばかになっちゃったとしたら、始末に負えないですよ、これは。だから、今の時代はどうなのかっていったら、私はもう薄気味悪いです。

（まとめ・宮前　和）

㊟　政治団体への寄付について

個人から一団体に対して一五〇万円まで可。一〇〇万円までは匿名でもよい。一〇一万円から名前を載せる。総額上限は、一人の人が政治団体に対しては一〇〇〇万円まで。

（次回の座談会のお知らせは、一四一ページをごらんください）

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子　十二月号

五〇〇円・〒五一円

今月の視点

（見本誌（旧号）進呈）

「おとな」になるって？

母と子　十月臨時増刊　一〇三〇円・〒五六円

学習のつまずきを乗り越える

＜小学校篇＞

一年生から六年生までの各学年で、子どもたちがつまずきやすい学習のポイントをとりあげて、それをどう乗り越え、学ぶ楽しさをつかませるかに焦点を当てました。

＜内容例＞

●漢字の面白さをつかませる●位どりの意味をどう分からせるか●表現することの弱い子に―一年―●話す、書くことを好きにさせるには●漢字のヴィジョンをふくらませる●九九狂想曲―二年―●「小数って何？」と意味がつかめない●包含除の割り算の理解●実験、調査の不得意な子に―三年―●分数がどうしても分からない●単位、換算の意味がつかめない●地図と地域が一致して認識できない―四年―●体積の概念が理解できない●物が水にとける（溶解）とは●興味をもって産業学習にとりくめない―五年―●文章からイメージを豊かにえがきだせない●作文を嫌う子●比例、反比例が分からない―六年―

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203　東久留米市中央町五―四―八

☎〇四二四―七四―九一二五

母と子社

昭和三十八年から数えて、通算三十年。

女たちの生活は、大きな変化を遂げました。〝わいふ〟に投稿された文章を時代を追って編集したこの作品は、その移り変わりを描く現代の「絵巻物」といえるでしょう。女たちの生活は何と変わったことか。そして何と変わらないことか。

何よりも変わったのは、仕事の場の広がりと、性の解放です。変わらないのは、では何か？

ぜひ、この一冊を読んでみてください。

四六判約三三五ページ・一五〇〇円（送料別　消費税込み）

ご注文は電話で直接「グループわいふ」へどうぞ。

☎〇三―三二六〇―四七七一

連載16

私の愛する外国人

アメリカ・サンゲーブル市

布施木ユミ子

私たち親子がロサンジェルスに引っ越して一年近くになる。現在、住んでいるのはロサンジェルス北東部のサンゲーブルという市。日本人の姿もたまに見かけるが、駐在員の集まる海岸寄りのトーレンスなどに比べると少ない。むしろ中国系の人々が多いようだ。

日本を出る少し前、かつてサンゲーブルの隣のサンマリノ市に数年住んでいたという人に会った。「サンゲーブル？　あそこは中国人が増えたわよ。メインストリートに中国人の店がずらっと並んでいるのよ」と聞いた。確かに、バリーというにぎやかな通りには「元祖牛肉麺」とか「汽車（自動車のこと）修理」などと書かれた漢字の看板が至る所にある。

この近くにモントレーパークという市があり、そこには台湾からの移民をはじめ、中国人が次々に定着していったとのことだ。モントレーパークにはリトルタイペイと呼ばれる地域があり、そこで生活するかぎり、中国語が話せれば英語はほとんど必要ないと聞いた。最近、モントレーパークに中国人が収まりきらなくなり、北のほうのハッシェンダハイツなど、新しく開発した町に流れているそうだ。白人以外の人種が過半数を占めるロサンジェルス。そのダウンタウンの近くにはコリアンタウンもあるし、ヒスパニック系の多く集まる町もある。たまたま、今住んでいるところでは中国人に会うことが多い。

私の夫、聖民は台湾出身の中国人である。日本に留学中に私と知り合って結婚。去年の秋六年間滞在した日本を離れ、私と当時十一カ月だった娘を連れてアメリカに来た。私たちは現在彼の両親、妹と同居し

サンゲーブルスクエアの全景。やしの木がカリフォルニアらしい

ているのだが、彼らは約八年アメリカに住んでいる。聖民の父はキリスト教の牧師で、アメリカに住む中国人に伝道するために渡米したのだが、それ以前に日本に住んでいたこともあった。

家族は父をはじめ、それぞれ日本で生活したことがあり、日本人の友人も多い。「あなたはいいわよね。だんなさんの家族が日本語が話せるし、日本のこともよく分かっていて」と私の友人たちは言う。

自分の母国語である日本語でコミュニケーションできるということは私にとって大きな助けである（そのお陰で、中国語は一向に上達しないのだが）。そのために、結婚以来私はさしたるカルチャーショック（?）も感じずにやってこられたのかもしれない。しかし、それでも日本人（もしくは私）の常識とは異なる常識にぶつかってびっくりしたこと、またはそれが原因で夫とケンカになったことも多々ある。

私はアメリカに来る前に約七年間、東京の幾つかの日本語学校で外国人に日本語を教えていた。様々な国から来た人たちと接して、国や人種によって習慣やものの見

方、考え方が異なることは分かっているつもりでいた。が、教師と学生、あるいは友人として付き合うのと、家族として同じ屋根の下で暮らすのは違う。それはたとえ同じ国の者同士が結婚しても感じることだと思う。

さて、今私にはこの地でアメリカ人の知り合いはほとんどいない。日本人の友達は少しずつ増えてきた。が、何といっても中国人にたくさん出会った。それは夫の家族を通してであったり、ここに来てしばらく通った英語の学校のクラスメートであったりである。

アメリカにいながら、中国（台湾）文化中国人社会に接しているというと、最近親しくなったアメリカ人の女性は「面白いわね。あなたの回りに中国人社会があってその外側にアメリカがあるというわけなの」と、紙の中心にまず私を置き、その回りに二重の円を描いた。果たして　その図のとおりになっているのか、自分でもよく分からないが、私が出会った人、経験を通して感じたことを書いていきたい。

チャイニーズマーケット

食料品の買い物はたいてい、家の近くの「香港超級市場」という中国人経営のスーパーマーケットでしている。日本のスーパーもあるのだが、リトル東京の店まで行かないと品物も少ないし値段も高めなので、油揚げやごぼうなど、どうしてもほしい物があるときにしか行かない。日本人の友人たちでもチャイニーズマーケットを利用している人が多い。野菜や肉、魚類が新鮮で種類も多く、しかも安い。パンやシリアル、牛乳、ヨーグルトなど、アメリカのスーパーのほうが豊富で安いのだが……。

「香港超級市場」（以下、香港マーケット）の店員は香港や広東出身の人が多いのか、お互いに広東語で話している。広東語は早口で語調がきついので、まるでけんかしているように聞こえ、ドキリとするが、話している人たちは普通の表情をしている。彼らがお客に声をかけるときは共通語である北京語を使っている。ここで買い物するときはたいてい中国人に間違えられる。子供を連れていないときなど、「小姐（シャオジェ）」（おねえさん）と呼ばれ、気をよくしている私である。

さて、「香港マーケット」が比較的小さい隣近所のスーパーだとすると、「大華（ターファー）」は食料品専門の小さめのデパートといってもいいくらいの規模である。「大華」は別名を「99 Ranch Market」ともいい、あちこちにあるようだが、その一つはサンゲーブル市の一〇号フリーウエー（全米でも最も交通量が激しいといわれているフリーウエー）のそばにある。

アメリカに来て間もないころ、フリーウエーから下りてくると、横手にピンク色のお城のような建物がそびえているのが見え、一体これは何だろうと思った。この建物が「大華スクエア」とか、「サンゲーブルスクエア」などと呼ばれているショッピングプラザである。「サンゲーブルの中国人がモントレーパークを乗り越えようとしている象徴」ともいわれているが、それはともかく、ここには中国人が多い。日本人や韓国人などもいるのだろうが、いわゆる欧米人やその他の外国人にはほとんど会わない。プラザの前や地下には広い駐車場があ

るのだが、週末は駐車の場所を探すのが大変なほどこんでいる。

プラザは薄いピンクとクリーム色を基調にして建てられていて、まだ新しくてきれいだ。飲食店がたくさんある。ほとんどが中華料理だが、四川料理、上海料理、台湾料理、飲茶（ヤムチャ）レストラン、チャーシューを売る店（いつもこんでいる）とバラエティに富んでいる。そのほか高級ブティックや本屋、ケーキ屋、漢方薬局、お茶の専門店、美容院などがあるが、これらはすべて中国人の店である。ここに来るとロサンジェルスの中国人社会の層の厚さを感じさせられる。

看板は漢字と英語で書かれている

この「サンゲーブルスクエア」の一角に「大華」マーケットがある。野菜や果物の種類の多さもさることながら、肉の種類の豊富さにびっくりさせられる。聖民が「中国人は豚一匹をほとんど頭からしっぽまで食べるんだよ」と言ったことがあるが、その言葉のとおり、大きなガラスのケースには猪脚（豚足）、猪耳朵（耳）、猪鼻（鼻）、内臓などがきれいに並べられている。牛も同じく、色々な部位があるし、細い鶏脚（鶏の足）も売られている。「台湾の女の子は鶏の足を焼いた物をおやつに食べるんだよ」と聞いたときには信じられなかったが、今では分かるような気がする。動物を丸一頭（一羽）無駄にすることなく食べるのは生活の知恵というか、合理的な気がする。何かの本で「味覚の幅は人間の幅を表わす」という言葉を読んだことがあるが、「机以外の四つ足はすべて食べる」といわれる中国人は人間のスケールが大きいのかもしれない。

食事が出会いの始まり？

夫と付き合い始めたころ、彼は時々私を中国人の集まる安い小さな店につれて行っては、豚の腸詰め（ソーセージ）や耳、心臓を煮込んだ物など、私が食べたことのない物を注文した。日本人の友人に話すと、「わあ、気持ち悪い」と言われたが、豚の耳がコリコリしていたことを覚えているくらいで、それほど気味は悪くなかった。聖民にしてみれば長年食べてきておいしいと感じる物を私にも味わってほしかったのだろう。私はといえば今度は何を食べるのだろうと興味津々で（もちろん、いつも珍しい物を食べていたわけではないが）ついて行ったものだ。

私に食べられない物もたくさんある。その一つが台湾の梅干し。日本の物より固めで、表面に塩のような白い粉がふき出ている。味はしょっぱいような、甘いような……やや、甘さのかった何とも言えない味が

する。台湾の人たち（特に女性）はこれをあめの代わりのようによく食べているらしく、日本語のクラスの休み時間に、学生たちがティッシュペーパーにのせて渡してくれた。食べなければ悪いと思って何度か挑戦してみたがやはりだめ、独特の風味になじめない。

チャイニーズマーケットの乾物類の棚の前を通ると、様々なにおいがする。そのにおいや、食べ物の見かけで「これは食べられないかもしれない」と思ってしまうのだから、私など「人間の幅が狭い」ことになるのかもしれない。

中国人同士が顔を合わせたとき、「吃飯了嗎（チーファンラマ）？」（もうご飯食べた？）と、あいさつ代わりに言葉を交わすことがある。「まだだったら一緒に食べに行こう」という意味を含んでいて、この言葉からも彼らが「食」を大切にしているのがよく分かる。特に客に対しては食べきれないほどの量でもてなすのが礼儀だと考える。

私たちが結婚して数カ月後に、聖民は用事で一時台湾へ帰らなければならなくなった。そのとき、私も少し後れて台湾へ行ったのだが、三年ぶりに自分の国へ帰った夫は友人たちに会うのに忙しかった（国に帰ったとき、遠慮したり、面倒くさがって昔の友人たちに連絡しないと「冷たい」との非難を浴びるのだそうだ）。短い滞在日程は聖民の学校時代の友人たち、また彼の両親の知人たちと会う約束で埋まった。ほとんど毎晩（昼もあった）のように中華料理をごちそうになり、おいしくて感激したのだが、たくさん食べられたのは最初の一、二日だった。

香港マーケットの正面。店はそれほど大きくない

三日目くらいから、いつも胃が重く、食事時になっても空腹にならない。聖民が言うには「（料理に使っている）油が重いのじゃないか」とのこと。中国人の彼でさえ、久しぶりに食べた「本場」の中華料理に胃腸の具合が悪くなったそうだ。

ただし、彼の場合は三日目くらいから逆に慣れて、平気になったそうだが……。私はといえば、普段食べているのは野菜の煮物や酢の物が中心であり、炒め物や揚げ物は一品くらい、しかも量は少ない。もともと胃腸が丈夫でないところに、食べ慣れない油や香辛料をふんだんに使った料理を続けて食べ、体がびっくりしたらしい。

食事の席で「請用（チンヨン）、請用」（もっと食べなさい）と勧められ、隣の席の聖民に「私、もう食べられない」とささやいても、「折角、好意でもてなしてくれているのに、食べなきゃ悪いよ」との返事。彼はおいしそうに皿の上の料理を片付ける一方で、「ユミ子、これはおいしいんだよ」とか「これ、食べ

てないだろ」と私の皿の上にもせっせとのせてくれる。おいしそうな物を見ると断われない私は、有り難さと恨めしさの混じった気持ちで笑顔をつくり、口に入れたものをできるだけ時間をかけて飲み込むように努める。毎食後、胃腸薬を飲み、夜は胃が痛くてうなされ、と今では笑い話になったが、あの台湾旅行の間は食事の時間が来るのが苦痛だった。

「大華」(Ranch Market) 買い物に来た人たちがおしゃべりしている

聖民の母は料理上手

さて、聖民の母は料理が上手である。「長年、日本人を相手に料理をつくってきて、私の台湾料理は日本人好みの味になっちゃった。これはちょっと台湾料理とは言えないね」と言いながらも、適当に調味料を加え、なべを火の上で揺すっては、手早く一品をつくり上げてしまう。なかなか、まねのできることではない。

ところで、彼女は私を初めて見たとき、「何てやせているのだろう」と思ったそうである。そして結婚前から「ユミ子に栄養をつけて太らせなければ」との決意をよく口にしていた。そのころ、母たちはすでにアメリカに住んでいたのだが、用事で日本に来ることがあると、あれこれ台湾料理をつくってくれた。それは結婚してからも続いて、一度、夫とアメリカに遊びに来たときには両親の家に滞在したのだが、毎日のように「この魚はおいしいから食べてごらん」とか、「これは中国野菜だけど食べられるかしらん」とか、「最後の一口はユミ子が食べなさい」と気を遣ってくれた。

ところが、このときも私たち夫婦が初めてアメリカ(ロサンジェルス近辺)に住む親戚や両親の知人、友人に会うというわけで、外でごちそうになることが多かった。どうも私の胃は貧乏性らしく、体を動かさないで(アメリカは車でどこへでも移動する)ごちそうを食べていると働きが悪くなるのである。このときも胃はストライキを起こし、ウーロン茶を一口飲んだだけでキリキリ痛み、おまけに熱を出して寝込むという情けない結果になった(しかも、両親の知人宅でである)。

こんな経験を繰り返しているうちに、食生活に関しては自分のペースを守るのが一番、というわけで勧められてついつい食べるということを避けるようになった。中華料理はテーブルの上に大皿を並べて取り分けて食べるのだが、ほんの少しずつしか取らないとか、お茶を楽しみながらゆっくり食べるとか、食べるよりも会話することに努めるとか……。これでなかなか苦心しているのである。

子供がいると、食べさせるのに手間がかかるから自分がそんなに食べなくても食べたような気になって大変よい。「まったく、聖民と佳琳（娘の名前）ばかり太って、ユミ子は結婚してからやせたじゃない」と母は嘆く。「大丈夫、私って日本車と同じで少しの燃料でたくさん走るんです」と答えてみたり、「中華料理はとても栄養があるからこれだけで十分、ほんとうにおいしかった」と言ってみたりである。

料理法は保守的

さて、中国人は積極的にありとあらゆる物を料理して食べるが、料理法に関しては意外に保守的である。クラスメートが何人かわが家へ来たときのこと、わんたんのつくり方で議論になった。北京出身のウーと上海出身のジェイがお互いに自分のところのつくり方が正しいと主張して譲らない。「そんなこと、どっちだっていいじゃない」と言いたくなるが、彼らとしてはそうではないのだろう。

また、北京から来たジュリアのだんなさんが包丁でつぶしたきゅうりを甘酢に漬けた「辣椒黄瓜（ラーチィアォホワンクア）」という料理をつくってくれたのだが、「味の素」が必要だという。家にはないから塩を使ってもらったのだが、味見をした彼は首を振って「味の素」がないと本来の味が出せないのだと言った。私にはとてもおいしく感じられたのだけど……。

また、中華料理以外の外国料理は食べられないとか、食べたことのない人も多い。西海岸を旅行したとき、小さな町にも中華料理のレストランがあるのにびっくりしたが、ロサンジェルスでは中華料理のレストランはもとより、中華お総菜や麺類のテイクアウトの店を探すのにも不自由しない。アメリカにいて中華料理だけ食べて生活することは可能なのである。

二十代、三十代の友人たちでもカレーやスパゲティ（義太利麺（イタリー））を知らなかったり、ヨーグルトを「信じられないくらいまずい味」と言う人もいる。グルメの情報があふれ、各国の料理を取り込んでは自分たちの舌に合うように変えてしまう日本人から見るとびっくりすることもあるのだが、中国人は自分たちの料理、味覚に頑固なほど誇りを持っていると感じることも多い。それでも変化は少しずつ訪れているようで、先日友人たちが来たときに恐る恐る出してみたカレーとチーズケーキは好評だった。また、ティーンエイジの子供たちを持つ母親は「うちの子たちは家でつくる料理よりハンバーガーやフライドチキンを食べたがる」とブツブツ言っていた（日本でもよく聞く話だが）。

ここで育った子供たちは親や祖父母の世代よりアメリカの味覚に影響を受け、より柔軟な舌を持つのかもしれない。中華料理の味も世代の移り変わりにつれて変わっていくかもしれない。

（ここに名前を出したジェイとジュリアは英語名である。ほとんどの中国人は彼らの名前が発音しにくく、アメリカ人には覚えにくいことから、アメリカに来たときに英語の通称名をつける。通称といっても、公的に使えるようだ。夫の聖民もジョセフという名を持ち、日本人以外の友人は彼を「ジョセフ」と呼んでいる）

―つづく―

（写真提供・筆者）

ある電話事件

神奈川県中郡　石井しのぶ（34歳）

夜の九時ちょっと過ぎ、高校教師をしている夫に電話がかかってきた。二、三言話して「ちょっと二階に電話を回すから」と言って自分の部屋に電話を切り替えてしまった。私はすぐ、あの女生徒からだろうと察しがついた。これまでも月に何度か家に電話をしてきたことがある。つい、二、三日前も八時から十時ごろまでずっと二階で話し込んでいた。今までにも女生徒から電話がかかってきたことは何度もあったけれど、わざわざ二階に回したのは初めてである。

わが家では玄関の横に電話があって一階でかけていると会話がすべて私に筒抜けである。進路や生き方に悩む生徒に付き合って十二時を過ぎてしまうこともあったが、電話が終わるといつも「今日は電話が長くなって悪かったね」と私に謝っていた。

一体どのくらい話していたのだろう。十一時になってようやく階段を下りる音がしてきた。私は先に寝てしまっていてもよかったが、夫が私にどんな態度をみせるか少し興味があったので起きていた。

ところが下に下りてきても顔も合わさず黙って歯を磨きだし、何も自分から言おうとしなかった。「電話を二階に回して変だと思った?」くらいは言うのかと思っていたのに……。

このまま黙って寝るつもりなのかと思うと少々むっとしたので「だれから電話だったの」と聞いてみた。「○○からだよ」「こんなに遅く何の用なの」「今付き合っている男の相談だって」「どんな付き合いなの?」「うん、まあ……」と言葉を濁してしまった。

付き合っている人の相談なんて妙につくり話くさい。でもあまり追求しないでおこうと思った。

翌々日また電話がかかってきた。今度は夫が二階で受けてそのまま二階で話をして

いた。

今日は私に何て言うだろうかとまたまた興味津々で待っていたら十一時ぴったり夫は下りてきた。私のいる部屋をそうっと二センチほど開けて「遅いから先に寝るから」と小声で言ってすぐにふすまを閉めてしまった。

えっ何なの。まるで私から逃げているみたいじゃないの、と夫の意外な態度に私も驚いてしまった。電話がかかってきたことはどうでもいいけれど、こそこそした態度は何となく許せない気がした。

「態度が少しおかしくない？」ときつく言ったら「ただ眠いから寝ようと思っただけだよ、悪かったよ」とふて腐れた口調で謝ってきた。

電話くらいのことで文句を言うのはやめようと思っていたけれど、不審な態度ばかりするのでこの際はっきり聞いておこうと思った。「どんな悩みの相談なの」と聞くと「まあ、悩みというか……雑談が多いかな」と口の中でもぞもぞ言った。何だやっぱり相談でなくてただの雑談だったのか。

夜中に女性と楽しそうに雑談していることを私に知れると、とがめられると思ってこそこそしていただけなのである。だれから電話がきても堂々と「いやー参っちゃうね」と笑って言えるような性格だったらこっちも「付き合ってあげなよ」なんて軽く言えそうな気がするのに……。変に生まじめに考えて隠そうとするから、聞かれたらまずい話なのかなと余計なことをこっちも考えて嫌な気持ちになるのである。それを言ったら「後ろめたさがあると自然に振る舞えなくなってしまう」などと言っていた。

若い女の子と話すのが楽しくてしかたがないのを私に見抜かれたくなかったのかもしれない。三十七歳にもなってなんて子供っぽいのだろう。これで数学教師としては生徒たちに信頼されているのだから不思議である。

不思議といえば、スマートでも特別優しいというわけでもない子ぐまのようなタイプの夫が、なぜ女生徒たちから友達のように思われ、好かれるのかよく分からない。でもこのことで少しけんかになったのでこの女生徒には「二度と電話をするな」と言ったらしい。

この事件以来、私といるより学校で十代の女の子に囲まれているほうが楽しいに決まっているよね、などと考えてしまい、少し寂しい気分から抜け出せないでいる。

ドラマづくりを巡って

川崎市宮前区　本田直子

学生時代演劇に熱中していた彼は、ドラマの演出がやりたくてテレビ局に就職した。

一般にテレビ業界には華やかなイメージ

がある。地味で謙虚でまじめ一筋の彼がその道を選ぶとは、正直いって意外だった。私に限らず、彼を知る人の多くはそう思ったに違いない。

入社後彼は希望どおり制作部に配属され、二年目にはディレクターとして番組を任されるようになった。念願だったドラマの演出もやらせてもらえることになった。ここまでトントン拍子だ。「周りはほとんどが年上だから気を遣うよ」と言いながらも、ありすぎるほどのやりがいを感じていただろう。

私は番組のタイトルバックに彼の名前を見つけては、喜んでいた。

ドラマの撮影には手間と時間がかかる。何でも、ロケだと丸一日かけても放映時間にして数分ぶんしか撮れないこともあるそうだ。撮影はいつも深夜までかかった。寒い季節にはつらかっただろうが、彼から愚痴を聞いたことはない。

私と彼が結婚したときには仕事関係の人も多く集まってくださり、若手の役者さんたちはパーティーを盛り上げてくれた。

決して器用とは言えないが、何事にも誠実に取り組む彼は、多くの人の信頼を得ていたようだった。

が、先輩から注文をつけられることもあった。

いわく「君のつくる番組に欠けているのは、大いなるバカらしさだ」

これには困っただろう。彼はどう頑張っても「バカ」にはなれない。私は彼のそういうところが好きだが、テレビディレクターとしては確かに一つの欠点かもしれない。

また、周囲の意見に耳を傾け、ああでもないこうでもないと検討を繰り返す慎重さも、時と場合によってはただの優柔不断だ。「もっと強引さがあってもいいのに」という声もあったらしい。

ディレクターには向かないと見切りをつけられたのかどうか、それは分からないが、彼は人事異動により、六年間いた制作部を離れることになった。

辞令の日付までに、ドラマの撮影が一本残っている。彼はその台本をどんな思いで手に取っていたのだろう。

だが、彼がどう思っているかなどお構いなしに時は過ぎていく。いつもと同じように打ち合わせがあり、ロケの日程が決まり、スタジオにはセットが組まれた。

彼のことだから、普段と変わりなく最後のさい配を振るったのだろう。

撮影はすべて予定どおりに終了した。

そのドラマのBGMに、彼はバーバーの「弦楽のためのアダージョ」を使った。まねをしたわけではないが、映画「プラトーン」でも流れていた、静かな叙情と熱い情感を併せ持つ佳曲だ。切々と訴えるような旋律に、彼の思いが込められていたのだろうか。

彼は今、編成部というところで仕事をしている。現場とは密接なつながりがあるが番組づくりに直接かかわることはない。

時折、ほかのテレビ局に勤務する友人から葉書きが届く。大学時代、共に演劇にのめり込んだ仲間だ。ドラマ制作に携わるその友人は、今担当している番組名や、自分が演出したドラマが賞を受けたことなど、折にふれ知らせてくれる。

それらの葉書きを彼は無言でながめる。

再びドラマづくりの現場に戻りたいと思っているだろうか。

私には何も言わない。

妙さんのこと

横浜市泉区　黒崎和子

妙さんという人は曲がったことが大嫌いで、真正直にその生涯を送った。妙さんとは、夫の母である。私は結婚当初から夫の一家と同居し、十二年後妙さんが亡くなるまで一緒に暮らした。今、自分が妙さんの亡くなったときの年齢に近づき、三十年も昔この人と過ごした日々を思い出すことがある。

妙さんは明治四十三年の生まれ、家は家事使用人が数人いるような何不自由ない暮らしだった。父親は教育のある人で、当時財閥か華族かのお抱え教師であった。妙さんはいわゆるおんば日傘で育ったに違いないのだが、この人には幼時の幸福感がない。妙さんは実母と同腹の妹を早くに失ったのである。

勝ち気な継母が来て、腹違いの弟妹三人と一緒に育ったころは、「真綿で首を絞められるような」取り扱いを受けたのだという。私はこの継母という人に何度か会っている。そのころは妙さんが先に立って私を彼女の住まいへ連れていった。穏やかな老婦人の姿からは、その昔、どんなことが実際にあったのかうかがい知ることはできなかった。

複雑な家庭からはじき出されるように二十歳そこそこで妙さんは結婚した。相手は家柄は士族だが、経済的には零落した家の次男だった。ただこの青年は兄弟中で最優

秀と目されたために親戚の援助を得て、当時としてはかなりの高等教育を受けていた。妙さんとしては「降嫁」の心境だったようだ。

そして、結婚前に慕情を抱いた若者がいて、結婚後時折妙さんはその人のことを思い出した。妙さんが病に伏せったり、家族に悪いことがあると、自らの道ならぬ（？）思いのせいと受け取って、「私が父ちゃま（夫）を粗末に思ったから」と強い自責の念にかられるのだった。

この論法は妙さんをずっと支配していた。だれかのことを悪く思うと必ず悪いことが自分に返ってくる。よく思うとその人もよいし、自分にもよい報いがある、というわけである。私は確かに妙さんから他人の悪口めいたことを聞いたことがなかった。

妙さんが中年以降にたどりついたのが「生長の家」であった。「白鳩」という雑誌がいつも身辺にあった。はたの者がそれは新興宗教だと言うと妙さんは機嫌を悪くした。宗教ではない、真理の道だというのである。独特の倫理感に貫かれ、正邪善悪という基準でのエリート感（自分は常に正しい）を終生保ち続けた。

善人というのは立派ではあるが、世の中はこの種の人だけで成り立ってはいない。妙さんの夫や子供たち（二男二女）、それに長男の妻たる私だって普通の人間というしかない。普通人にとって底なしの善人というのは煙たい存在となることもある。

私たちの長男が二歳くらいのときだった。当時私もフルタイムで働いていて、子供は保育園に預けていた。夫と二人で一日勤務先を休み、遊びに行こうという相談がまとまった。当時、二人の薄給を合わせてやり繰りしていたこととて、公園をゆっくり散策するくらいの行楽だったのだ。

妙さんには告げずに、いつもの時間に家を出て子供を保育園に預け、久しぶりに二人で樹木や池を見て歩いた。

夕方、迎えに行くと保母さんが言った。「急に発熱したので自宅に連れていきました。ご両親とも連絡が取れませんでしたので」私たちは青くなった。子供の病気にではなくて、妙さんに黙って出かけたことがバレたのに、である。

自然食通信58
隔月刊／定価五七〇円
〒二四〇円
特集 水を汚しているのは誰？
味噌汁や米のとぎ汁を流すと魚が棲めなくなるって本当？合成洗剤の毒性を棚上げにしたまま流布する生活雑排水悪玉説を検証します。河川に流れ込む農薬、化学肥料、放射性物質、地下水に広がる有機溶剤などの深刻な汚染を各地からレポート。急成長する水ビジネスの危さも、おすすめ浄水器の紹介と共に。
十一月二十日発売
既刊「コメ」特集号
39号 美味いおコメの研究
56号 どんなおコメが輸入自由化の食べたいですか流れの中で
写真集 せんせいはほほーっと 宮澤賢治の教え子たち
撮影・塩原日出夫 文・鳥山敏子
価二二六六円
自然食通信社
東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

しかたなく渋る足を引きずって帰宅すると、案の定妙さんは怒りに凝縮していた。一言もなく謝るほかはなかった。これとて妙さんに言わせれば、自分に無断で遊びになど出かけるから子供が熱を出すことになるのだという。夫も私も妙さんの冷たく固まった怒りに対すると、手も足も出ないような気がした。

この長男には小児喘息があった。公害という言葉がまだないころで、住んでいたのは工業地帯だった。実際、風向きによっては昼間でも雨戸を閉める日があったのだから大気汚染による喘息に決まっていた。

妙さんはそう思わなかった。「ターちゃんはせき込むと唇が紫色になるでしょう。あれはネ、ご先祖様を粗末にしている人があるの。私も考えてみたんだけど、中川さんのおうち（私の実家のこと）へ行ったときネ、お仏壇がほこりだらけで、枯れかけたお花が上がっていたワ。だから今日から中川家先祖霊と書いたものをうちの仏壇に置いて一緒に供養しますからネ。ターちゃんを守ってくださるように」

まったくの善意であるのが分かっているので、私もそんなはずはありませんとは言いかねた。

結局、この子の喘息は五歳のとき一家で郊外に越したとたん忘れたように治っていた。そしてこのころまでに私も妙さんの気心を飲み込んできて、それからの数年はごく仲の良い家族として暮らした。近所の人が私に「あなたのお母さんなの？」と言ったのはこのころである。

数え年で数えても満で数えても今年は還暦じゃない、と妙さんが言ったときは正真正銘の六十歳になっていた。家族はお祝いを言い出しそびれた。間もなく妙さんの末娘が結婚した。

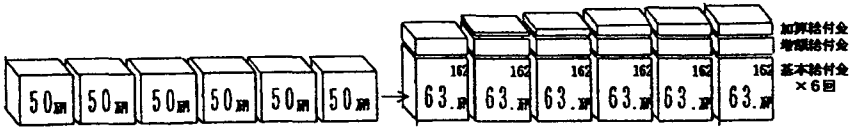
次の年が明けて立春も間近な寒い夜だった。鏡台の前に座ってクリームを塗っていたとき、妙さんは倒れた。意識の戻らぬまま、次の日の深更をその部屋で迎えるころ妙さんは逝った。

事が落ち着いてから私は痛切に思った。穏やかな何年かの暮らしを共にした後でよかったなあ、と。

（文中仮名）

（え・鳥居禎子）

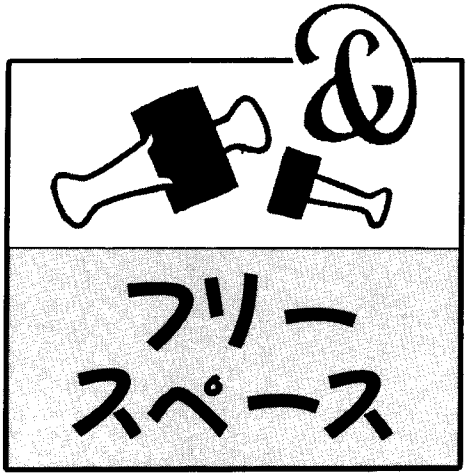
49歳～64歳までの方用の年金プランです



年払い保険料50万円を6年間積立てます。年金は6年後から631,620円づつ6年間給付になります。これに加算給付金、増額給付金がプラスされます。　くわしくはお電話で！

くわしくは「わいふ」あて
電話で資料請求して下さい

わいふ指定代理店
東京海上火災保険株式会社
杉本保険事務所　杉本侑子　☎03-3260-4771



私のボランティア失敗

富山県富山市●橋本慶子

かつて七、八年前、留守を母に頼んでの夫の転勤に際しては、母が高齢であったゆえもあり、何かと気がかりなことが多く、年に何回となく両方の地を往復しながら、家族が離れて住む不安感と焦燥感を絶えず覚えていた。

私自身係累が少なく、子供らは独立して他県に住んでおり、精神的な家族であっても物理的な家族ではあり得なかった。こんな私的な事情の中にあって漠然とではあるが、これからも多様化する社会に、増加するであろう核家族化に伴う弊害を「社会的に」解決できる方法はないものかと考えていた。

そしてそんな矢先、ボランティア労力銀行の存在を知った。

その趣旨は会員同志の助け合いを、一時間一点として労力を愛の通貨とし、各人のライフサイクルの中で、労力・時間の余裕のあるとき、足りないときを活用し、相互に交換し合うことによって、各人の生活に潤いを持たせ、全国どこででも通用されるというものである。

近隣との相互扶助や地域との交流は五年、十年とその地に住み慣れて、やっとスムーズにいくものと思われるが、何かにつけて生活のサイクルの慌ただしい現代にそれを望むのは難しいのではなかろうか。とすればある点では合理的ともいえる労力銀行を媒介に、同じ考えを持った者同志が交流して助け合うのも一方法と考えられ、加えて労力銀行は支部のあるところでさえあれば遠方でも利用することができるのも魅力であった。

例えば私の場合であれば、私が転勤先の地で会員に労力を提供していればその点数で、定期的に留守宅の様子を見に行ってもらうこともでき、特に冬の間など雪深い間も状態を知ることで少しは安心して過ごせるであろうし、また、他県に住む核家族である孫に急にベビーシッターが必要だったりしたときもすぐに対応できると思えた。

そして家族が離れて暮らす場合ばかりでなく、不幸にして病を得た場合にだれしも在宅看護を望むであろうが、それを担う家族の負担は計り知れず、そのほとんどが女の肩にかかり、あまつさえ看病のために職を捨てるともなれば精神的にも経済的にも女の貧しい老後は倍加されるといえる。

そんなときにこそ自分の健康なときに余裕のある時間を上手に活用して得ていた労力交換の点数で他人の労力の提供を受けることができれば、本人はもとより家族にとっても精神的・肉体的な負担は軽減される

のではなかろうか。

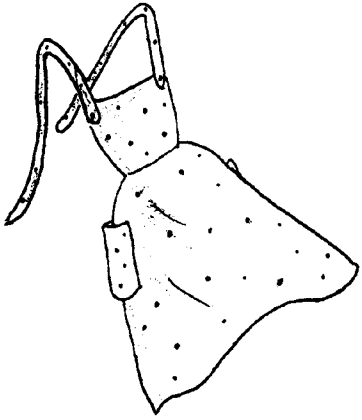
そして労力をお金ではなく、時間に換算することは貨幣価値の変動も気にならないなどの利点も考え合わせ、ほどなく帰郷した機会に早速会員となった。

よく世論調査などで「排他的」ともいわれる当富山にあって、家庭内への他人の介入は少なからず抵抗があるともいえるが、前述のように不備を「社会的」に補うには、これまでの因習や自分の価値判断を他人に押し付けて、あれこれ取りざたする愚を知って、良識を持って人とのかかわりを持つことが大切と意気込み、労力交換は「会員同志」に限られているので一人でも多く趣旨に賛同してほしいものと、友人にも積極的に加入を勧めた。

しかし、富山に支部が設けられてから日が浅いゆえもあって、会員の間にも趣旨が正確には浸透しておらず、活動も手探りの状態であった。

そして会員が四十代、五十代でほとんどが労力の提供を希望する側であり、点数の交換が成り立たないので、お互いに庭の草むしり、慶事の手伝い、障子の張り替えなどの機会を無理につくっては活動の場とした。

だがそのうち、活動の内容がだんだん「仲良しグループ」的な形態になってきて、

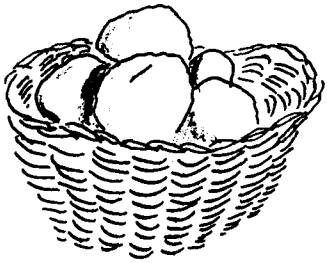


珍しい料理や手芸などを教え合うことが度重なると、それが専門知識としてではなく、いわゆる趣味的な域を出ていないとき、私としてはこれまで、友人同志であれば何げなく善意で教え合っていたことまでが、点数交換の対象となることに疑問を感じるようになった。ともかく、納得のいく活動の場がないので、どこまでが労力交換の範囲なのか判然としないのである。そしてたまに会員の家族に病人が出たりして、当然助け合わねばならないと思えるとき、前述のような土地がらのゆえか、だれもが敬遠しがちで、機会はなかった。これでは将来、老いた自分が他人の労力を必要としたとき、点数の持ち合わせがないことにもなり、何よりこの会がそれまで存続できるのかどうかも非常に危ぶまれた。つくづく民間でつくり上げる会の弱さ、難しさを感じた。これがもし公的機関がバックボーンになって行政の保護の下、会の運営が年を経ても継続される保証があり、点数の行使にも規準を定めて行使するよう関与もし、一つの方法として、病院などと提携してヘルパーの補助的な労力を提供し得るなどの場がつくられるならば心強いと思うのは考えが甘いのだろうか。

また、ボランティア労力銀行の規則の中には会員同志の労力交換とは別に、一カ月に二時間の社会的なボランティアを行なうことが義務づけられていた。そのため、市の社会福祉協会にボランティアとしての登録を行ない、盲人外出介助の講習なども受

け、実際に介助の要請を受けたり、福祉関係施設の野外研修の際の外出介助も経験した。老人病院の入浴介助も労力銀行の会員同志で曜日と時間を定めて定期的に参加するシステムも組んだ。

初めは慣れないゆえもあり、ともかく、



与えられた役目を果たすのに精一杯であったが、少し慣れて参加する機会が増えてくると、ボランティア依頼の用件を私自身、無意識のうちに、選別しているのに気が付いた。つまり自分の都合を優先したり、依頼の面倒なようなものは何となく断わることが多くなった。そんな自分にボランティアに対する意識の甘さを見る思いがし、後ろめたさを伴った、かすかな自己嫌悪を感ずることもあった。老人が対象のボランティアを経験したときのこと、施設の若い職員が老人に向かって話しかけられる言葉にやたらに幼児語があったり、かと思うと性的な揶揄の言葉があったりすることにも違和感があり、レクリエーションのゲームなどに、老人を画一的に参加させ、そうすることが老人にとって喜びになるのだと信じて疑わない管理の仕方にも考えさせられるものがある。もちろん、素人の私がとやかく思う筋合いはないのであって、それなりに臨床的にも有意義な方法なのだろうとは思うが、老人の場合、それまで過ごしてきた人生は各人各様の確たる人格を形成しているものであろうし、中には拒否反応を持ちながらの参加もあるのではなかろうかと、立場を老境に差しかかった自分に置き換えて同情を感ずることもあった。

こんな思いが度重なるにつれ、最初の意気込みも次第に冷え、三年足らずで労力銀行を脱退し、ほかのボランティアも自動的に中止してしまった。

今、振り返ってみると、ボランティア労力銀行には活動の場がなかったうんぬんと、不満を抱いたのは、多分私には奉仕の精神が希薄であり、合理的な考えだと思っていたことが、換言すれば打算的だったといえるのかもしれない。現実に富山支部は人数の増減はあったにせよ現在も存続しているのだから。

何はともあれ、わずかな体験からいえることは、ボランティアをするにしても真摯に相対するには相当の覚悟も必要であり、少なくとも健常者の立場から「余暇をボランティアでも」などと安易に考えることだけは絶対すまいと思っている。

遺産分割

東京都台東区●嶋　たか子

姑が急逝してから約三カ月が過ぎて一段落したので、遺産相続手続きの段階となった。

亭主の妹や弟が驚くほどの金額を残し

て、死去したのである。姑は着たいものはなし、食べたいものはなし、行きたいところはなしという暮らしの中で「お金が大事」が身上の人であった。

バブル経済がまだ盛んであった五年ほど前に姑は土地を売却した。税金の支払いをして手元に残った金額をそのまま預金し、五年後には利息も大きく付いて億に近い金額になっていたようだ。亭主がしっかりと財産管理をしていたので、これだけになったのかもしれないと思うが……。

葬儀には十分なお金をかけて立派なものであった。姑の弟妹たちはとても喜んで何度もお礼の言葉を発していた。だが、姑本人から聞くすべはないが、生前は質素な生活を旨とし、あまりにもぜいたくな葬儀が人生最後のほんとうの花道となり驚いているのではないかと思う。

七七忌に納骨をし初彼岸も済んだところで一段落したので、四月に入り遺産分割ということになる。私が週一回勤めている法律事務所の弁護士に分割協議書の作成を依頼することになった。

亭主が大まかな分割案をつくり、法律事務所へ二回足を運び、その後は私が出勤日に両者の伝言役をして原案ができた。

原案では先祖の供養と墓地の維持費をプラスした金額を亭主が相続し、残額を等分にするということにした。相続人全員が集まり検討することになった。

亭主のきょうだいは兄一人、妹二人、弟一人の五人である。兄は十年前に四十七歳で姑と同じ脳出血で急死した。二人の遺児が代襲相続することになる。

原案は全員が異議なしで了承された。弁護士は亭主の相続分が少し多すぎて、ほかの人たちからクレームが出るかもしれないと懸念していたが杞憂であった。結局、予想もしない大金を手にできるのも亭主がしっかりと財産を管理していたからだと、みんながそう感じたようである。

いよいよ五月下旬に全員がわが家に集まり、弁護士立ち会いのもとで分割協議書に署名捺印して遺産相続が終了した。血族に無縁の嫁の私には相続の権利がないが、同席していた。

姑とは十数年前から同居し、ここ三年ぐらい前から痴呆の症状が出ていた。亡くなる一年前からは大分欠落部分が多くなったが、寝込むことはなく自分の身の回りのことはどうにかできた。亭主からは姑の面倒を見るのは嫁として当たり前であると言われどおしであった。とうとう「ありがとう」の一言もなく過ぎたのである。

こういうことを考えて、千万円単位のお金のやり取りを目の当たりにすると、何とも割り切れない複雑な心境であった。現行の法律では、たとえ何十年寝込んだ親の面

倒をみても、嫁には遺言のないかぎり相続の権利はないのが実情である。

だが、私には弁護士の紹介料として二万円が手渡された。弁護士への報酬金と分割当日の昼食代金として別にしてあったお金が、四万円残ったのでその半額となったのである。

何ともわびしいかぎりであったが、このわだかまりが解けずに残っている私は、相当欲張りな人間なのであろうかと自問自答している。

姑の死

神奈川県横須賀市●細野清美

今年の夏は雨ばかりで涼しく、その分九月に入ってからは、忘れた夏を取り戻すかのように暑い日が続いたりした。

八十六歳の姑にとって、この残暑を乗り切るには、もう体力が衰えすぎていたようだった。気温が上がると体温も一緒に上昇するような感じで、九月に入るとちょくちょく高熱を出し、そのたびに元気を失っていった。

食べ物がのどに落ちなくなり、何とか飲み込ませようと、指で落とし込む手助けをしたり、つるっと飲みやすい物を、と考えて三度三度を食べさせた。

が、そのうち尿の出方も悪くなってきた。脱水症状になっては大変と、水分だけはスプーン、あるいは水のみでどんどん飲ませていた。

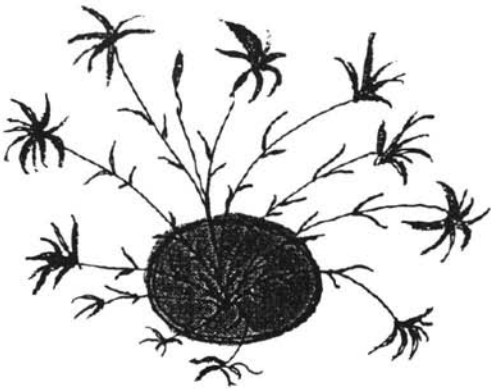
九月二十四日金曜日のお昼ごろ、姑が急に意識が朦朧としたような顔つきになった。私は慌てて、近くの小学校に勤務する義姉に電話をして来てもらったが、義姉が到着したとき、姑は寝入っていた。

夜には兄弟四人に電話をし、市内に住む者はその夜駆けつけ、市外に住む兄弟は土曜日に姑に会いにやってきた。金曜の夜と土曜の朝には黒ずんだ便がたくさん出た。

土曜から月曜までは落ち着いた状態で、姑の意識はしっかりしており、こちらからの話しかけにはよく分かっているようだった。ただ、姑は一年ほど前から言葉は出ない状態だったので話は一方的ではあった。

少し安心していたところ、火曜日の午後、また意識混濁の様子が表われ、「いよいよか」と思った私は夫に電話をし、帰ってきてもらった。が姑はまたもぐっすり寝込み、何事もなくその日も過ぎた。

水曜日は訪問看護婦さんが来る予定の日になっていて様子を見てもらったが、姑ははっきりとした顔をしていた。入浴は無理なので、全身を二人できれいにふいて、姑もさっぱりした顔をしていた。



その看護婦さんの話では、ある九十歳になるおばあさんは、意識混濁のまま家庭で、水分とほかにミキサーで粉々にした五目煮を飲むだけで二年間生きていたそうだ。姑も内臓が悪くないしこのまま持ちこたえるのではないかとも思えた。

木曜、金曜は安定していたが、家庭で最期を看取ることになる私としては、一時も落ち着かない。金曜の午後は何となく姑の寝息が弱いような気がして、何度ものぞき込んだ。

悲しいけど、最期の準備をしなくてはならない。新しい寝巻き、そして、薬局にアルコールを買いに行った。

土曜日、いつもはクラブ活動がある高校一年の息子がお昼に帰ってきた。高三の娘もお昼にいて、三人で昼食をした。その後、姑にも医院で出されている栄養のドリンクを飲ませ、少ししてから娘に手伝ってもらい、姑の寝巻きを着替えさせ、シーツも交換した。さっぱりしたベッドに姑を寝かせ、横向きにしたとたんお昼に飲んだ物を吐いてしまった。

姑もびっくりしたような顔をしたが、大した量でもないしそのまま背中をさすり、「大丈夫？　しっかりね」と言っていたら、落ち着いた。

その後、私が二階へ行って用をしていると、階下から娘が、

「お母さーん、おばあちゃんが変だよー」とただならぬ叫び。急ぎ下りていくと、

「ハーハー」

と、か弱い息をしている。自分の部屋にいた息子も呼び、三人で姑を囲んだ。ドキドキする胸を抑えながら、姑の手を握り、もう見守るしかなかった。

「お姑さん、今までよく頑張ったね。五十八年に歩けなくなってからちょうど十年。リュウマチの痛さを耐え、自分の機能が少しずつ衰えていくのを情けなく思いながら、それでも気丈に生きてきた。私たちはそのお姑さんの生きざまを忘れません」

午後二時三分永眠。

駆けつけてくださった十年間の掛かりつけのお医者様の死亡診断は「老衰」であった。

（え・田沼千恵）

お友達に〝わいふ〟をおすすめください

新しい読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。（六人ご紹介くだされば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

〝わいふ〟年間分をプレゼントにお使いください

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

読・ん・で・み・ま・し・た

家族がガンにかかったとき

笹子三津留 著

千葉県松戸市　倉持　和子

若いころに、多くの「ガン死」に出会った私は、「ガンでだけは死にたくない」と、思い続けてきたが、どうもそうはいかないようだ。「今や四人に一人から、三人に一人の時代へ」と、著者はいう。

怖いものはなるべく見ないようにと、四十まできた私も、この一年間は、両目を開けてガンと向き合う日々だった。母がガンになり手術。そして、転移の再手術と、これでもかというほど、知りたくもないガンの知識ばかりが増えてきた。

でも、ガンの悲惨さや恐ろしさよりも、今私は、母と過ごすひとときのかけがえのない楽しさのほうに、心を奪われている。それは母への告知を決断させ、私を支えてくれたこの本のお陰だったと、今、しみじみ思う。

告知など、夢にも考えなかった最初の手術の後、家族のだれもが、母のために事実を隠して生活していた。そんなある日、再発してしまい、転院先の担当医に勧められたのが、この本だった。

うその上塗りも苦しくなってきたとはいえ、根治は無理というところでの告知は、家族にとっても高いハードルだった。けれど、「自分が家族の最もよき理解者と思い込んでいても、それは一面にすぎず、生死を前にした生き方のすべてを、家族が背負うことはできない」という著者の言葉には、さらに高く掲げられた意味があった。

一抹の不安はあったものの、告知後の光景は予想だにしないものとなった。母はいきいきと燃えだした。何よりも著者のいう、「真実をきちんと伝える医師との信頼関係や、家族との偽りのないコミュニケーション」が、母を支えたのだと思う。外科医として、患者の心理的側面まで責任を感じる著者の、幅広い臨床活動にエールを送るとともに、「死ぬならガンで」と言い切る達観した著者のエッセンスを、ぜひあなたにも。

築地書館　一七〇〇円

農文協健康双書

いのちと愛をはぐくむ性教育

養護教諭と担任教諭の共同実践①

全国養護教諭サークル協議会企画

田中紀久美・小西美津江 著

埼玉県所沢市　花岡由美子

はっきりいって、親も教師も性を学ぶチャンスがないまま大人になり、子供を産み、育ててきた人が多い。せいぜい初潮指導を聞いた程度だ。だから、かつては性教育について「寝た子を起こすな」式の認識不足の教師がいたとしても無理からぬことであった。

しかし、マスコミの性情報の氾濫は、教師や親たちに不安と問題意識をもたらし、そうもいってられない状況になってきた。エイズ脅威の増大で社会的な要請も高まり、教科書にも「性」が取り扱われるようになったのだ。

だが、大半の大人は、子供たちにどう話し進めていけばよいのか、迷いや戸惑いで、つい避けて通ってしまう。

内容的にネックとなっているのが〝性交をどう教えるか〟にかかっている。中途半端な気持ちでは興味本位に受け取られがちで、身近な問題でありながら、なかなか踏み切れないのが実情である。

本書は、一人の熱心な養護教諭と小学校高学年の学級担任との連係プレーでつくり上げた、新しいスタイルの性教育の実践活動記録である。

授業案はよく練られ、子供の年齢に合わせた進度で無理がなく、その展開の仕方がすばらしい。「セックス」を伝えた瞬間の子供たちの反応など、楽しそうな授業風景が生き生きと描かれている。

さらに、〝立ち会い出産〟映画を見せる。当初、出血シーンなど刺激的で拒否反応を起こさないかと心配もしたが、感動のあまり涙ぐむ子もあり、いのちの大切さが十分伝わったという。

教材教具をきちんと準備し、「いのちを見詰め、生き方を考える性教育」を目指し、指導した二人の著者たち。そのやる気と熱意がビンビン伝わってくる。

実際に教わった子供たちが、自分のいのちや体の大切さを実感している様子は感想文の中に如実に表われている。

性教育の必要性を感じながら、踏み出せないでいる人にとって、具体的で大いに参考になる実践記録集である。

農山漁村文化協会　一三〇〇円

からだを語ろう、女から女へ

性・仕事・子育て・私の居場所

丸本百合子 著

女が自分自身の人生を生きるために、ダイナミックに変化する女のからだについて、産婦人科医師である著者が、体験を踏まえてアドバイスしている本。

分娩は自分のからだをかけた危険性のある行為なのに「子供を産んだほうが、からだによい？」などという常識のウソに翻弄されてしまったことはないだろうか……。「女の自立」といったって、「性の自立」なしには、人生の自立は果たせないはずなのに。また職場では男並みの働きで健康を破壊して、失意のうちに退職をした女性の話も珍しくない。

女性に関する医療は、時代の人口政策や経済状態によって大きな影響を受けている。が、かなめとなる女性のからだや人生はいつも後回しの実状である。医療も商品である昨今、自分のからだを観察し、賢い消費者となる必要もある、と筆者はいう。

本書は、女性がからだの声をよく聞きわけて、自分らしい生と性を選び取る方法、子育てと仕事の関係などについて歯切れよく解説している。自分らしく生きるためにぜひ一読を薦めたい。

廣済堂出版　一三〇〇円（新）

フェミニズムと表現の自由

キャサリン・A・マッキノン 著
奥田暁子・鈴木みどり他 訳

アメリカのフェミニズム法学者である著者の講演の記録としてまとめられている。

ずっしりと厚みのある本書は、「書かれたものではなく、語られたものとして読んでほしい」という著者のコメントにもあるように、学問的というよりは啓蒙的な読みやすい構成になっている。

アメリカでポルノグラフィーを巡る裁判として大きな問題提起となった映画「ディープ・スロート」に出演した女優リンダ・マルティアーノと出会い、男性にとっての表現の自由と、言論を拒否された立場の女性たちの表現の自由について洞察を深めた著者は、「表現の自由」という問題は法学の分野ではなく市民社会の問題としてとらえ、女性が人間として生きる権利として主張していくことが大切だと述べている。

主な章は――法がすべてではない、差異と支配、性と暴力、プライバシー対対等、セクシャル・ハラスメント、ほか。日本ではまだ始まったばかりの問題なので、本書から多くの示唆を得ることができるはずだ。

明石書店　五五〇〇円（竹）

性・からだ・こころ　悩みはポイ！

毎日中学生新聞連載

村瀬幸浩・堀口雅子 著

思春期は悩み多き時代だ。大人になればたわいなく思えることでも、思春期まっただ中の子供たちは真剣に悩んでいる。

抑え難い性への興味、急激な体の変化への戸惑いや不安、アイデンティティが確立する前のいらだちや葛藤がここでは子供たちの生の声で登場する。彼らは親にも友達にも打ち明けられず、一人で苦しんでいる。

そんな子供たちの疑問や悩みに、堀口、村瀬両氏のアドバイスはいつも率直で温かい。ありのままを受け入れてもらえる安心感がある。これで救われた子供も多いはず。

私たちの時代にもこんな本があればと思わせてくれる。子供だけでなく、大人もぜひ一読を。

東山書房　一五〇〇円（久）

願いをお米にそえて

日本の農家から子供たちへのメッセージ

中村 修 編著

「お米のことを一杯知りたい」と東京の児童がお米屋さんにわたした一通の手紙をきっかけに、減農薬や無農薬栽培で産直を実施している農民と子供たちの交流が始まった。農民から送られたお米を食べた子供たちが、その感想や意見を農民とやり取りする中で、農業やお金や仕事のこと、そして自然や平和について学んでいく。本書はそんな交流の記録である。

「もうける構造になっていないところが農業の豊かさ」との自信に満ちた農民の生き方は、経済優先で突っ走った日本の現状に疑問符を投げる。一方、子供たちのみずみずしい感性が、この言葉を素直に理解していく様子から、「ほんとうの豊かさとは何か」と問えるゆとり教育の重要性を痛感させられるなど、この本の示唆することは多い。

ゆい書房　一三〇〇円（松）

元気凛凛日本の小出版

堂々の28人に聞く2420分

聞き書き 渡辺美知子

どうやら今の日本では、本当に作りたい本を作れば売れないものらしい。普通の人が読むいわゆる「売れる本」を作っている大出版社では絶対に作らない本を作っている小出版社が、日本には数えきれないほどある。

新聞紙より大きい絵本を作ってしまったり、楽譜専門だったり、謡の教本だけ作っていたりといささか頑固と思えるほどにこだわった作り方がうれしい。

登場する誰もが儲けることを第一に考えていず、どこも経営が苦しそうだ。でも、どこの出版社も、ちっとも悲しくならずに、自信にあふれ元気凛々なのが実にいい。こうした出版社が頑張っている限り、まだまだ本で楽しい夢を見られそうだ。

柘植書房　一八五四円（豊）

ねえ、ごはん食べた？

小さな料理人たちへ

おちとよこ 著

共働きの家庭でなくとも、地域活動や習いごとなどで母親が外出する機会が増え、子供に留守を頼むことも多くなった。

本書は子供が〝食べ物作り〟を通して「留守番タイム」を楽しく、かつ創造的に過ごす方法をアドバイスしている。

火や包丁を使わず簡単に作れる軽食のレシピをはじめ、調理器具の活用法、食品添加物の知識、食材の選択方法など、子供が理解し、実行しやすいように平易に紹介。

自分の食事は自分で作る。そんな習慣を子供時代から養うことは自立を促す第一歩だ。

「おなかがすいて困ったら、この本、読むね」とはわが娘の弁。あー助かった！

アスク講談社　一二〇〇円（斉）

旗を掲げた女たち

ドイツ女性考

石川康子 著

アメリカやスウェーデンに比べ、ドイツ女性の情報は日本では意外に乏しい。この一冊は、一年間のドイツ留学を果たした五十代の日本女性が、簡潔・的確な筆でドイツ女性の現実を描いたもの。

財布はがっちりと夫が握り、主婦はピカピカに家を磨きたて、女だけでカフェに入ることにまだ気がねのいるドイツ。妻が病気になれば、自分の食事は作るが妻には作ってやることを思いつかない夫。

男権社会の構造がまだまだ根の深いこの国には、だからこそ、激烈なフェミニズム運動もまた存在する。その反動としての男たちの攻撃もすさまじい。

職を得るために不妊手術を受ける女性、父親が娘に対して振るう性暴力など、ドイツの暗い側面も逃さずに描いている。

北斗出版　一九〇〇円（野）

老親とともに生きる

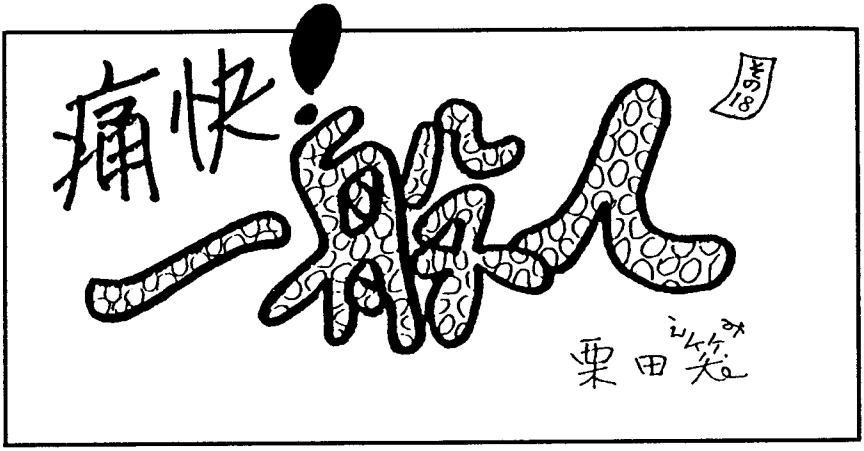
向井承子 著

著者の両親が、娘である著者のもとに身を寄せたのは、今から約二十年前の一九七〇年代の前半。これはそれから二十年にわたって、父と母を看取ってきた著者が、様々の角度からその現実を描いた記録である。

著者の歩んだ「介護」の歴史は、そのまま政府の老人政策の歩みを反映している。豊かさがたたえられながら、これほど貧しい福祉の現実。「在宅ケア」の充実とか、「家で看取られる幸せ」などという言葉が、老人を背負う家族の現実を見えなくしている。

親の老後、自分の老後について、何とかなるさ、と考えている人は、ぜひこの一冊を読んでほしい。

晶文社　一八〇〇円（田）


痛快!
栗田みゆき

久しぶりに引っ越した友達が訪ねてきた…
なつかしいわ〜
でもサー このへんずいぶん変わったでしょ

まーねー
時代の流れだからねー

でも! あの坂の向こうは昔のままだったりして!
あそこは湿原があってホタルがいたとこだよねー

今は公園だよ言わせてもらえば無味乾燥な……
行ってみようよ
へ？
んーやっぱり
昔のままだー
ウソー
今は夏かー
ホタルもいる……
十年前のねー

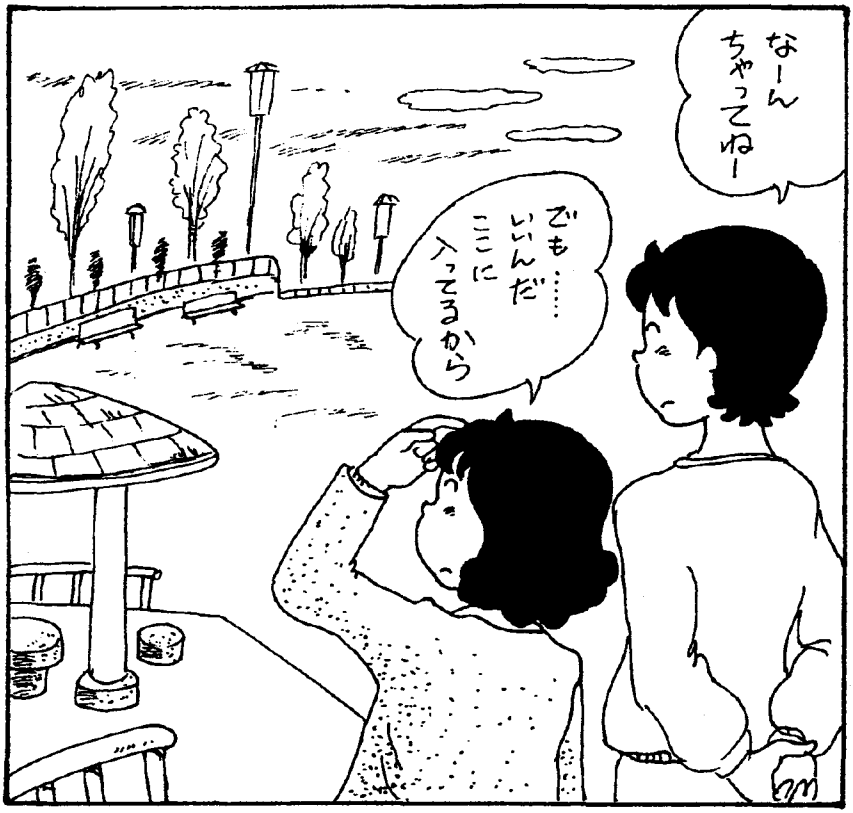
あ、あそこ古い家がまだある！
たしかおばあさんが一人で住んでたよね

ホラーホタルのあかりでおばあさんが見えるよ
あのおばあさんならホタルと話をしそうだわ
まるでおとぎ話の世界だね

あの幻想的なフンイキはやっぱし夜もあかりをつけぱなしで住んでる所だよねー何者なんだろ
あら知らなかったの

あのおばあさん目が不自由なのよ

エー？そうだったのー？
それじゃあんましあかりはいらないわけだナールホドー
…というわけで現代のおとぎ話はこれでおしまいチャンチャン…


なーんちゃってねー
でもいいんだここに入ってるから

「ひとりっこくらぶ」会員募集

「ひとりっこくらぶ」は一人っ子のお子さんをお持ちの方、もしくはご自身が一人っ子でいらっしゃる方のサークルです。

現在、お子さんが小・中学生以上のお母さん方の会員を募集しています。みなさまの参加をぜひお待ちしています。

▼問い合わせ　〒284千葉県四街道市大日三八一－八エステートピアR一〇二代表中村真由美まで

勉強会に参加してください

長岡市で毎週水曜に人生を意識的に生きるための勉強会をしています。

自己実現の一歩を踏み出す勇気やパワーがほしい方、グループやネットワークをつくりたい方、ご参加ください。会費は無料です。

▼問い合わせ　〒940－11新潟県長岡市宮栄三－一三－一四　長沢喜美　☎〇二五八－三二－一六七一

私のPR

「主婦だって好きなことができる」を出版

結婚二十年記念の自費出版。投稿文などをまとめて生き方を辿った。新婚早々夫の男尊女卑的言動に驚き、子育ての中では女・子供の弱い立場を考え続けた。経済的自立を求め大学に再入学。今では臨時教員に。教育問題を題材とした創作が賞を受けたこともあり、併せて掲載した。朝日新聞名古屋本社編集センター　一〇〇〇円　☎〇五八三－八四－九二六五長縄幸子まで

「ウィメンズ・ネット」会員募集

女性の自立を目指す全国ネットワーク「ウィメンズ・ネット」を発足しました。

会では、投稿誌を発行する予定です。書くことの好きな方、女性問題に興味のある方、ぜひ参加してください。年会費は二千円です。

▼連絡先　〒261千葉県千葉市美浜区高洲四－五－四－四〇三　高橋左衛世

主婦のニュージーランド英語研修とホームステイ

英国情緒あふれる秋のニュージーランドでホームステイをしながら、英語学校へ通いませんか？　日ごろの成果を発揮したい方、ステップアップのチャンスを探している方、夫や子供をおいては……と悩んでいる方、思い切ってこの機会に一緒に参加してみませんか？

「主婦たちの英語奮戦記」の著者、青山静子先生も随行されます。

▼日程　九四年三月一九日～三月二九日

▼費用　三十八万八千円

▼問い合わせ　ルナカレッジ名古屋☎〇五二－七六二－六〇三五または木曜一〇時～一六時

☎〇三－三七二七－八〇一三
加藤まで

出版しました「私のカリフォルニア体験」

今やその気になれば、地球のどこにでも旅行に行くことができる。しかし、旅行業者任せではその国の文化・社会の奥深さは分からない。

日本人にとって身近なカリフォルニアとて同じだ。喜びと戸惑いが背中合わせの一年間の生活を失敗談も交えながら語ってみた。

楽游書房出版　一九〇〇円
▼問い合わせ　☎〇二九七－六六－六二〇一八木真知子

鈴木ゼミに参加してみませんか

政治は難しいと、いつまでも男性に任せてはおけない。政治改革のまっただ中、女性のために理解しやすい言葉で、前衆議院議員で弁護士の鈴木きく子が丁寧に説明するゼミです。

法律と政治に興味を持って一緒に勉強しませんか。

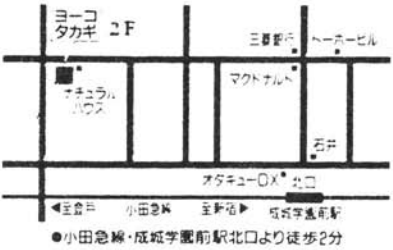
▼日時　十二月十一日（土）午後二時～四時
▼場所　神楽坂エミール
▼参加費　千五百円
▼ゲスト　岡崎トミ子さん
▼テーマ　女性が政治にかかわることの大切さ、どのような政治家を国会に送りたいのか。
▼問い合わせ・申し込み
〒169新宿区百人町一－二二－三
竹田ビル九〇三鈴木事務所内
鈴木ゼミ
▼☎〇三－五三三〇－三九九八

「ヨーコ・タカギ」コレクションご招待

洗練された都市のイメージを優しく表現するヨーコ・タカギ。華やかに、そして上品に……。

着る方のサイズに合わせて一点ずつおつくりもできる、プレタポルテ。

最新モードを集めたファッション・ショーにご招待します。



▼日時　十二月十日（金）午後二時より　粗品を進呈　要予約
▼会場　ヨーコ・タカギ成城店
▼問い合わせ☎〇三－三四八二－七三三二　小山まで

きものでネグリジェをつくりませんか

派手になったり、しみの出たきものがタンスの中で眠っていませんか。それらが短時間ですてきなネグリジェやパジャマに変身します。

絹は肌に優しく健康に大変よいもの。胴裏、八掛、長襦袢からもつくれ、染みの出たものも家で簡単に染め変えられます。

場所をご用意のうえ、五名以上でお申し込みください。

▼時間　三時間
▼費用　一人につき二千五百円
▼問い合わせ　☎〇四五－三八一－一五一四　夜八～九時
グループきもの代表秦節子まで

連載5

私を襲った老人問題

早川 裕子

●――保証人問題の浮上

六月十六日、とよみを迎えにVホームへ行ったとき、初めて園長に会って長期入居に関する話を聞いた。五十代とおぼしき男性だった。大正六年に親会社が設立、昭和五十七年から老人ホーム事業を始めたこと、万一倒産したときの保障のために、全国有料老人ホーム協会への基金も預かり金として払い込むのだが、これに加盟するには厳しい審査に合格せねばならないことなどを説明した後、彼が最も強調したのは保証人の決定であった。つまり身元引き受け人がいないと、杉田夫妻に何かあったとき存在が宙に浮いてしまうので、ぜひとも保証人を決めてもらわねばならないが、早川さんになってもらえるだろうかというのである。

彼は、十年で償却される予定の入居時払い込み金が、二人に十年以内に万一のことがあって残った場合、保証人というのはその残金の受け取り人であることを強調したが、杉田の場合は二人なので、たとえ一人に万一のことがあってももう一人残るわけで、私にはその可能性はほとんど考えられなかった。むしろ気になったのは、もう一つの義務、「施設側がお世話できなくなった場合引き取る責を負うもの」である。どんなときが「お世話できない場合」なのかと聞けば、暴力を振るったり、精神障害が生じた場合だという。

杉田夫妻の場合、恐らくそういうことはないとは思うが、将来のことは何とも分からない。入院や葬儀の世話は、ホーム側もできるだけの協力はさせていただくと園長は言うが、この老夫婦の将来のすべての事態を私一人で背負い込むのは、正直いって重すぎて不安でならない。即答は避けて、「考えさせてください」と契約書を受け取って応接室を出た。

三階のエレベーター前のソファーで、荷物とともに私を待ち構えていたとよみを引き取って、「杉田さん、また来てね」「今度はご主人も一緒ね」と手を振るスタッフたちにお礼を言ってタクシーに乗り込む。

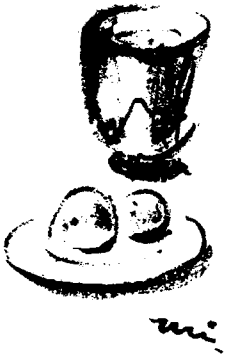
久し振りに家へ帰って夫に会えるというので、とよみははしゃいでいた。一カ月くらいで家を整理して、今度はおじさんと一緒にあそこに入るのよ、と言うと「またあそこへ？　ヘッ……キライな人がいる」と、乗り気じゃない。この間は賛成したのに。

「だって二人だけで暮らすと、おじさんはおばさんの世話で疲れて、また病気になるわよ」「私は世話はかけません！」と強気だ。

今は夫と二人で暮らせる喜びで一杯だからだろう。説得はまた次の機会に譲ろうとあきらめた。とよみは土地カンは確かで、「もう少し行くと右側に○○建設がある」と言うとそのとおりにあるのでビックリ。「うちの家を建てた会社よ」家へ近づくにつれてますます張り切って、「この道を曲がってもいいけど、向こうからも行ける」など的確な指示をするので、「ホウ、おばあちゃんよく知ってるねえ」と運転手にも感心されながら到着。

家政婦の平野さんが迎えてくれたが、孝は朝からS病院へ週に一度の診察に出かけたきり、十二時過ぎなのに戻っていなかった。預かり金を清算して返さねばならないし、保証人の話もあるので、待つことにした。

「裕子さん、服が汚れるからこれに着替えて」と自分の服を持ってきて勧めるのを何度も振り払いながら、契約書を読んだりして待つことなんと二時間、やっと帰ってきた孝をとよみは大声で「お帰りなさい」と迎え、孝はニコニコと照れている。



取ってあったおすしを四人で食べたのだが、とよみは孝のほおがこけたと心配し、「もっと食べなさい」と自分のを孝の器に入れ、孝はそんなに食べられないと、とよみの器に戻す。それの繰り返しばかり。もう見ていられない。

急いで帰り際に保証人のことを話すと、

「あなたになってもらおうか」
「私がですか？　でも……」
「これは形式的なものでしょう。金はワシが払うんじゃから」
「でも、万一の場合の遺体の引き取り人でもあるようですよ。言いにくいことだけど」
「ああ、そういうこともあるのか……」
この日はこんなことで別れた。

●――叫び続ける緊急通報

その二日後のことであった。外出先から帰って留守電のボタンを押すと、突然甲高い女性の声が叫びだした。
「緊急通報、緊急通報、すぐ来てください、すぐ来てください、ゼロヨンニー……」とそれは杉田の電話番号である。これが三回も繰り返されたのだ。
「えーっ、また何か？」と驚き困惑する私の耳に、今度は落ち着いた男性の声が入ってきた。
「えーこちら××電話局です。ただいまのは緊急電話テストでした」
ガクッ。しばしぼう然。何という人騒がせ。ああ、だけどよかったテストで。その喜びの大きさは、脅かされた腹立ちを消して余りあるものがあった。
これが石井さんのつけたがっていた緊急電話というヤツか。今日ついたのだな。それにしても、こんなのが夜中に鳴り響いたんじゃたまったものじゃない。〝すぐ来てください〟ったって、交通機関もない夜中にどうして行くのよ……。
驚きと怒りと喜びが静まると、今度はこんな雑念がわき上がる。そしてその到達点は、〝やっぱり老人ホームだ！絶対入ってもらわなきゃ……〟となった。
ああ、だけどそれには保証人が……と堂々巡り。
保証人については、あの晩母に電話して相談したら、やはり心配し、孝の甥である福山の杉田守氏にまず頼むべきではないかと、自分が手紙を書いてみようということになった。
そうこうするうち七月十四日、Vホームの園長から電話がかかってきた。口調からは、困惑の様子がありありと読み取れた。杉田夫妻が昨日二人でホームを見に来たが、保証人の件がこじれているので、契約を延ばしたいと言われて参っていますというのだ。私は不安な気持ちを訴え、広島県に甥がいることを話したのだが、「何かのときにはできるだけ協力しますから、何とか早川さんにお願いできませんでしょうか」と懇願された。
頼まれるとイヤとは言えない性格の私、結局引き受けることになった。今私がここで断わったら、二人はもうホーム入居のチャンスを失い、そのうちにまた大変な事態になりかねないという危機感も働いた。
早速孝に電話したら、彼は元気なくすねていた。母の手

紙を読んで、はっきり断わられたと（母はそんなつもりはなかったようなのだが）思い込んでいたらしい。私が引き受けたから、と言うと感謝し、契約を二十三～四日、入居を二十八～九日と、大体の予定を立て直した。

そのとき、「ちょっとお耳に入れておきたいのだが……」と孝が、福山の甥のことを話しだした。ホーム入居について話し、保証人をと頼んだら、守の妻が反対して、高すぎるからもっと安いところが探せないかとか、財産整理が第一で、保証人なんてのは二の次だと言われたという。「お恥ずかしい話ですが……」と孝は言い、「一度も見舞いにも来ないでいて何だ！と怒鳴ってやりたいくらいだった」と結んだ。

それを聞いて、〝こんな根性の人たちだったのか〟と、私も驚いた。孝が払うお金なのに、〝高すぎる〟と言ったり、〝財産整理が先〟などと言うところを見ると、遺産をねらっているとしか思えない。将来こんな人たちと、遺産争いの泥沼にはまるのは、つくづくゴメンだと思った。

契約書のコピーを当方へも一部送ってもらって、夫にも読んでもらっていた。彼も、私が一人で保証人になることに一抹の不安は抱いていたが、私の決心を話すと、あえて反対はせず、「そうか」と一言。

皆目分からない将来のことを、今から心配してすくんでいては始まらない、というのが私の出した結論である。それよりも、現在考えられる最善の策を取るしかない。将来のことは、そのときそのときで、またベストの方法が取れるよう、考えていくしかないのだと。

そう思ったら、気持ちが軽やかになって、書きかけの原稿用紙に向かった。

●――紆余曲折の末の契約

ところがその翌日にもう、孝から「入居は取りやめたい」と言ってきたのだ。

「ええ?! どうして?」と聞くと、

「ばあさんもこのところ機嫌がいいし、ワシも体の調子がいいんで、このままやっていけるんじゃないかと思って……。それに〝介護料〟というのを忘れとって、これを入れ

ると毎月入る家賃より高くなって赤字になるんじゃよ」
「介護料はおじさんたちの場合は要らないと思いますよ。何ならVホームに電話して確かめてみましょうか？　それに家賃のほかにおじさんの年金やおばさんの恩給もあるんでしょ？」
「ええ、まあ、それはありますがね」
「おじさんの体の調子が今よくても、いつ何時どうなるか分からない年でしょ？　この間倒れたときだって予想してた？」
「いや、全然思いもよらなかった」
「だからね、元気なうちに、動いておかなきゃいけないのよ。動けなくなってからでは遅いんだから」
「そうか、そういうことだねえ」
　Vホームに電話して介護料について確かめると、二人の場合はやはり要らないというので、また孝に電話して報告。
「じゃ、やっぱり乗りかけた船だから、乗りましょう」という孝の言葉で幕を閉じた。
　その翌日、七月十六日のことである。夜七時ごろ電話が鳴ったので受話器を取るといきなりとよみの大声が響いた。
「主人が三千八百万円も払ってVホームに入ると言いますが、青いものが一つもないのでやめたいのです。お願いします」
　私はうんざりして、代わった孝に、

「それで、おじさんはどうなの？」とこのうえなくぶっきらぼうな調子で聞く。
「まあ、ばあさんはああ言うとりますが、いまさらやめることもできないだろうから、鉢植えでも入れようかと思っとります。しかしそうなると、また雑費が二、三万かかるんでねえ」
　私は怒り心頭に発した。
「私はね、おじさんたちを無理にVホームに押し込もうとしてるんじゃないのよ。おじさんの体のことを心配して、これからは食事の心配もなく快適に暮らしてほしいから、なのよ。緑の多いホームは、遠くて不便だからって、みなで話し合ってここに決めたんでしょ？　体と緑とどっちが大切なのよ。そのくらいのお金が何なの？　私をこれ以上

苦しめないでよ」
「分かりました」
そして四日後の七月二十日、「〇〇銀行の者ですが、今杉田さんのお宅へ伺っています」と電話が入った。
「金額が大きいし、お年寄りなので、ちょっと確認するためにお電話したのですが、今日Vホームへ三千七百四十九万円振り込んでもよろしいんでしょうか？」
「はい、結構です。お願いします」
二十四日に契約とついに決めたのだが、そのとき振り込みの控えが必要なのである。
そして二十四日二時、私がVホームへ行くと、杉田夫婦が家政婦の谷口さんを伴って、副園長と待っていた。入居契約書や施設管理運営規則などに一つ一つ目を通し、署名捺印するので、(私も実印や戸籍謄本などが必要だった)かなり時間がかかり、最後に部屋を見て、三つある洋服ダンスの配置などを相談してからホームを出たのは四時半ごろだった。夫婦とも一応覚悟ができて落ち着いていたのでほっとした。
が、翌日もう孝が、契約のことで電話をしてきた。
「返還金受け取り人なんですがね。ワシたちがアカンようになったときは、あなたでええんじゃが、元気なうちに何かの事情で出ることになったときは、ワシにしてほしいんじゃが……」
「それはそうだと思いますけどね」
「しかしそれがどこにも書いてないんでね、一筆入れてほしいんじゃが、裕子さんから頼んでもらえんじゃろうか」
Vホームに電話すると、園長はいかにもあきれたという口調で、
「へえー、そんなことを言ってくる人は初めてですねえ。まあそんなにおっしゃるんなら、覚え書きとして書いておくことはできますがね、それにしてもねえ、早川さんもまあ大変ですね」
私は早くも不安になって、これを伝えるときこう付け加えた。
「おじさん、ここへ入った以上はみなさんと仲良くして、ずっといるつもりで暮らしてくださいね。おうちがあるからって、ちょっとしたことで気に入らないとすぐ出たりしないでね」
「ええ、まあそんなことはないと思いますがね」
「おばさんがわがままを言い出しても、おじさんがなだめて説得してくださいよ」
「はい、そうしましょう」
私は、ひそかにこう腹を決めて落ち着いた。〝もし、二人のわがままであそこを出るなんて言い出した日には、私はもうお世話はできませんよ、と言うことにしよう〟。
(文中の人名は仮名です)
―つづく―
(え・佐藤瑞江子)

わいわいがやがや

昼休み公害

横浜市磯子区●十文字圭子

私は今、後悔している。やっぱり、文句なんか言わなきゃよかった。

ジョギングしていたら背中に矢が飛んでくる時代だもの、何をされるか分からない。ましてや小さな子供を抱えているんだから……。主人に言われるまでもなく、まともな人間ばかりじゃないんだから、この世の中。

家の前には、工事途中の道路がある。いずれは四車線の立派なのができるはずだが、今は行き止まり。先のほうにはまだ家が建っている。お決まりのいつできるともしれないお役所仕事の成れの果てなのだが、住んでいるこちらにとっては幸いしてる。

でも、いいことばかりじゃないのが世の常で、いつのころからか昼間の無料駐車場と化していた。勤めに出て日中いなかったときはまるで気に留めてもいなかったのだが、実にうるさい。

何も遮る物がない炎天下、四、五台がエンジンをかけっぱなしで、十一時から二時、三時まで、昼食と休憩（要は昼寝）をするのである。

「三食昼寝付き」は、その昔主婦のモノだったのに、今じゃ大の男が堂々とハンドルに足をのせ、指の透けた靴下見せながらするものとは、ああ情けない。妊娠中はまだ我慢もできたが、やっと寝た子供が目を覚ますほどの騒音には黙っちゃおれん。

それで、「エンジン切ってもらえませんか」といつものように言ったらば……「あんたにおれの安眠妨害されるいわれはない！」とかみつかれてしまった。

予想外の展開にワナワナと怒りが込み上げてしまった私は、あまり質のよさそうじゃないトラック野郎とは知りつつも会社に直接苦情の電話をしてしまった。

多分あのあんちゃんは注意を受けただろうし、私が原因だということも分かるだろう。そこで急に不安になってきた。「ミンボーの女」ではないけれど、一般庶民は暴力団でなくとも、すごんでいるやつはやっぱり怖い。

悔しいけれど、そんなことに負けたくはないけれど、子供ができるとますます怖い。もう、今度から黙っていよう。

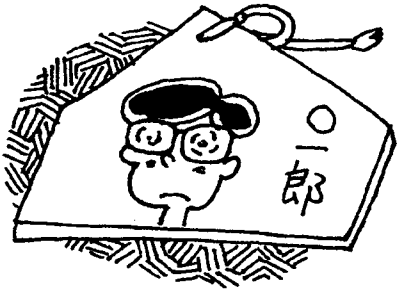
湯島通れば

奈良県生駒郡●山口幸子

昨年の春、姪の結婚式に出るため夫と二人東京へ行った。夜行バスで朝早く着き、式までの

時間待ちに湯島の天神さまへお参りした。

車の行き交う街中にありながら、ひっそりとした雰囲気が保たれている境内には青さびたガス灯が立てられている。



「この何げない神社の名前をだれ知らんもんがないのは婦系図のおかげや、ほんまに泉鏡花さまさまや」と夫。

「それとこの歌のおかげやわ、湯島通れば思い出すお蔦主税のォ心意気」と口ずさみながら絵馬を見る。

鈴なりの絵馬は、それぞれ真剣な願いを書いたものばかり。

その中で特に達者な女文字が目についた。

○野○一郎　昭和○○年○月○日生

・択一が通りますように

・国家公務員試験で三十番以内に入りますように

・通産省に就職が決まりますように

母

「うわぁ、これきっと東大生やね、灘高あたり出てストレートに入りやったんやろ」

度の強い眼鏡を掛けた○一郎君はスラリとした美青年？

和歌山辺りの出身で、幼いころから母親の敷いたレールの上を脱線せずに進み続けてきた。ゴール目前、就職先まで決められている……などとイメージがわいてくる。

何かで読んだが国の省庁内で「大学」と呼ばれているのは東大だけ、それ以外の大学は「ほかの学校」と呼ばれているとあったが……。

新聞の人事異動欄に載る官僚の学歴もほとんどが東大卒とある。

「偉い子持ったら、こないなるんかな、母親は」「勝手に決めてどないするねん」と夫。「まあ、うちらの子には縁もゆかりもないことやけど」

あれから一年四カ月が過ぎた。

○一郎君はこの春、卒業しただろう。司法試験に通り修習生として勉強中なのか、それとも通産省に入ったのか。

ＡＢＣテレビの人気番組で「探偵！ナイトスクープ」というのがある。

視聴者の依頼に応じて人探しもしてくれる。この番組を見るたびに○一郎君のこと、追跡調査してもらいたい気がしてならない。

テーマパークの裏側で

大阪市旭区●宮崎貴子

先日、現在工事中の志摩スペイン村の様子をテレビで見たのだが、「開催されるのが楽しみですね」と明るく話すキャスターの笑顔とは裏腹に、私は暗い気分になった。

このようなテーマパークの映像を見るたびに思う。わざわざ自然を破壊してまでつくる必要があるのだろうかと。

少し前になるが、大阪で開催された「花と緑の万博」をみなさん覚えていらっしゃるだろう。緑を大切にしましょう、花

と緑で町を一杯にしましょうと、大阪は町ぐるみで花博ムードを盛り上げた。確かに町は美しくなり、文字どおり会場内には花が咲き乱れていた。しかしその陰で、犠牲になった花や木がどれほどたくさんあったことか……。

あの場所は元は市民のための貸し農園だった。現代の住宅事情ゆえ、あの場所は市民のささやかな夢と楽しみの詰まった畑であり、庭であった。わが家でも激しい倍率をくぐり抜け、やっと手にした大切な畑だった。

しかしあるとき突然、将来ここに万博ができるということで強制撤去させられてしまった。うそでしょう？　信じられなかった。今まで一生懸命育ててきた野菜たちを無理やり引っこ抜くっていうの？　やっと土も肥えてきて、さぁこれからだってときに。私たちがどれほどの時間とお金と愛情をつぎ込んできたかを知りもしないで。

数カ月後、柵がつくられブルドーザーが私たちの畑を容赦なく掘り返しにかかった。「何が緑一杯だ、花を咲かそうだ」貸し農園を楽しんでいた人たちは口々にそう言った。中には「こんなうそっぱちの偽善の万博なんか行くもんか」と言う人までいた。

事情は違っても同じようなことが日本国中で起こっているのかと思うとやりきれない。テーマパークの話題を耳にするたび、犠牲になった自然を思い胸が痛くなる私である。

ああ電気釜

川崎市多摩区●岡田美幸

結婚十年目ともなると、そろそろ電気製品を買い替えたくなるようだ。

電気掃除機とテレビはすでに五年前に独身時代から使っていたものを買い替えた。

ステレオはCDが普及したため、肩身を狭くしながらも部屋の片隅に鎮座している。

電気炊飯器と冷蔵庫は結婚したときに買ったもので冷蔵庫は元気に活躍しているものの、炊飯器はどうやらフッソ加工の内釜も多少傷が入り、ご飯にベトベトした糊のようなお焦げができるようになったし、蒸気の吹き出し口から蒸気が上がらなくなり、上蓋にひび状のものが入っているし、色も変色してきて、回りから湯気が立ち上がるようになり、そろそろ買い替え時かなと思って一代決心をして新しい電気炊飯器を買うことにした。

つい二週間ほど前、新しい電気炊飯器が届いた。早速その日からその釜でご飯を炊いた。なかなか都合よくできていると思う。新しい釜というのもいいものだ。

それにしても、その前日まで、毎日毎日ご飯を炊いてくれていたお釜をどうしたものだろう。もう用はないからということで即ゴミとするには、あまり

にも働き者であったような気がする。

「新しい釜を採用したからあなたはもう首よ」というようで、どうも忍びない。何だか高齢化社会の問題のようで、楢山節考のようで。とりあえず今までよく働いてくれたことだし、新しいお釜も故障するかもしれないし、しばらく待機してもらって、鑑賞して感謝してみようかということで今日まで台所の片隅に鎮座している。

でも台所も狭いことだし、あしたゴミ置場に置かせていただこうと思う。どんなふうに処分されるのだろう。

日本の人口が一億二千万だとして、世帯数が四千万くらいだとして、十年ごとにお釜を買い替えるとしたら、毎年四百万個もの電気釜が捨てられることになる。これは大変なゴミ問題に違いない。そう思いませんか。

愛想笑いの相手は？

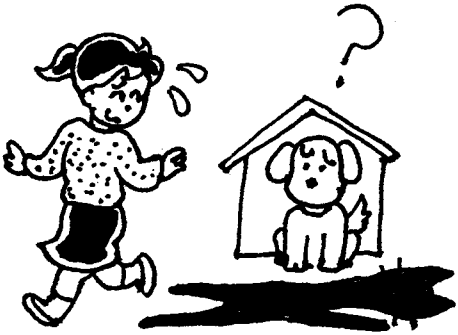
新潟県新潟市●長谷川正子

私はけっこう曲がったことが許せない性分である。切符売場で割り込みをする人がいると〝後ろに並んでください〟、書店で万引きしかけているこわもての男子学生に〝レジならあちらですよ〟と、ついつい一言やってしまう。

一度は、平手で殴られたこともあるが、見て見ぬふりはできない。子供の友達にも、怖いお母さんとして有名である。しかし、こんな私でも自分から腰を低くして愛想笑いをしてしまう相手がいる。それはだれか？実は犬なのだ。

私は犬が大嫌い――というよりは怖い。近所は大きい家が多くやたら番犬がいる。門の前を通ろうとすると、「ビクッ」と彼の耳が動き、こちらを見る。すると私は子供たちには決して見せないような、へらへら笑いを顔に浮かべて会釈をしてしまう。彼はフンッと鼻を鳴らして、だるそうに再び眠り始める。

犬は自分を恐れる人間を見抜くというから、きっと私のことをばかにしているに違いない。「なぜ？」と尋ねられても分からない。別にかまれた記憶もないのだけれど、あの大きな歯や、ほえる声が、ただただ怖い。道を歩いているときに、ヒタヒタっと音がすると「野良犬では？」と飛び上がらんばかりに驚いてしまう。



友人が飼っているマルチーズやチワワすらそばに寄ってくると体が硬くなって、会話も途切れがちになる。きっと私の前世は猫だったのだろう。遠い遠い昔、追いかけ回された苦い記憶が、何十億個の脳細胞の一部に残っていて、こんな情けない私にしてしまうのに違いない。

だれでもいいから、犬と仲良くできる方法があれば教えてほしい。子供たちまで犬嫌い（犬恐怖症？）にしたくはないので。

物を整理して思う

福島県南会津郡●室井邦夫

妻が脳内出血のため倒れて二年八カ月になる。

半身不随の妻を自宅介護しながら私は家事一切と畑仕事を一人でやっている。

妻が倒れて一番困ったことは何がどこにあるか分からないことであった。

自分の家であって自分の家でないような気がした。

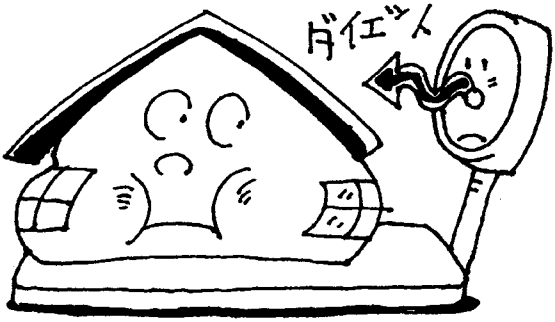
妻が再び台所に立つことはないだろう。これからは私のやり方で家事をしなくてはならなかった。

今年に入って毎日家の中、土蔵、物置、小屋の整理をした。

衣類については三人の娘が整理してくれたので、それ以外の家具、什器(じゅうき)など一切の物である。

不必要な物が山ほど出た。

ほとんどゴミ収集所に運んだが、昔の生活用具は参考になると思って、改築した小屋に保存のため棚をつくって展示した。



この整理でわが家の物はくまなく分かった。

妻がこんなことにならなければ一生分からなかったろう。

今まで家、土蔵など建物の管理は私がしていたが、中の物は一切妻が管理していた。

今度家の物すべてを掌握したことで新しい気持ちになった。

物は大事であるが今度整理してみてなくてもよい物がかなりあることが分かった。

不必要な物は無駄である。私は簡素な生活が好きで衣食にはあまり関心がない。したがって本以外最小限度の物しか持っていない。

身辺に余計な物がないことがよい。必要以上に物があると心の負担になる。

上手に物と付き合うことは難しい。

物を求め物に縛られては本末転倒も甚だしい。

物の奴隷となっては心の自由を失う。

ハングリー精神があってこそ心は充実する。

近くに嫁いでいる次女が妻と私のために時々食べ物を持ってくる。持ってくるなと言っても持ってきて冷蔵庫の中に入れていく。

親を思う心は分かるが私は憂うつになってしまう。冷蔵庫に何もないとき私は快い。

何を食べようか、何を買ってこようか、そこには他人に干渉されないささやかな夢がある。

腹が減って食べるときほど幸福を感じることはない。

衣食余って心が貧しくなる。悲しいことである。物は必要である。しかし必要以上の物は人間をダメにしてしまうのではないか。

物に支配される人間であってはならない。

(え・小宅昌枝)

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二四六号の特集テーマは「男の子の育て方」です。

男女差別なく子供を育てたい、ということはだれでも考えていることですが、その一方で、男の子だからこそ家事を仕込みたい、と考えている方、いやうちはやはり男らしく、と様々の育て方があると思います。あなたのご家庭の「男の子」育ての実態と、できたらその結果についてレポートしてください。分量四百字詰原稿用紙で十枚－十五枚。締め切り十二月二十五日。

●ワンポイント情報

今回は投稿でなく、次のアンケートを実施することになりました。お手数ですがご回答のうえ、左の部分を切り取って締め切り(十二月二十五日)までにお送りください。

●女の時事放談

今回のテーマは、「マスコミの偏向は許されないのか」です。

テレビ朝日の報道局長が、偏向報道を指令したとやらしないとやら、国会への喚問まで行なわれて騒ぎになりましたが、マスコミというものが、一定の主義主張に基づいて報道してはなぜいけないのか、いけないとすればなぜなのか、徹底的に議論してみたいと思います。

日時は十二月十七日（金）二時より

場所は未定。出席ご希望の方は編集部に十五日まで、電話でお申し込みください。

ワンポイント情報アンケート（点線からお切り取りのうえ、編集部へ郵送してください）

1　あなたはご両親が年老いたとき、面倒を見るおつもりがありますか。

イ　ある　ロ　ない（その理由）

2　イにマルをつけた方は、次の質問に答えてください。

●介護が必要になったときはどうしますか。

イ　家に引き取って同居し、主として自分で介護を引き受ける。

ロ　老人病院かホームなど、適当に施設を探して入ってもらい、時々通う。

ハ　自分の家にいてもらい、日常的にはヘルパーをつけ、通って面倒を見る。

ニ　兄弟の家をたらい回しにする。

ホ　今も同居しているのでこのまま。

ヘ　まだ考えていない。

ト　その他

●介護や生活にかかる費用は。

イ　親自身が持っている。

ロ　親なのだから喜んで（しかたなく）払う。

ハ　社会保障でカバーしたい。

ニ　兄弟で持ち寄る。

ホ　跡継ぎが払うのが当然。

ヘ　その他

●同居して介護を自分で行うつもりの方は、痴呆や長い寝たきりなど、親がどんな事態になってもやり抜くつもりがありますか。

イ　ある　ロ　ない　ハ　分からない

以上どうぞよろしくお願い申し上げます。

わいふ投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

◆エッセイスト・クラブ
(一六〇〇字まで)
随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

◆ズバリ一言
(八〇〇字まで)
マスコミ、事件、商品、サービス、その他目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

◆奥さんから外さんへ
(一六〇〇字まで)
いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetcをお書きください。

◆マイ・ジョブ/マイ・プロフェッション
(一六〇〇字まで)
あなたのしていらっしゃるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

◆サーブレシーブ
(八〇〇字まで)
本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

◆人間マンダラ
(一六〇〇字まで)
あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

◆親の言い分・教師の言い分
(一六〇〇字まで)
それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かっては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的にお書きください。

◆フリースペース
(八〇〇字まで)
どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

◆わいわいがやがや
八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

◆読んでみました
(八〇〇字まで)
書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

◆情報コーナー
(三〇〇字まで)
お知らせ、募集、お願い、捜し物、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまと

めてください。

◆サークルだより
（八〇〇字まで）

〝わいふ〟には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたい、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号まわしとなります。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思います。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

【コラム以外の投稿募集】

◆特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

◆ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますので、募集欄をごらんください。

◆特別寄稿　ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適当と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

【注　意】

●投稿は一人一篇に限ります。

ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレシーブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮ください（書き直すことになるので）。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●十一月二十六日、〝わいふ〟の創刊三十周年記念パーティーが四谷のスクワール麹町で行なわれました。初代編集長の高木由利子さんを宝塚市からお招きし、出席者三百三十人の盛会で楽しいときを過ごしました。

これもすべて〝わいふ〟を支えてくださる投稿者、読者のみなさまあってこそ、心からお礼申し上げます。

●創刊三十年を記念して、〝わいふ〟の歩みを、『変わる主婦・変わらない主婦――投稿誌「わいふ」の描く女の三十年――』と題して一冊の本にまとめました。移り変わりの激しい一方で、三十年一日のごとき女たちの生活の変わらなさにも驚かされます。〝わいふ〟に掲載された特集投稿を中心にしてまとめた面白い読み物です。定価一五〇〇円。ご希望の方は編集部に電話かはがきでお申し込みください。

●以前〝わいふ〟の会員でいらした次の方たちのご連絡先をご存じの方、ぜひ編集部までご一報ください。

高辺芳子、清水由依子、永目利子、星野いづも、のみなさんです。

●昭和五十九年、〝わいふ〟に連載した鯉淵道子さんの手記「父は眠る南の島で」が、一昨年大阪読売の田村洋三記者の「戦争」に取り上げられ、原文のほとんどが転載されたことは以前にご報告しましたが、今回、その記事が「アドミラルティ諸島――新聞記者が語りつぐ戦争」という単行本になって新風書房から発売されました。大変うれしく、ご報告いたします。

●女の生活に政治が及ぼす影響をますます痛感する毎日です。政治冊子「ファム・ポリティク」（仮題）の発行も、生活者の視点から長く続けたいと思っています。創刊号は十二月末発行になる見込みです。

●〝わいふ〟では高齢社会の到来に向けて、「老人ホーム情報センター」を開設すべく、準備を進めてきましたが、各ホームへ送ったアンケートの回収も好調で、来春にはオープンできると思います。ガイドブックでは読み切れない詳しい情報をお届けします。ご期待ください。

では、よいお年を！

□購読申込は……
ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

わいふNO.245.
（隔月刊）
1994年1月1日発行
編集・わいふ編集部
定価460円（本体447円）
（年間購読料送料共4200円）
印刷・平河工業社
発行所・(株)グループわいふ
東京都新宿区矢来町115
東海神楽坂マンション406
〒162 TEL (03)3260-4771・4773
郵便振替 東京5－110430
加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……
必ずお申し出ください。
送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

東山書房（ひがしやま）

〒615-104 京都市右京区山ノ内大町5・3 ☎075(841)9278

〒113-708 東京都中央区新川2・2・1 ☎03(3553)8358

性からだこころ

悩みはポイ！

毎日中学生新聞連載

村瀬幸浩・堀口雅子著

悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けてー」と声を出すことも大事。みんなの悩み－性編、からだ男の子編、からだ女の子編、こころ編に2人が明快に答えます。（中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き）

四六判／定価1500円（税込）

"人間と性"を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

ヒューマン・セクシュアリティ

●編集長●村瀬幸浩●
●企画編集●"人間と性"教育研究協議会
●季刊　B5判・136頁●定価1600円（税込）

13号〈新刊〉《特集》いま、あらためて人工妊娠中絶を問う

特集鼎談　人工妊娠中絶を考える視点
ゲスト　芦野田利子　湯沢満男　司会　原田瑠美子
特集論文「人工妊娠中絶」と「女性の自己決定権」…柴崎和恵
特集ルポ　社会と人工妊娠中絶
三井富美代＋草野いづみ
●「人工妊娠中絶を考える」授業
高等学校＝女性にとっての中絶選択権
高等学校＝男が男に「中絶」を教えるのはアブナイですか？
《サブ特集》子どもの権利条約と性

4～12号　定価1400円（税込）

12号　今日の売買春の現実をどう見るか
11号　思春期の性と教育
8号　性情報・性文化の現況と「表現の自由」と
7号　新教科書がもたらすもの（増刷）
6号　シルバーエイジの豊かな性と生
4号　エイズの現在と近未来（増刷）

直送定期購読者受付中　郵振・京都4-1067番
1年6,400円2年12,800円（送料・税込みです）

女たちの情報紙

ふえみん

femin

婦人民主新聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先　婦人民主クラブ　週刊1ヵ月　650円（送料込）。

東京都渋谷区神宮前3-31-18　電話03(3402)3244、3238

大阪市北区中崎西3-1-5　電話06(371)2429

さべつ・おんな・はたらく・がっこう
アジア・たべもの・せっけん・げんぱつ

わいふ二四五号　一九九四年一月一日発行（隔月刊）　定価　四六〇円（本体四四七円）

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141（各税込定価）
●内容案内呈！

お産って自然でなくっちゃね

ある産科医の真実の提言

吉村正著　［マンガ］清原なつの

「自然なお産」とは、ただ医学的な操作や投薬をしなければよいという、ほったらかしのお産ではない。30年以上にわたり1万5千以上のお産を見てきた産科医が「安全で、感動的に産める」方法をアドバイス。　＊1,300円

お産がゆく

少産時代のこだわりマタニティ

●きくちさかえ著

ゴージャスにも科学的にもナチュラルにも産める現代お産事情を産む側の目で迫る。　＊1250円

お産って楽しいね

●吉村　正・山田桂子著

"ルンルン"産む手づくりお産の実践で知られる吉村病院の実例、体験記。　＊1030円

タイミング妊娠法

●市川茂孝著

自然流産や先天性異常増大の原因は、性交のタイミングに有り!?元気な子の妊娠法。　＊1250円

私らしさで産む産まない

●青木やよひ・丸本百合子著

産み育てる人生も、産まない、産めない人生もそれぞれに豊かでありたい！　＊1250円

らくらくうれしく

水中出産

片桐助産院の現場から

山内孝道著

経験者がみな「よかった」「また産むなら水中で」というお産のすべてをレポート。水（お湯）の中では陣痛がやわらぎ、楽で自由な姿勢がとれる。水中出産のできる病産院と相談にのってくれるグループ一覧つき。　＊1,250円

名もない女の"いのち"の記録！

日本の食生活全集

●全50巻　完結！

全巻を、ぜひ、お揃えください。

★9年の歳月を要して、全巻堂々と完結しました。
★出身県やお住まい県だけでもぜひご覧ください。
★お近くの公共図書館へ、蔵書をお推めください。

●最終回49・50 日本の食事事典Ⅰ・Ⅱとして好評発売中／1 素材編Ⅱつくり方食べ方編　大豆料理4千、大根料理2千種など全国各地の食文化事典！

●全50巻揃価14万5千円　各定価2900円
●A5判上製・本文平均360頁・カラー口絵・月報付

1北海道 2青森 3岩手 4宮城 5秋田 6山形 7福島 8茨城 9栃木 10群馬 11埼玉 12千葉 13東京 14神奈川 15新潟 16富山 17石川 18福井 19山梨 20長野 21岐阜 22静岡 23愛知 24三重 25滋賀 26京都 27大阪 28兵庫 29奈良 30和歌山 31鳥取 32島根 33岡山 34広島 35山口 36徳島 37香川 38愛媛 39高知 40福岡 41佐賀 42長崎 43熊本 44大分 45宮崎 46鹿児島 47沖縄 48アイヌ 49 50総索引

雑誌 09859-1